

大宰府条坊跡 45

—第49・178・184・228・232・247・296次調査—

平成27(2015)年

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡 45

—第 49・178・184・228・232・247・296 次調査—

平成 27(2015)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市の南西部に位置する都府楼南で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書です。

調査地一帯はかつて広大な田畑が広がっていましたが、昭和40年代から宅地造成が行われ、住宅街となっています。

今回の調査では、奈良時代から平安時代にかけての大宰府条坊の道路遺構が明確に確認されたほか、井戸や掘立柱建物など大宰府条坊内の景観を考える上で貴重な成果が得られています。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成27年2月
太宰府市教育委員会
教育長 木村基治

例言

1. 本書は太宰府市都府楼南で行われた大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G. N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 調査対象地の表土除去および埋め戻しは（有）松田造園土木に委託した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は宮崎、狭川、谷由紀子、上村英士（現筑後市教委）が行った。
5. 遺構の空中写真撮影は南空中写真企画（代表 謙山広宣）が行った。
6. 出土した鉄製品の保存処理は綱タクトが行った。
7. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、宮崎が行った。
8. 表入力・写真整理は瀬戸口みな子、市川晴美、吉村有紀が行った。
9. 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
10. 遺物の写真撮影は術システム・レコ（代表 仲村定美）が行った。
11. 図の浄書は、宮崎が行った。
12. 本書に用いた分類は以下のとおり。
 - 須臾器・・・『官ノ本遺跡Ⅱ 一窟跡篇一』（太宰府市の文化財第10集）1992
 - 陶磁器・・・『大宰府条坊跡Ⅴ 一陶磁器分類一』（太宰府市の文化財第49集）2000
 - 土器・・・『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第7集）1983
 - 瓦・・・『宝満山遺跡群4』（太宰府市の文化財第79集）2005
13. 執筆・編集は宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	4
II、調査体制	5
III、調査および整理方法	7
IV、調査報告	8
1、第49次調査	
（1）調査に至る経過と成果	8
2、第178次調査	
（1）調査に至る経過	9
（2）基本層位	9
（3）検出遺構	9
（4）出土遺物	20
（5）小結	55
3、第184次調査	
（1）調査に至る経過	69
（2）基本層位	69
（3）検出遺構	69
（4）出土遺物	75

(5) 小結	81
4、第228次調査	
(1) 調査に至る経過	86
(2) 基本層位	86
(3) 検出遺構	93
(4) 出土遺物	96
(5) 小結	104
5、第232次調査	
(1) 調査に至る経過	116
(2) 基本層位	116
(3) 検出遺構	116
(4) 出土遺物	116
(5) 小結	118
6、第247次調査	
(1) 調査に至る経過	119
(2) 基本層位	119
(3) 検出遺構	120
(4) 出土遺物	120
(5) 小結	120
7、第296次調査	
(1) 調査に至る経過	121
(2) 基本層位	121
(3) 検出遺構	121
(4) 出土遺物	121
(5) 小結	123
8、田中の森伝承地の立会調査	
(1) 田中の森について	124
(2) 調査に至る経過	124
(3) 田中の森の伝承	124
(4) 調査成果	126
(5) 小結	127
V、調査まとめ	128

写真図版・・・主な遺構および遺物写真
付録・・・CD (遺構および遺物写真)

図版一覧

Fig.1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年	1
Fig.2 太宰府市とその周辺の遺跡	2
Fig.3 調査地と周辺調査地点	3
Fig.4 第49次調査位置図	8
Fig.5 第178次調査土層模式図	9
Fig.6 第178次調査遺構全体図	10
Fig.7 178SB001遺構実測図	11
Fig.8 第178次調査溝土層図	12
Fig.9 178SE020遺構実測図	13
Fig.10 178SE030・075遺構実測図	14
Fig.11 178SK004・010・036遺構実測図	16
Fig.12 178SK005・015・037・065遺構実測図	17
Fig.13 178SK070・085遺構実測図	18
Fig.14 178SX101・150土層実測図	19
Fig.15 178SD002・013・090・095出土遺物実測図	21
Fig.16 178SD025出土遺物実測図	22
Fig.17 178SD035出土遺物実測図	26
Fig.18 178SD035下層出土遺物実測図	27
Fig.19 178SD035最下層出土遺物実測図	28
Fig.20 178SD031・038・060・078出土遺物実測図	30
Fig.21 178SE020出土遺物実測図	32
Fig.22 178SE030出土遺物実測図①	34
Fig.23 178SE030出土遺物実測図②	35
Fig.24 178SE030出土遺物実測図③	38
Fig.25 178SE030出土遺物実測図④	39
Fig.26 178SE030⑤・075出土遺物実測図	40
Fig.27 178SK004・005出土遺物実測図	41
Fig.28 178SK010出土遺物実測図①	42
Fig.29 178SK010出土遺物実測図②	43
Fig.30 178SK015・036・055・070・071出土遺物実測図	46
Fig.31 178SK085黒茶色土出土遺物実測図	48
Fig.32 178SK085黒茶色土下層出土遺物実測図①	50
Fig.33 178SK085黒茶色土下層出土遺物実測図②	51
Fig.34 178SX040・097・150出土遺物実測図	52
Fig.35 第178次調査灰褐色土・茶色土出土遺物実測図	55
Fig.36 第56・178次調査主要遺構図	56
Fig.37 第178次調査遺構略測図	58
Fig.38 第184次調査土層模式図	69
Fig.39 第184次調査遺構全体図	70

Fig. 40	184SB005・010 遺構実測図	71
Fig. 41	184SB020・025 遺構実測図	72
Fig. 42	184SE015 遺構実測図	73
Fig. 43	184SK001・030・035 遺構実測図	74
Fig. 44	184SB005・010・020・025 出土遺物実測図	76
Fig. 45	184SE015 出土遺物実測図①	77
Fig. 46	184SE015 出土遺物実測図②	78
Fig. 47	184SK001・030・035 出土遺物実測図	80
Fig. 48	第184次調査その他の遺構出土遺物実測図	81
Fig. 49	第184次調査遺構略測図	82
Fig. 50	第228次調査土層模式図	86
Fig. 51	第228次調査遺構全体図	87
Fig. 52	228SI080 遺構実測図	88
Fig. 53	228SB045 遺構実測図①	89
Fig. 54	228SB045 遺構実測図②	90
Fig. 55	228SB055・085・090 遺構実測図	91
Fig. 56	228SB095 遺構実測図	92
Fig. 57	第228次調査溝土層実測図	93
Fig. 58	228SK001・005・017 遺構実測図	94
Fig. 59	228SK035・040 遺構実測図	95
Fig. 60	228SI080 出土遺物実測図	96
Fig. 61	第228次調査掘立柱建物及び関連遺構出土遺物実測図	97
Fig. 62	第228次調査溝出土遺物実測図	98
Fig. 63	228SK001 出土遺物実測図①	100
Fig. 64	228SK001 ②・017・023・035・040 出土遺物実測図	101
Fig. 65	第228次調査その他の遺構出土遺物実測図	105
Fig. 66	第228次調査周辺遺構関係図	106
Fig. 67	第228次調査遺構略測図	107
Fig. 68	第232次調査遺構全体図	116
Fig. 69	第232次調査土層実測図	116
Fig. 70	第232次調査出土遺物実測図	117
Fig. 71	第232次調査遺構略測図	118
Fig. 72	第247次調査遺構全体図・出土遺物実測図・略測図	119
Fig. 73	第296次調査遺構全体図・出土遺物実測図・略測図・土層模式図	112
Fig. 74	田中の森位置図	124
Fig. 75	田中の森現況図及び礎石実測図	126

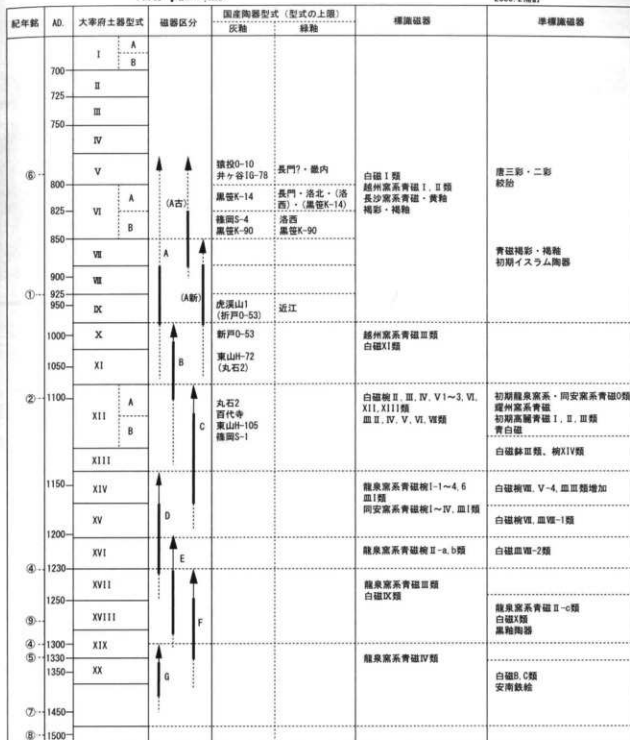
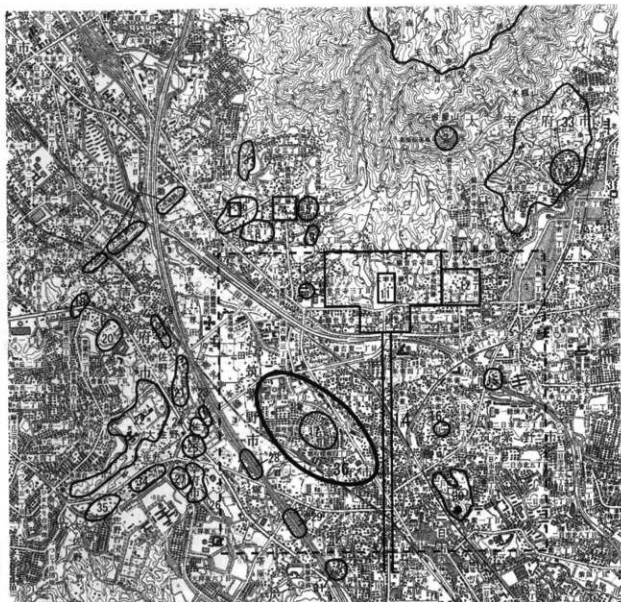


Fig. 1 大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁編年

- 紀年表資料
- ①A. D. 927 延喜5年、大宰府742S0205清
 - ②A. D. 1091 寛治5年、平安京左京4東195SE井戸
 - ③A. D. 1224 貞応3年、大宰府332S0605清
 - ④A. D. 1304 寛元2年、大宰府109. 111次303200清
 - ⑤A. D. 1330 元徳2年、大宰府45次3S1200池
 - ⑥A. D. 784 延暦5年、長門京102次3D10201清
 - ⑦A. D. 1459・1465 享和3・寛文5年、福門市井田田C11・S016池
 - ⑧A. D. 1501 文永元年、大宰府70次3D1805清
 - ⑨A. D. 1265 文永2年、博多62次713土庫

- 文献
- ①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982
 - ②田辺昭三・吉川義彦「平安京発掘調査報告左京西四一坊」1975 平安京調査会
 - ③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査報告」1975
 - ④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査報告」1989
 - ⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査報告」1978
 - ⑥福岡市埋蔵文化財センター「福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集」1989
 - ⑦福岡市教育委員会「井田田遺跡1」『福岡市埋蔵文化財調査報告書179』1988
 - ⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査報告」1982
 - ⑨福岡市教育委員会「博多48」『福岡市埋蔵文化財調査報告書397』1995



- | | | | |
|------------|--------------------|-----------|--------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 襦袢遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 墓・塚遺跡 (●は墓火葬墓) |
| 4. 筑前園分寺跡 | 13. 遠賀團印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府染坊跡 (徳山・堀内) | 23. 龍川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 若畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前園分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠園印出土地 | 18. 神ノ前家跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 36. 報告地域 |

Fig.2 太宰府市とその周辺の遺跡

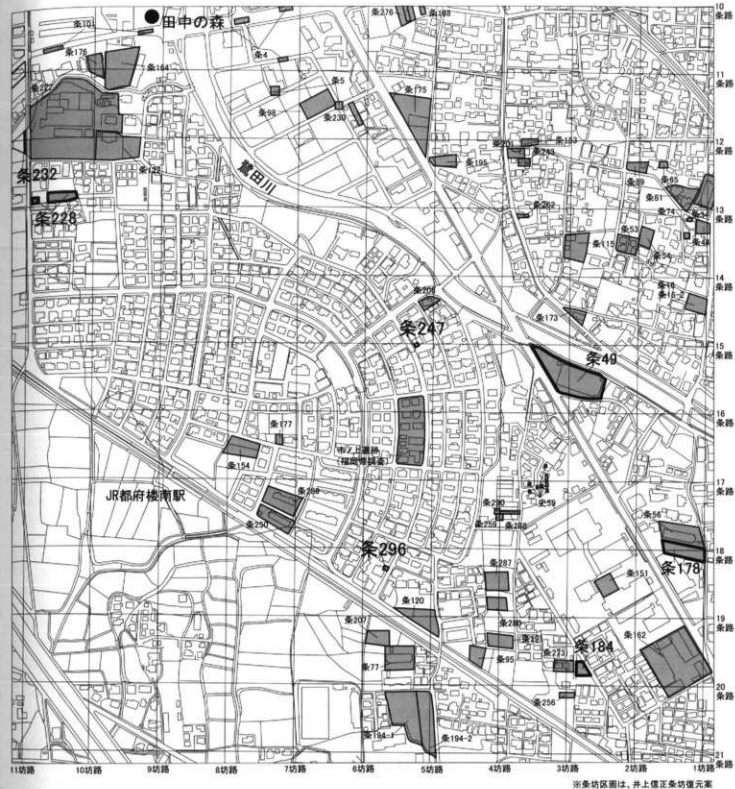


Fig.3 調査地と周辺調査地点 (1/5000)

※条坊区画は、井上信正条坊復元案

I、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。市役所から博多湾まで直線距離で15km、筑後川まで20kmの位置関係である。

二つの平野には弥生から古墳時代にかけての遺跡が多く存在し、その勢力に挟まれた太宰府では、4世紀には割竹形木棺で鏡を副葬する円墳（菖蒲ヶ浦、下高尾、宮ノ木）が築造されている。5世紀に入ると行政区こそ太宰府市であるが、福岡平野を見渡す丘陵に帆立貝形前方後円墳の成層形古墳が築造されている。6世紀になって、四王寺山や高尾山の裾部に円墳が僅かに築造されるが、群集墳と呼べる状況を示していない。

古代になると太宰府府庁が置かれ、博多側には四王寺山と吉松丘陵を塞ぐ水城の土塁が築造されたほか、周囲に山々には大野城・基肆城・阿志岐城などの古代山城が築造され、いわゆる羅城を形成していたと考えられる。なお、府庁から現在の博多湾や鴻臚館跡まで直線距離で14.5kmの距離に位置する。

太宰府府庁の前面には、いわゆる太宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。太宰府条坊はその規模は南北22条、東西各12坊におよび、南辺部は筑紫野市まで広がっている。その存在については鏡山猛氏が『観世音寺文書』や『八幡宇佐宮御神領大鏡』等に記述されている文言や地割から分析し、一区画1町四方とした条坊の復元案を提示したことに始まる。当初は発掘調査が少なかったため、その存在については疑問視する声もあったが、その後発掘調査が増大すると共に条坊痕跡が発見され、近年ではその成果を基に一区画90m四方とする条坊復元案が井上信正氏により提示されている。近年の太宰府条坊の調査成果としては、五条2丁目で行った第217・224調査では、平安時代中期と12世紀埋没の南北道路側溝が検出され、約90mの区割りでみる条坊案では左郭12坊推定ライン上にあたる。『宇佐大鏡』久安4（1148）年条の記述から、12坊路を「京極大路」とするという見解が鏡山猛氏以来支持されてきたが、その「京極大路」の遺構である可能性が十分考えられる。しかし、4条路交差点より北側に位置する第105・306次調査では、道路側溝が確認されていないことから、府庁前を通る4条路を挟む南北での異なる条坊景観が窺える。また、12坊路に取り付く平安時代後期の道路も明らかになり、平安時代後期の時点で、平安時代中期以降急速に栄えていった安楽寺天満宮周辺の街区と太宰府条坊が接していたことを示すものと考えられている。筑紫野市塔原東1丁目（第258次調査）では、8世紀後半埋設の平行する東西溝が検出され、井上信正条坊案の22条と合致し、条坊の南限である可能性が指摘されている。条坊外に続く条里の存在も指摘されており、鷺田川西岸一帯には小字「市ノ上」があり、以前から古代の市場の存在が推定されている。その一画である都府楼南2丁目の第222次調査では広大な面積が調査された。ここは府庁Ⅱ期に条坊外の条里が広がっていた土地で、平安時代後期になり土地開発が行われたと推測されている。条坊と条里の関係を知る貴重な所見を得ることが出来る。条坊の中心を南北に走る中央大路（推定朱雀大路）沿いは、南北に並ぶ大型掘立柱建物が見つかり、一帯からは佐波理の匙や加盤をはじめ、高級食器類が出土し、太宰府にきた外国使節を安置する客館跡ではないかと推定されている。

II、調査体制

(昭和59 / 1984年度)・・・第49次調査

総括	教育長	陶山直次郎 藤 寿人 (60年3月14日～)
庶務	社会教育課長	西山義則 (～59年9月30日) 花田勝彦 (59年10月1日～)
	文化財係長	黒板 力 岡部大治 山本信夫 狭川真一
調査	技師	

(平成8 / 1996年度)・・・第178・184次調査

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化振興係長	大田直信 (～8年6月30日) 田中利雄 (8年7月1日～) 岡部大治 川谷 豊
	主任主事	今村江利子
	主 事	山本信夫
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一 (調査担当) 城戸康利 山村信榮 中島恒次郎 井上信正
	技 師	高橋 学 宮崎亮一 (調査担当)
	技師 (嘱託)	下川可容子 森田レイ子

(平成15 / 2003年度)・・・第228・232次調査

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信 (～6月30日) 久保山元信 (7月1日～)
	保護活用係長	久保山元信 (10月1日～)
	文化財調査係長	神原 稔 (～9月30日)
	調査係長	永尾彰朗 (10月1日～)
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利

技術主査 山村信榮 中島恒次郎
 主任技師 井上信正 高橋 学
 宮崎亮一 (調査担当)
 技師 (嘱託) 下川可容子 森田レイ子 柳 智子 渡邊 仁

(平成17/2005年度)・・・第247次調査

総括 教育長 關 敏治
 庶務 教育部長 松永栄人
 文化財課長 木村和美 (～6月30日)
 齋藤廣之 (7月1日～)
 保護活用係長 久保山元信
 調査係長 永尾彰朗
 主任主査 齋藤実貴男
 事務主査 大石敬介
 調査 主任主査 城戸康利 山村信榮 中島恒次郎
 技術主査 井上信正
 主任技師 高橋 学
 宮崎亮一 (調査担当)
 技師 (嘱託) 下川可容子 柳 智子 長 直信 松浦 智

(平成24/2012年度)・・・第296次調査

総括 教育長 關 敏治 (～12月21日)
 木村基治 (12月25日～)
 庶務 教育部長 古野洋敏
 文化財課長 井上 均 (～6月30日)
 菊武良一 (7月1日～)
 文化財副課長 城戸康利 (7月1日～)
 保護活用係長 菊武良一 (～6月30日)
 友添浩一 (7月1日～)
 調査係長 山村信榮
 事務主査 橋川古典
 主事 古川あや
 調査 主任主査 中島恒次郎 (～6月30日)
 井上信正
 技術主査 高橋 学
 宮崎亮一 (調査担当)
 主任技師 遠藤 茜
 景観・歴史のまち推進係 係長 中島恒次郎 (文化財課事務取扱)

(平成26/2014年度)・・・報告書発行

総括 教育長 木村基治
 庶務 教育部長 堀田徹
 文化財課長 菊武良一
 文化財副課長 城戸康利
 保護活用係長 友添浩一
 調査係長 山村信榮
 事務主査 廣見京子
 主事 有田ゆきな 久木原駿史
 調査 主任主査 井上信正 高橋 学
 宮崎亮一 (報告書担当)
 主任技師 遠藤 茜
 技師 沖田正大 中村茂央
 景観・歴史のまち推進係 係長 中島恒次郎 (文化財課事務取扱)

Ⅲ、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 1』(太宰府市の文化財第14集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001年9月改訂)に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時1/20等で記録し、遺構全体図は人力によって1/20の縮尺で実測を行った。今回狭小な調査地も多く、第184・232・247・296次調査では、座標杭を任意で打ち調査を行った後に座標を与えている。

整理報告に際し、国内からの搬入品については形状が確認できるものは極力報告することに努めた。整理報告作業の効率化と報告書のスリム化のため、規格性が強い輸入陶磁器については『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類-』を基に分類し、出土遺物一覧表に分類と破片数を掲載したのみで、実測作業は基本的に行っていない。しかし、未分類のものや稀な陶磁器などについては実測し報告している。

よって、遺構時期の検証については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。

IV、調査報告

1、第49次調査

(1) 調査に至る経過と成果

調査地は太宰府市大字通古賀字立明寺967-1（現在は都府楼南5丁目967-1）である。宗教法人施設建築に伴い、1984（昭和59）年4月3日、トレンチを3ヶ所設定し、確認調査を実施したが、遺構は検出されなかった。しかし、その調査に関する詳細なデータが残されていないため、遺構がなかった原因は不明である。しかし、調査地は鷺田川の南岸すぐであり、南側隣接地の確認調査でも河川氾濫原が広がり、明確な遺構は確認されなかった。この調査地でも河川氾濫原が広がっていたものと推測され、遺構は河川氾濫により消滅したものと推測される。調査対象地3076 m²。

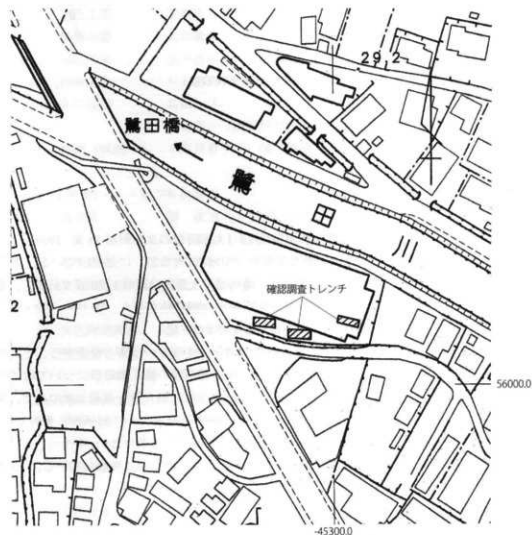


Fig.4 第49次調査位置図 (1/1500)

2、第178次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市都府楼南5丁目923-1に所在し、太宰府市の南端の筑紫野市との市境付近に位置する。1995（平成7）年1月11日に都府楼地所より、陶山猛氏所有の土地について、共同住宅建設を計画するにあたり、埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。1995（平成7）年8月30日に確認調査を行い、遺構が確認されたため、開発者の調査費用負担のもと、1996（平成8）年4月15日～7月25日にかけて発掘調査を実施した。確認調査は狭川真一が実施し、発掘調査は宮崎亮一・狭川真一が担当した。開発対象面積938 m²、調査面積633 m²を測る。

(2) 基本層位 (Fig.5)

調査直前は空き地を駐車場として利用していた。上面から真砂土や客土が0.6～0.9m、その下に耕作土とみられる灰褐色土が0.2m程あり、灰褐色土の下には東側に行くほど茶色土の包含層が0.3m程存在する。西側は包含層が削平されたような状況である。包含層を除去すると黄色粘土や茶白色砂などの地山となり、遺構が展開する。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

178SB001 (Fig.7)

現状では2×4間の東西棟だが、調査区西端で、西側の桁行の柱間が若干規則的でないため、さらに西側に続く可能性も考えられる。振れは約E-0°10'-Sでほぼ東西に建つ。建物の規模は桁行8.3m、梁間3.9m。柱間は桁行2.0～2.2mで、梁間約2.0m。柱の掘り方は円形で、直径0.16～0.42m、深さ0.04～0.3mである。

溝

178SD002 (Fig.8)

検出長43.0m、幅0.8～1.4m、深さ0.3～0.5mの東西溝で、振れはW-1°6'26"-N程度。部分的に2段掘りの状況になって、底面の深い溝が幅0.4～0.7mになっている部分もある。しかし、安定的に段掘りは続いているため、溝深いような掘り返しが行われた可能性が窺える。D12・13区では、埋土の北側でぼんやりとしたラインが確認できた。また、埋土の断面状況でも北側から土砂が堆積している状況が確認できる。

また、調査区西端に当たるD16区付近では、遺構面から約5cmの深さに土器が集中して出土し、ほかの埋土では土器の集中が見られないため、溝とは別に遺構があった可能性も考えられる。調査区東側は反転調査した関係でS-90°95'として調査を行ったが、178SD002と同一遺構である。東西道路（条路）の側溝と推測される。

178SD013 (Fig.8)

検出長25.3m、幅はおよそ0.3～0.6m、深さ0.06～0.32mの東西溝で、振れはW-0°9'18"-S程度。埋土は明黄色土と灰褐色土が混合した単一層である。西側は調査区端まで到達していないが、溝の西端の掘りこみがなだらかであること、また、調査地西側の遺構が全体的に希薄であることから、溝の西側は削平されたものと推測される。なお11・12ライン付近は若干掘りすぎた感じがする。東端には

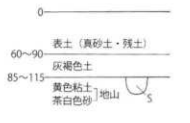


Fig.5 第178次調査土層模式図 (単位: cm)

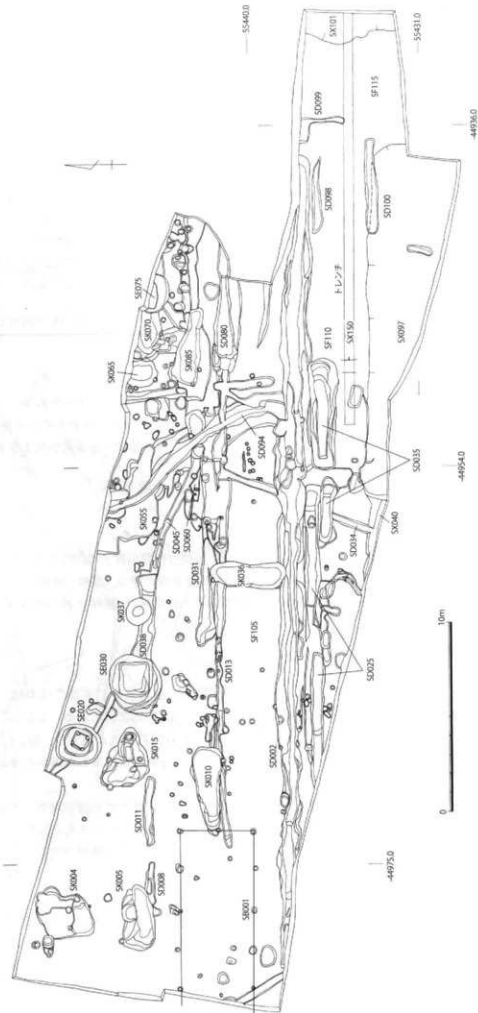


Fig. 6 第178次調査遺構全体図 (1/200)

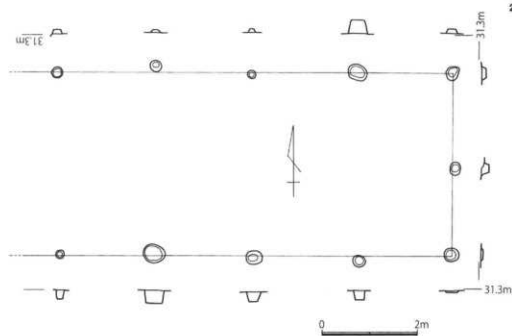


Fig. 7 178SB001 遺構実測図 (1/80)

SD080があるが、同じような意味の溝と考えられる。SD025と対になる東西道路(条路)の北側側溝と推測される。

178SD008・011

若干間隔を空けて検出された東西溝で、2つの溝は途切れているが同一遺構と推測される。合わせで検出長6.8m、幅0.5m前後、深さ0.1mで、振れは $W-0^{\circ}48'15''-N$ 程度である。

178SD025 (Fig. 8)

178SD002の南側に平行する東西溝。検出長18m、幅0.7～0.8m前後、深さ0.1～0.3m程で、振れは $W-0^{\circ}33'28''-S$ 程度。埋土は上層が暗茶色土で、下層が黒褐色土である。検出段階では連続した溝であったが、掘削していくと底面は凹凸が目立ち不安定であった。C11～13付近で遺構検出段階では、北側に黄茶色土、南に暗茶色土と分かれ、北側に中段があるような段掘り状態で、その他も同様に底面がさらに下がり溝状になるなど、溝の形状が段掘りもしくは連続土坑と呼ばれる状態を示しており、溝底のような掘り返しが行われた可能性が窺える。178SD002とは近接し、微妙な状態で切り合っているが、土層観察から178SD025が古く、178SD002が新しいものと判断できる。また、東側では178SD002と178SD035に挟まれる状態となり、両溝によって削平され、僅かに底面を残す状況であった。さらに東側では溝が未検出のため、178SD002(095)と重複し削平されたものと推測される。SD013と対になる東西道路(条路)の南側側溝と推測される。

178SD031 (Fig. 8)

検出長18.5m、幅0.8m前後、深さ0.2m前後の東西溝で、振れは $W-0^{\circ}33'45''-N$ 程度。埋土は黒灰褐色土や暗灰色土で、東側は若干不明瞭であるが、S-82の上に乗って消滅している。

178SD034

条坊間連の東西溝を横切るように検出されたが、すべての東西溝に切られている。検出長8.6m、幅0.3～0.45m、深さ0.1～0.2m、方位は異なるものの、溝の形状からSD045と同一遺構の可能性が考えられる。

178SD035 (Fig. 8, Pla. 2)

遺構検出段階では検出長10.02m、振れは $W-0^{\circ}7'25''-N$ 程度の東西溝であったが、2ヶ所だけさらに深く下がる。西側の溝は長さ3.77m、幅0.75m前後、深さ0.5mで、東西両端がなだらかな2段掘りとなっている。この溝から東に0.34m離れた溝は、長さ5.91m、幅1.2～1.6m、深さ1.18mで、全体的に段

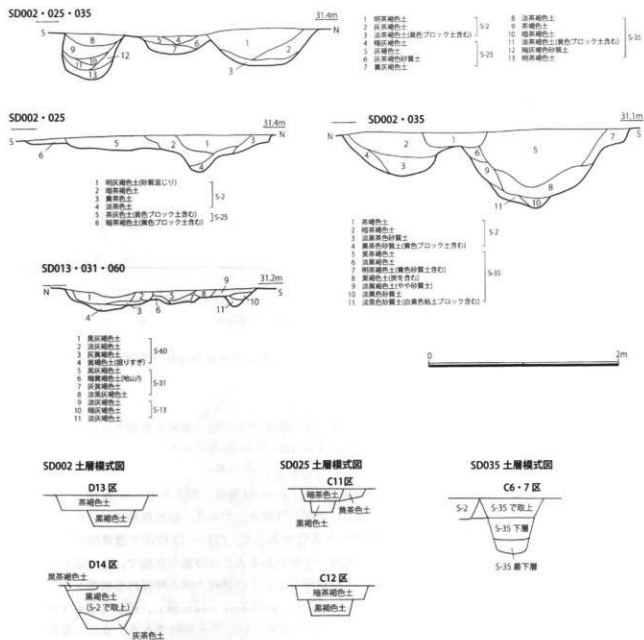


Fig. 8 第178次調査清土層図 (1/40)

掘り、深さ0.5m前後に中段がある。東端の埋土は徐々に堆積した後に黒茶褐色土で一気に入埋められた状況が観察できる。

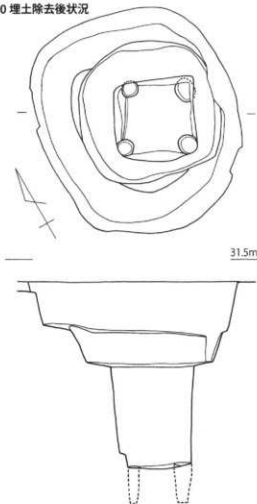
178SD045・038

178SD034 から直角に西側方向に検出された溝で、検出長 18.7m、幅 0.4m 前後であるが、S-38 として調査した部分は幅 0.9m 前後と若干広く、深さは 0.1～0.25m。埋土は黒色土である。明確に確認しきれなかったが、2つの遺構が混在している可能性がある。溝の形状から SD045 は SD034 と同一遺構の可能性が考えられる。

178SD060 (Fig. 8)

178SD031 の北辺に切り込むように掘られた東西溝で、切り合いは不明瞭だが、7ライン付近で途切れているように見える。検出長 5.4m、幅 0.5m 前後、深さ 0.05～0.15m で、振れはほぼ東西で、埋土は主に黒灰褐色土である。178SD045・094 の埋土に切り込んでいるため、他の遺構を完掘すると

SE020 埋土除去後状況



SE020 完掘状況

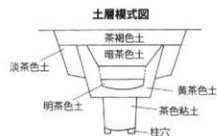
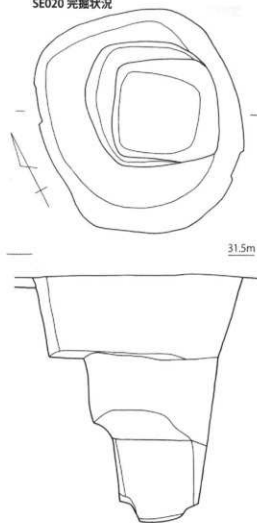


Fig. 9 178SE020 遺構実測図 (1/40)

178SD060 はほとんど痕跡が残らない状況である。

178SD080

検出長 6.1m、幅 0.45～1.18m、深さ 0.2～0.6m 程の東西溝で、振れは $W-1^{\circ} 30' 27'' -S$ 程度。178SD013 の埋土に切り込み、溝の深さがそれより 0.4m 程深くなり、形状も若干広がっている。178SD013 が埋没した後に掘り込まれた溝と考えられるが、178SD013 の延長上に位置するため同じ意味を持つ遺構と考えられる。埋土は淡い茶褐色土である。

178SD094

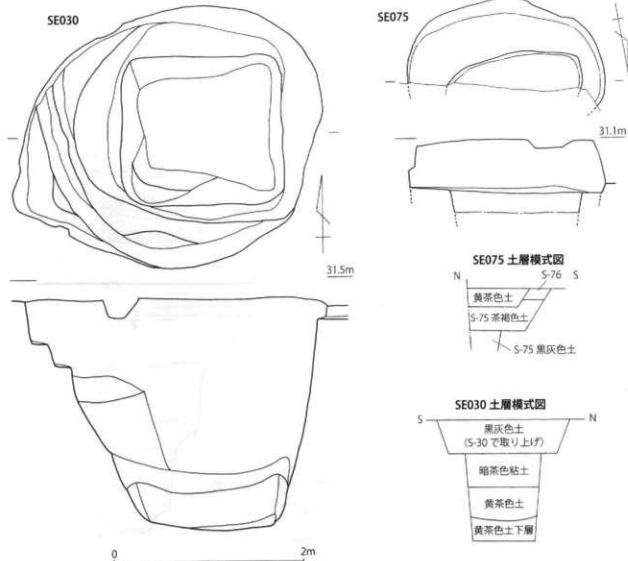


Fig. 10 178SE030・075 遺構実測図 (1/40)

南北にやや蛇行する溝。検出長約11.5m、幅0.5～0.9m、上面に異なる遺構が覆っているが、深さは遺構検出面から0.35m前後である。北隣の第56次調査のSD110の続きと考えられる。

178SD098

検出長4.05m、幅0.55m、深さ0.1mの東西溝で、振れはW-1°1'30"-S程度。東に向かって細くなる。周囲の暗茶色土の中に僅かなが異なる茶褐色土を確認したため掘り下げた。しかし、底に達してはその埋土の違いを明確に確認できなかった。178SD100と対となる溝と考えられる。

178SD099

検出長2.38mの南北溝で、幅0.2mだが北側は広く1.32mとなる。深さは0.05m前後と浅い。振れはN-0°30'25"-E。埋土は茶褐色土である。この溝の直前で178SD095・098・100が途切れているため、この付近で南北に区切る区画溝のようなものと推測される。

178SD100

検出長5.05m、幅0.65m、深さ0.1mの東西溝で、振れはW-1°30'39"-S程度である。若干ではあるが周囲より明るい茶褐色土の埋土である。間近で見るとぼんやりと確認できる程度であるが、高いところから観察するとその違いは明瞭である。溝の深さは約0.1mで、埋土の下からは178SK097の北側ラインが検出された。178SD098と対となる溝と考えられる。

井戸

178SE020 (Fig. 9, Pla. 3)

掘り方は南北2.4m、東西2.1m、深さ2.6mの円形で、埋土にはやや南寄りには井戸枠痕跡とみられる隅丸方形プランが確認できた。上面の暗茶色土や黄茶色土は、埋土の沈み込みにできた堆積とみられる。井戸枠と推測される方形プランを掘り進んだが、徐々に土質が周囲の裏込めのもとと同じになっていき結構固くなった。北側は裏込めの土が方形枠内に垂んでいるため、土圧によるものと思われる。裏込め土が少ない東や南はプランも明瞭である。井戸枠痕跡の底面付近の四隅に径0.2m程の柱穴がみられる黒色土が検出された。北東隅は柱穴周囲を粘土で固めている。南東隅の周囲は砂質、南西隅と北西隅は地山と思われる灰白色粘質土をえぐるように埋土の黒色土が入っている。そして、黒色土をさらに掘り下げたところ、その底面に大きさ0.1～0.15m前後の柱穴痕跡が検出された。これが本来の隅柱の大きさだったと推測される。埋土を地山まで掘り落としたが曲物等の痕跡はみられなかった。強いて言えば底面上の0.5～0.6m前後の中央付近が、黒灰色土でその周囲が茶色味があったところがあった。それが曲物の痕跡であった可能性が考えられるが特定するに至っていない。井戸底はそれまでの砂質と異なり、固い土質であった。柱穴検出面にみられる粘質土は、井戸底に溜まった粘土と推測される。また、柱穴確認後、新たに掘り下げた埋土から遺物は出土していない。

178SE030 (Fig. 10, Pla. 3)

掘り方は南北2.75m、東西3.1m、深さ2.45mの円形で、0.6m程掘り下げると南西隅で一部地山が確認でき、その面で南北2.6m、東西2.9mのプランが確認でき、その面から一段掘り方を下げた段階で井戸枠らしき方形痕跡が確認できたが、若干不明瞭であったことから、ウラゴメ土は崩壊している可能性も考えられる。最下部については砂質であったため、底面の確認がやや困難であったが、やや固い砂質土を確認した面を底面と判断した。底面に到達しても水はほとんど湧かず、曲物の痕跡等も全く確認できなかった。

178SE075 (Fig. 10)

調査区際のため半分ほどしか検出することができなかったが、南北1m以上、東西2.1m、深さ0.8m以上の円形の掘り方が確認できた。約0.5m掘り下げた段階で不鮮明ながら方形の井戸枠痕跡が確認できた。内部には大量の川原石が検出された。今回の調査区内で川原石は殆ど検出されていないことから、最寄りの鷺田川から搬入し使用後に捨てられたのではないかと考えられる。

土坑

178SK004 (Fig. 11)

東西2.8m、南北3.05m、深さ0.14mの不定形の土坑である。埋土は黒茶褐色土で、底面はいくつか土坑状に深い箇所が見られる。

178SK005 (Fig. 12)

東西3.5m、南北1.75m、深さ0.4mの横長の不定形の土坑である。埋土は上部が黒茶褐色土で下部が黒茶褐色土の砂質土である。若干不明瞭であったが、178SD008を切る形で検出された。

178SK010 (Fig. 11)

東西4.4m、南北1.55m、深さ0.4mの横長の土坑である。178SD013と微妙な状態で接しているが、SK010が古い。埋土は全体的に炭が混じる黒茶褐色粘質土であるが、中位に厚さ5cm程の明黄色と朱色をした焼土層が南側から傾斜した堆積状況が観察できた。黒茶褐色粘質土下の最下層は明灰色砂質土であるが遺物はほとんどみられない。大型の土器片が多量に出土することや堆積状況から廃棄土坑と考えられる。

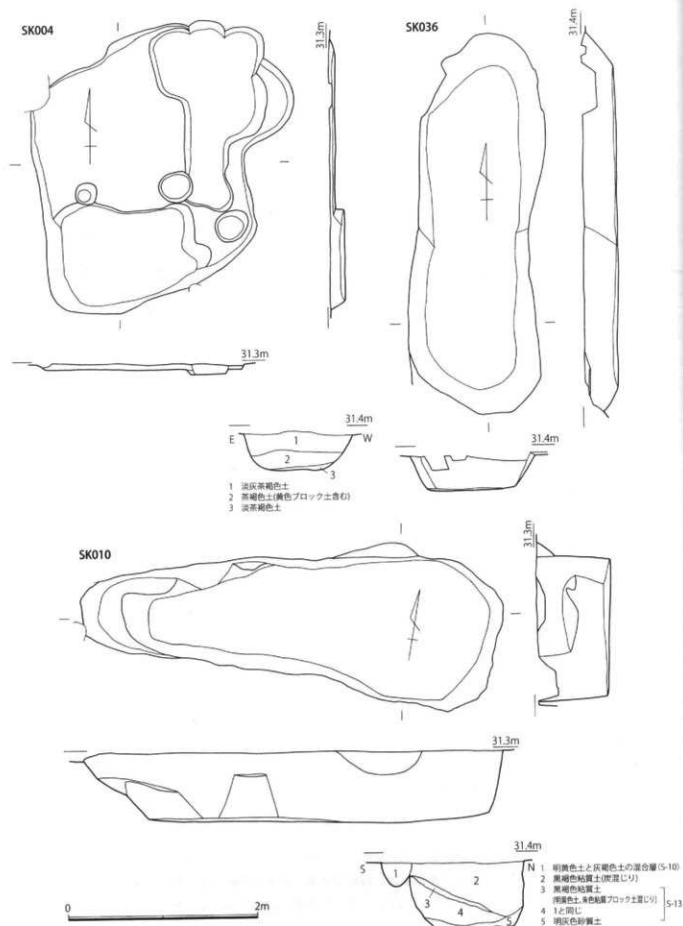


Fig. 11 178SK004・010・036 遺構実測図 (1/40)

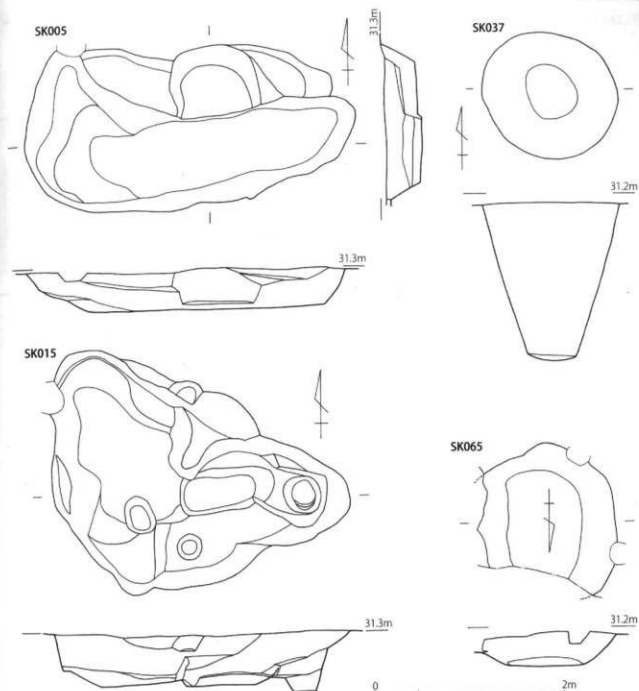


Fig. 12 178SK005・015・037・065 遺構実測図 (1/40)

178SK015 (Fig. 12)

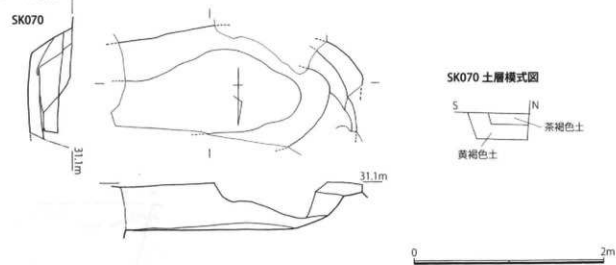
東西 3.1m、南北 2.6m、深さ 0.6m の不定形な土坑である。埋土は全体として黒褐色土の単層であるが、西側が一段深くなり、埋土は黒褐色土に黄褐色土ブロックを含んでいる。

178SK036 (Fig. 11)

東西 1.35m、南北 4.0m、深さ 0.37m の南北に長い長方形土坑である。遺構の南端は 178SD002 に切れられ、北側は 178SD013 に切り込んでいる。埋土は淡灰茶褐色土だが、最下部のみ茶色味が目立つ感じを受け、明瞭ではないが淡灰茶褐色土は 2 層に分かれる。出土遺物は少ない。

178SK037 (Fig. 12)

掘り方は南北 1.34m、東西 1.45m、深さ 1.67m の円形で、埋土は黒色土や黒灰色土で、井戸枠痕跡は



SK070 土層模式図

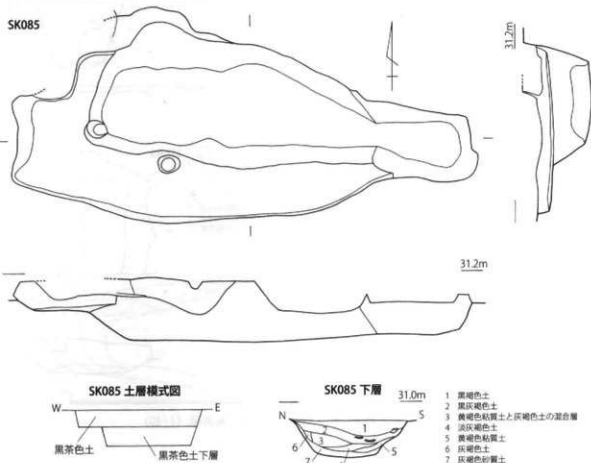


Fig. 13 178SK070・085 遺構実測図 (1/40)

確認できていないが、最下層に0.05m程の黒褐色粘土が堆積していたため、水が溜まっていた痕跡と考える。しかし、他の井戸に比べ大きさが小さく浅いことから、別の用途と推測される。なお、調査段階で湧水はない。

178SK055

不定形で浅い窪みのような土坑である。大きさは東西4.9m、南北2.1m、深さ0.1m前後で浅いが、埋土は上層が黒茶色土で、下層は黄茶色土である。

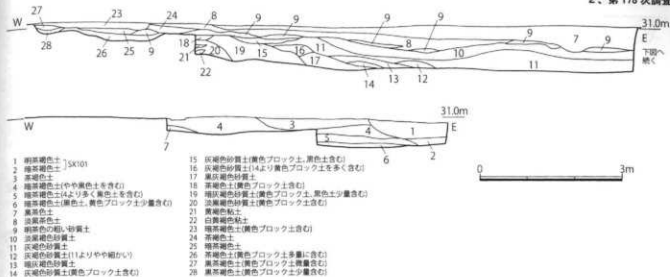


Fig. 14 178SK101・150 土層実測図 (1/80)

178SK065 (Fig. 12)

調査区際内にあり、東西1.45m、南北1.8m以上、深さ0.36mの楕円形土坑である。埋土は中央に方形の黄褐色土があり、それ以外は茶褐色土である。178SK070との切り合いの新旧は微妙であった。

178SK070 (Fig. 13)

調査区際内にあり、東側は178SE075と切り合いは不明瞭で、明確に判断できないまま SK070 は完掘した。大きさは東西2.58m以上、南北1.25m以上、深さ0.5mの楕円形土坑である。埋土は最上層が細かい黄色土ブロックが混じった茶褐色土で、その下層が黄褐色土である。

178SK085 (Fig. 13)

東西に長い土坑で、東西4.9m、南北2.28m、深さ0.75m。西と南側にテラス状の中段があり、北側がさらに0.3m程深くなっている。深くなった部分の埋土は徐々に堆積した状況が観察できる。完形の遺物が多く、土坑の形状から178SK010と同様に廃棄土坑と推測される。

道路状遺構

178SF105 (Pl.a.1)

178SD013と178SD025に挟まれた空間は、遺構の分布が少ないため奈良時代の東西に走る道路と考えられる。側溝の埋没は、南側溝のSD025が8世紀後半、北側溝が9世紀中頃～後半と時期差はあるが、条坊内で埋没時期の違う道路側溝は多々あり、施工時期は同じであったと考えると問題ないだろう。路面幅はおよそ2.6～3.1mであるが、この溝の外側にもSD031やSD035が存在するため、10世紀中頃には埋没した178SD013と路面に土坑(178SK036)が掘られている。これを一時的な掘削ではないと考えた場合、道路の制約がなかったことになり、その頃にはこの道路は機能していなかったと考えられる。路面舗装は未確認である。

178SF110 (Pl.a.1)

178SD002を道路側溝と考えているが、対となる側溝の特定は難しい。SX097に挟まれた空間で、遺構が希薄なことSD100も同じ位置に掘削されていることから、不明瞭ではあるものの道路として機能していた可能性も考えられる。路面幅は3.3m前後。路面舗装は未確認である。

178SF115 (Pl.a.2)

SD002とSX097の東端が同じ所で途切れ、南北溝のSD099が掘られている。調査区東端にSX101があり、この挟まれた空間が南北道路と推測される。路面幅はSX097の東端からSX101の間だと約6m、SD099からSX101の間だと3.8mである。

その他の遺構

178SX040・097

調査区の南東端で検出された遺構で、遺構の西側では溝状に見えた部分(SX040)もあった。178SX097は調査時自然な落ち込みと考え完掘しなかったが、上面の埋土は茶色土であった。この遺構の北側では東西道路が検出されているため、この遺構が道路側溝のような役割を持っていた可能性も考えられる。

178SX101 (Fig. 14)

調査区の東端で確認されたもので、調査区に沿って南北に続いている。検出長4.8m、幅1.7m以上、深さは0.5m以上、振れはN-1°33'52"-W。埋土は茶褐色土で、落ち込みもしくは溝と推測される。

178SX150 (Fig. 14)

調査区の東側で確認された落ち込みである。堆積状況を見ると、全体的に東に向かって下がっている状況が窺え、中位以下に砂質土が多くみられる。条坊が整備される前は東側が大きく下がっていたと推測され、徐々に自然堆積した後、若干掘っていた部分を古代になって黒茶色土などで整地したものと推測される。

(4) 出土遺物

溝

178SD002 出土遺物 (Fig. 15, Pla. 14)

土師器

小皿 a (1~12) 復元口径8.6~10.9cm、器高1.1~1.8cm、復元底径6.6~8.6cm。底部切り離しは全て回転ヘラ切りで、内面底部はナデ調整である。

小皿 a2 (13) 復元口径10.0cm、器高1.15cm、復元底径7.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。口縁端部に浅い沈線が巡る。色調は淡黄褐色を呈する。

碗 c (14) 復元口径14.6cm、器高5.1cm、底径8.1cm。内外面ヨコナデ調整。色調は淡橙黄色を呈する。

白磁

小壺 (15) 小壺の体部付近の破片とみられる。胎土は0.5cm以下の白色砂粒や茶色粒を少量含む。内外面とも回転ナデで、内面は露胎、外面には光沢のある白褐色釉を薄く施す。

178SD002 暗茶褐色土出土遺物 (Fig. 15)

土師器

小皿 a (16, 17) 16は復元口径7.0cm、器高1.05cm、復元底径6.2cm。底面は磨減する。色調は黄白色を呈する。17は復元口径10.1cm、器高1.2cm、復元底径7.9cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。色調は淡褐色や橙色を呈する。

碗 c (18, 19) 18は復元口径14.0cm、器高5.1cm、復元底径7.6cm。体部はやや内湾味に立ち上がる。全体的にやや磨減が目立つ。色調は淡橙褐色を呈する。19は復元高台径7.7cm。全体的にやや磨減が目立つ。色調は淡黄褐色を呈する。

反軸陶器

碗×皿 (20) 碗もしくは皿の底部で、復元高台径8.3cm。高台はやや潰れたような断面三日月状で、板状圧痕が残る。胎土は須恵質で淡灰色を呈する。灰オリーブ色の軸は内面のみ薄く施される。

瓦類

平瓦 (21) 二重格子叩き。色調は茶褐色や淡茶白色を呈する。

石製品

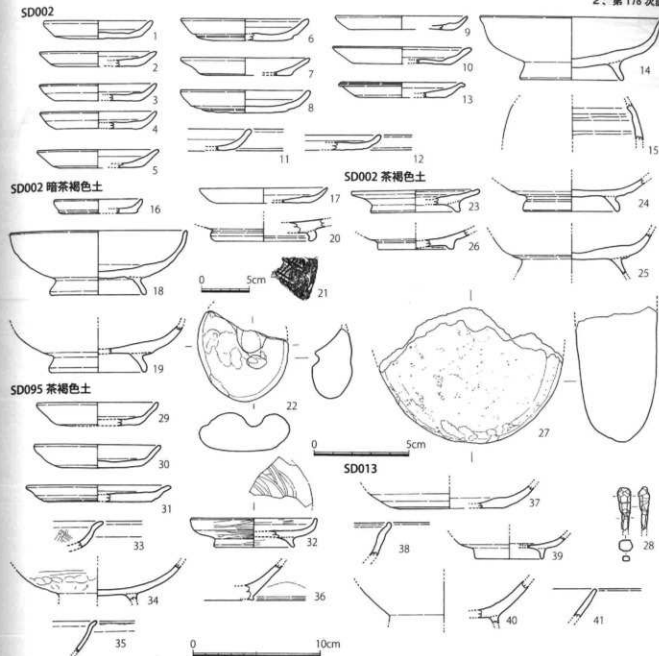


Fig. 15 178SD002・013・090・095 出土遺物実測図 (1/3, 21は1/4, 22・27は1/2)

用途不明品 (22) 現存長4.85cm、幅4.7cm、厚さ2.1cmの砂岩製。右の中央に径約1.5cm、深さ0.6cmの円形の窪みがある。

178SD002 茶褐色土出土遺物 (Fig. 15, Pla. 14)

土師器

小皿 c2 (23) 復元口径10.1cm、器高1.75cm、復元底径7.0cm。口縁端部に浅い沈線が巡る。色調は淡黄褐色を呈する。

碗 c (24, 25) 24は復元高台径7.6cm。外開きの高台を貼付する。全体的に磨減し調整不明。色調は淡黄褐色を呈する。25はやや丸味のある体部を持つ。内外面ナデ調整。色調は黄褐色を呈する。

緑釉陶器

皿 (26) 復元高台径5.9cm。胎土は僅かに白色砂粒を含むが精製され、須恵質に焼成される。内面と体部は回転ナデの後淡黄灰色釉を薄く施す。高台はケズリ出しで露胎。京都産。

石製品

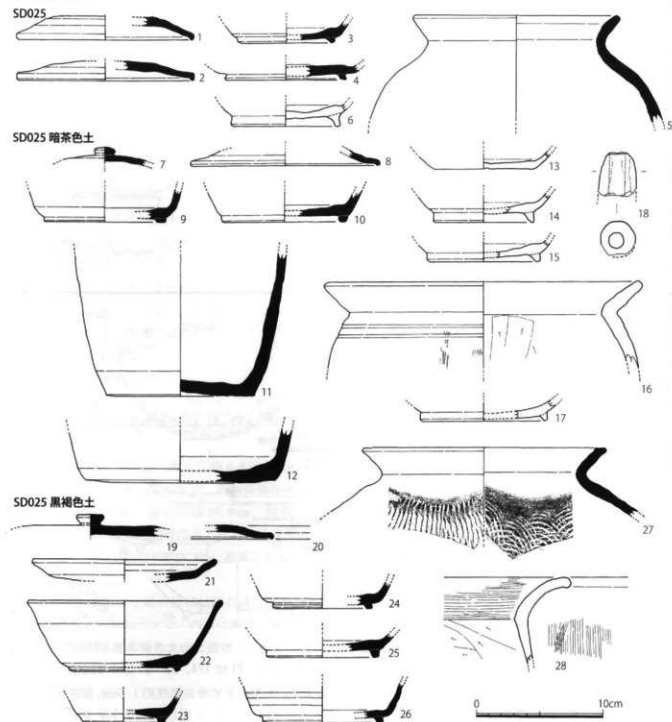


Fig. 16 178SD025 出土遺物実測図 (1/3)

敲石 (27) 円形礫の側面の一部に敲打痕がみられる。石材は安山岩。

金属製品

鉄釘 (28) 現存長 3.4 cm、釘部分は方形で、大きさは 0.4×0.5 cm。

178SD002 (095 茶褐色土) 出土遺物 (Fig. 15)

土師器

小皿 a (29, 30) 29 は復元口径 9.6 cm、器高 1.9 cm。復元底径 6.4 cm。外面底部に板状圧痕を残す。

30 は復元口径 10.0 cm、器高 1.8 cm。底径 6.9 cm。外面底部にはへら切り後板状圧痕を残す。

小皿 a2 (31) 復元口径 11.4 cm、器高 1.2 cm。復元底径 8.4 cm。全体的に磨減するが、口縁端部に僅かに沈線を残す。色調は淡黄色を呈する。

黒色土器

小皿 c (32) 復元口径 10.0 cm、器高 2.3 cm、復元高台径 6.4 cm。内外面に若干雑なミガキ c を施す。

B 類。

碗 (33) 口縁部が大きく外反する。口縁部の破片で全形が不明瞭だが、浅い碗になると推測される。

A 類。

瓦器

碗 c (34) 体部内面はミガキで平滑で、外面には指頭圧痕が残る。色調は暗灰色を呈する。高台はしっかりしており、黒色土器との違いが微妙だが、体部の張り具合から瓦器と考えられる。

緑釉陶器

碗 (35) 須恵質に焼成され、内外面とも光沢のある暗緑灰色釉を施すが、口縁端部は釉が剥がれている。京都産か。

灰釉陶器

壺 (36) 胎土は微細な砂粒を含むが精製され、色調は淡黄灰色を呈する。内面と体部上半部には淡緑灰色釉を薄く施す。体部下半は露胎。

178SD013 出土遺物 (Fig. 15)

土師器

坏 a (37) 復元底径 9.0 cm。やや外開きだが内湾気味に立ち上がる体部を持つ。外面底部は回転へら切りで板状圧痕を残す。内外面ともヨコナデだが、内面は磨減が目立つ。色調は淡茶灰色を呈する。

坏 (38) 口縁端部を内湾させ、内面が沈線状になる。胎土は白色砂粒を僅かに含むが精製され、色調は橙色を呈する。全体的に磨減し調整不明。

碗 c (39, 40) 39 は復元高台径 5.4 cm。色調は白灰色を呈する。40 は内面に漆のようなものが残る。胎土は 0.5 cm 以下の砂粒を少量含み、色調は淡黄灰色を呈する。

越州窯系青磁

碗×坏 (41) 碗もしくは坏の口縁部である。精製された胎土で、内外面に緑灰色釉を施す。

178SD025 出土遺物 (Fig. 16)

須恵器

蓋 3 (1, 2) 2 点とも復元口径 14.0 cm。外面上半部は回転へらケズリ、内面上半部はナデ、その他は回転ナデ。焼成還元とも良好で、色調は灰色や暗灰色を呈する。1 の外面には重ね焼き痕が残る。

坏 c (3, 4) 3 は低い台形の高台を貼付する。復元高台径 7.7 cm。外面底部はナデ、それ以外は回転ナデ調整。4 の外面底部は回転へら切り後ナデ調整か。内面底部はナデ、それ以外回転ナデ。2 点とも焼成還元とも良好。

甕 (5) 復元高台径 16.3 cm。焼成還元とも良好で、色調は暗灰色を呈する。体部は外面叩きの後ナデ、内面も当て具の後ナデ調整。口縁部はヨコナデ調整。

土師器

碗 c (6) 高台径 8.7 cm。外面底部には回転へら切りの歪な渦巻き状の痕跡が残る。色調は橙灰色を呈する。

178SD025 暗茶色土出土遺物 (Fig. 16)

須恵器

蓋 c (7) 外面は回転ナデ、内面はナデ調整。焼成還元とも良好で、色調は灰色を呈する。

蓋 3 (8) 小片で全形が不明瞭であったが、蓋として報告する。復元口径 15.0 cm。端部を僅かに曲

げている。内外面とも回転ナデで、色調は淡灰色を呈する。

杯c (9, 10) 9は低い高台を貼付する。復元高台径9.6cm。底部内面は不定方向のナデ。色調は青灰色を呈する。10は底部端に高台を貼付する。復元高台径9.9cm。体部外面は丁寧なナデ、底部内面もナデ、その他は回転ナデ。色調は灰色を呈する。

壺 (11, 12) 11は復元底径11.7cm。底部外面には同心円状の当て具痕、内面はナデ、体部は外面が回転ヘラケズリの後ナデ、内面はヨコナデ調整。還元不良で外面茶色、内面暗紫色を呈する。12は外面及び外面底部が回転ヘラケズリ、内面はヨコナデ。焼成還元とも良好で色調は灰色を呈する。

土師器

杯a (13) 復元底径7.7cm。底部切り離しは回転ヘラ切り、内面底部はナデ調整か。その他は回転ナデ。色調は橙茶色を呈する。

碗c (14, 15) 2点とも磨減が目立つ。14は復元高台径8.0cm。色調は淡黄色を呈する。15は復元高台径8.9cm。色調は淡橙色を呈する。

甕 (16) 復元口径25.1cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や茶色粒をやや多く含み、色調は淡い橙色を呈する。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリである。

灰軸陶器

碗c (17) 底部端に高台を貼付する。復元高台径10.0cm。胎土は0.2cm以下の砂粒を含み、色調は灰色を呈する。外面回転ナデ、内面ナデ調整。内外面とも軸は全く残っていない。

土製品

土鐘 (18) 半分ほど欠損する。現存長3.5cm、最大径3.0cm、孔径は1.2cm。全体的に風化し調整不明。胎土は白色砂粒や角閃石を含み、色調は茶灰色を呈する。

178SD025 黒褐色土出土遺物 (Fig. 16)

須恵器

蓋c (19) 外面は回転ヘラ切り後雑なナデ調整。内面はナデ調整。焼成還元とも良好で、色調は淡灰色を呈する。

蓋3 (20) 口縁端部を僅かに丸めている。外面上半部は不明瞭だが、内外面とも回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

皿a (21) 復元口径14.8cm。内面には墨痕がある。外面底部は不定方向のナデ調整。

杯c (22~26) 22は復元口径14.3cm、器高5.6cm、復元高台径8.8cm。小さな高台を貼付し、体部は直線的に外開きする。体部内外面は回転ナデ、底部外面は回転ヘラ切り後ナデ、内面は不定方向のナデ。23~26は復元高台径6.4~9.6cm。体部は回転ナデ、底部は内外面ともナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

甕 (27) 復元口径19.2cm。口縁部はヨコナデ、体部外面叩き目、内面には当て具痕が残る。

土師器

甕 (28) 口縁部外面はヨコナデ、内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、内面ヘラケズリである。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡橙黄色や暗茶色を呈する。

178SD031 出土遺物 (Fig. 20)

土師器

皿a (1) 復元口径19.0cm、器高3.15cm、復元底径16.3cm。全体的に磨減するが、内面はミガキaのような痕跡が見える。色調は橙褐色を呈する。

杯a (2, 3) 2点とも底部ヘラ切り。2は器高2.4cm、底径7.9cm、底部には板状圧痕を残す。色

調は薄黄白色を呈する。3は橙灰色を呈する。

碗c (4~6) 全て磨減が目立ち調整不明瞭。4は細く小さい高台で、復元高台径6.8cm。色調は薄黄白色を呈する。5はやや高い高台で、復元高台径8.2cm。6は復元高台径8.7cm。色調は淡黄白色だが、高台外面が朱色を呈する。

瓶 (7) 破片で磨減も目立ち明確に言い切れないが、底部が開いているように見えることから瓶として報告するが、全形が普通の瓶と異なる。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈する。復元底径12.0cm。

甕 (8) 口縁部内面がハケ状の工具痕が残り、体部内面がヘラケズリ、外面がヨコナデ調整。胎土は角閃石がやや多く、色調は黄褐色を呈する。

黒色土器

碗c (9) 低い高台を貼付し、復元高台径7.4cm。外面にはぶい橙色を呈する。A類。

碗 (10, 11) 共にA類で、内面は黒化シミガキc、外面が回転ナデ調整。胎土は精製され褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (12) 外面はやや菱形の格子叩き。焼成はやや不良で、色調は淡黄白色を呈する。

石製品

砥石 (13) 折れた状態で、現存長8.85cm、幅6.8cm、厚さ2.2cm。使用面は5面である。

178SD031 黒茶色土出土遺物 (Fig. 20)

須恵器

蓋c (14) やや潰れたツマミを貼付する。外面上部は回転ヘラケズリ、外面上半部は不定方向のナデ、それ以外は回転ナデ調整。胎土は白色砂粒を多く含み、灰白色を呈する。

蓋3 (15) 復元口径15.6cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

土師器

杯a (16) 復元底径8.0cm。色調は茶灰色やぶい橙色を呈する。底部は回転ヘラ切り。

甕 (17) 復元口径16.2cm。体部と口縁部の境がやや厚し、端部に向かって薄くなる。体部内面はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ。胎土は0.1cm以下の白色砂粒や赤色粒を含み、色調は明褐色を呈する。

178SD035 出土遺物 (Fig. 17, Pl. 14)

土師器

杯a (1~11) 復元口径は1が11.2cmと小さいが、他は12.6~13.8cm、器高3.0~4.1cm、復元底径6.6~9.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切り、一部板状圧痕を残す。色調は白黄灰色や白黄茶色を呈する。

碗c (12, 13) 2点とも同様の器形で、12は復元口径14.3cm、器高4.9cm、復元高台径7.1cm。色調は白黄色を呈する。13は復元口径15.0cm、器高5.4cm、高台径7.6cm。色調は淡茶灰色を呈する。

甕 (14, 15) 14の胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は内面薄茶色、外面灰茶色を呈する。体部外面は粗いタテハケを施し、内面はヨコハケ。頸部はヨコナデである。15は口縁端部で、全面磨減し調整不明。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄茶色を呈する。

黒色土器

碗c (16) 低い高台を貼付する。復元口径16.8cm、器高5.8cm、復元底径8.0cm。外面は回転ナデ、内面は黒化シミガキcを施す。外面底部はナデで板状圧痕が若干残る。また、工具痕のようなものが

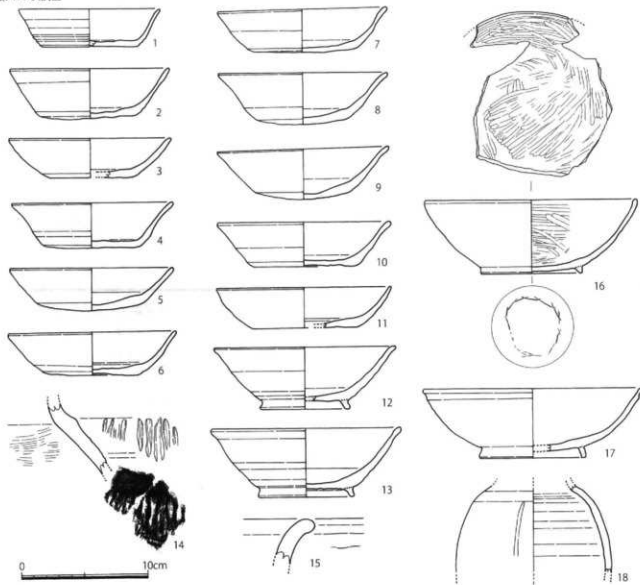


Fig. 17 178SD035 出土遺物実測図 (1/3)

円形に付いている。A類。

緑釉陶器

碗 (17) 復元口径 17.3 cm、器高 5.5 cm、復元底径 8.3 cm。胎土は精製され、色調は明灰色を呈する。外面下半はヘラケズリで、きれいな明黄緑色釉を内外面全面に施す。内面底部にはハリ痕跡がみられる。口縁部外側には浅い沈線が巡る。東海産。

越州窯系青磁

水注 (18) 胎土は淡灰色で微細な白色砂粒や黒色粒を僅かに含む。外面は回転ナデで、押圧縦線文を施し、光沢のある緑色味のある灰色釉を薄く施す。釉には細かい貫入が入る。内面は回転ナデで露胎。

178SD035 下層出土遺物 (Fig. 18, Pla. 14)

須恵器

碗 c (1) 復元口径 14.4 cm、器高 6.9 cm、高台径 7.5 cm。胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒や黒色粒を含み、色調は灰色を呈する。底部は明瞭ではないが糸切りのような痕跡がみられる。坏部はやや深く、内外面とも回転ナデ。焼成は良好だが、牛頭窯跡群の須恵器と異なり、やや焼き締まりが甘く、器形も若干異なるため、搬入品の可能性が考えられる。

土師器

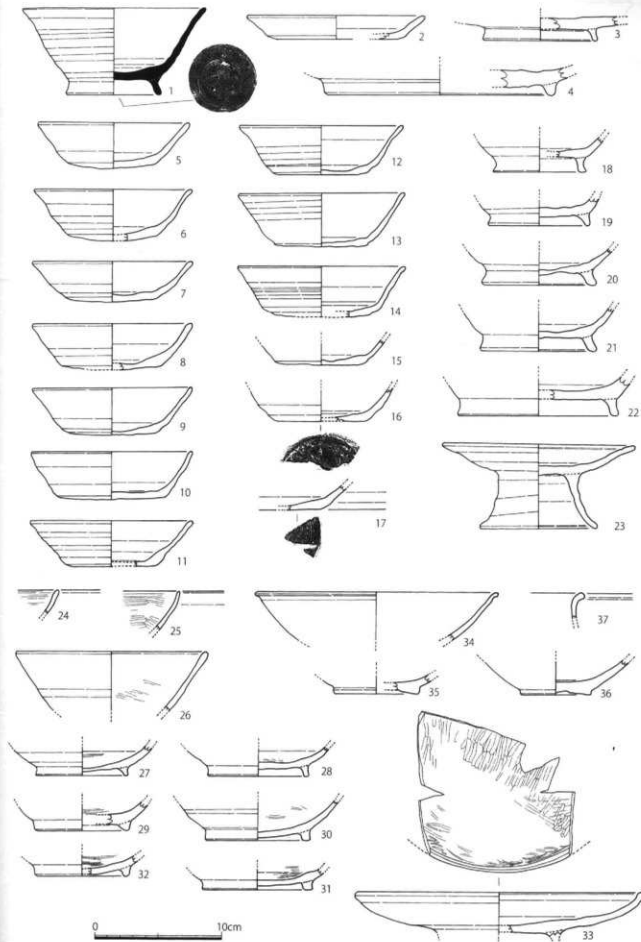


Fig. 18 178SD035 下層出土遺物実測図 (1/3)

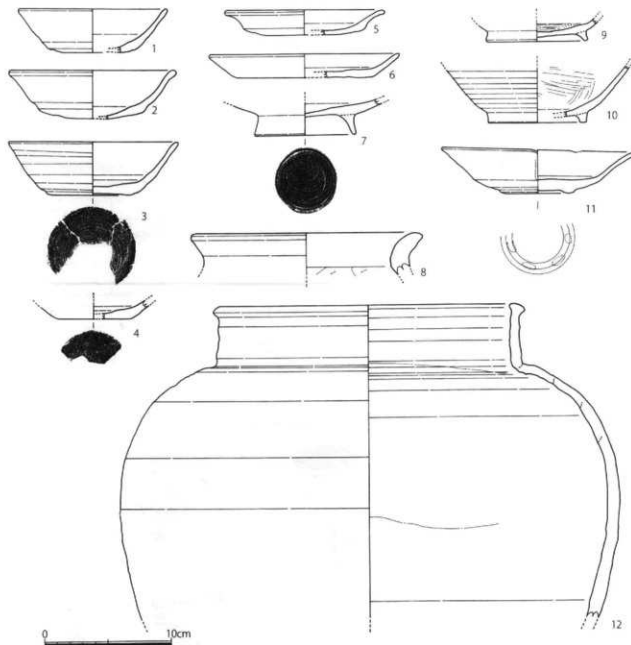


Fig. 19 178SD035 最下層出土遺物実測図 (1/3)

皿 a (2) 復元口径 14.0 cm、器高 1.9 cm、復元底径 10.8 cm。底部は回転ヘラ切り、その他はヨコナデ。色調は白黄灰色を呈する。

皿 c (3) 復元高台径 9.0 cm。坏部内面はナデ調整、その他は回転ナデ。色調は橙茶色を呈する。

大皿 c (4) 高台径 18.2 cm。胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒を含みやや粗い。色調は白黄灰色を呈する。全面磨減し調整不明。

坏 a (5~17) 復元口径 12.0~13.2 cm、器高 3.2~4.2 cm、復元底径 6.9~9.4 cm。底部切り離しは 16 と 17 が回転糸切りで、それ以外は回転ヘラ切りである。色調は淡黄白色や橙茶色を呈する。16 の胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒や茶色粒を含み、焼成良好で色調は橙茶色を呈する。17 の胎土は 0.1 cm 以下の白色砂粒や茶色粒を含み、焼成良好で色調は鈍い橙色を呈する。

碗 c (18~22) 復元高台径 7.4~12.6 cm。内外面とも回転ナデ、底部外面は回転ヘラ切り。色調は淡黄灰色や薄橙茶色を呈する。21 の底部外面の一部には煤が付着する。

高坏 (23) 復元口径 15.2 cm、器高 6.65 cm、復元脚部径 9.2 cm。胎土は僅かに白色砂粒を含むが精

製され、色調は淡橙色を呈する。口縁部内面と脚部内面には、とても浅い沈線が巡る。磨減するが内外面とも回転ナデ調整。

黒色土器

碗 (24~26) 全て A 類。25 は口縁部が若干内湾する。26 の復元口径 15.1 cm。磨減するが内面は黒化し僅かにミガキ c が残る。外面下半は回転ヘラケズリ。

碗 c (27~32) 復元高台径 7.3~8.7 cm。磨減も目立つが内面には僅かにミガキ c が残る。胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒を含み、色調は淡黄橙色や淡黄灰色を呈する。全て A 類。

皿 c (33) 復元口径 22.8 cm。胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒を含み、色調は薄橙茶色を呈する。外面は回転ナデ、内面はミガキ c が施されているが、中央付近は磨減しミガキ単位は不明瞭である。A 類、灰釉陶器

碗 (34) 復元口径 19.2 cm。胎土はやや黄色味の明灰色で、口縁部を曲げるように外反させるため、外面は僅かに沈線状に見える。内外面ともヨコナデ後に淡い緑色を帯びた透明釉を施す。

緑釉陶器

碗 (35) 高台はケズリ出で、復元高台径 5.6 cm。胎土は 0.1 cm 以下の砂粒を少量含み、色調は白黄橙色を呈する。焼成は不良で軟質に仕上がりに、内外面に淡い緑色釉を施す。

越州窯系青磁

碗 (36) I-1a 類。

中国陶器

壺 (37) 小片で全形も不明瞭である。胎土は微細な白色砂粒を含み、色調は薄白茶色を呈する。内外面は茶褐色釉が施されているが、口縁部は釉が剥落している。

178SD035 最下層出土遺物 (Fig. 19, Pla. 14)

土師器

坏 a (1~4) 1・2 は底部切り離しが回転ヘラ切り。内外面とも回転ナデである。1 は復元口径 11.8 cm、器高 3.4 cm、復元底径 7.0 cm。色調は薄黄灰色を呈する。2 は復元口径 13.2 cm、器高 3.85 cm、復元底径 8.5 cm。色調は薄黄橙色を呈する。3・4 の胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒や金雲母の微粒子を含み、色調は淡橙色を呈する。3 は底部切り離しが回転糸切りに見えるが、丁寧な回転ヘラケズリの可能性もある。口径 13.4 cm、器高 4.2 cm、底径 7.4 cm。体部内外面は回転ナデ調整である。4 は底部切り離しが回転糸切りで、復元底径 6.0 cm。

皿 a (5, 6) 5 は復元口径 11.6 cm、器高 1.95 cm、復元底径 9.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、色調は薄黄色を呈する。6 は復元口径 15.0 cm、器高 1.9 cm、復元底径 10.4 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、内面底部には僅かに煤のようなものが付着する。胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒や茶色粒、微細な金雲母を多く含み、色調は淡橙褐色を呈する。

碗 c (7) 高い高台を貼付し、高台径 8.0 cm。胎土は 0.4 cm 以下の白色砂粒や茶色粒を含み、色調は淡橙色を呈する。底部切り離しは回転糸切りで、その他内外面は回転ナデ調整。

甕 (8) 口縁部はヨコナデで、丹塗りされている。体部内面はヘラケズリ。

黒色土器

碗 c (9, 10) 2 点と A 類。胎土は 0.1 cm 以下の砂粒や微細な金雲母を含み、色調は橙灰色や薄黄灰色を呈する。9 は外開きの高台を貼付し、復元高台径 8.0 cm。10 は復元高台径 7.8 cm。外面回転ナデ、内面は磨減するがミガキ c がうっすら確認できる。

越州窯系青磁

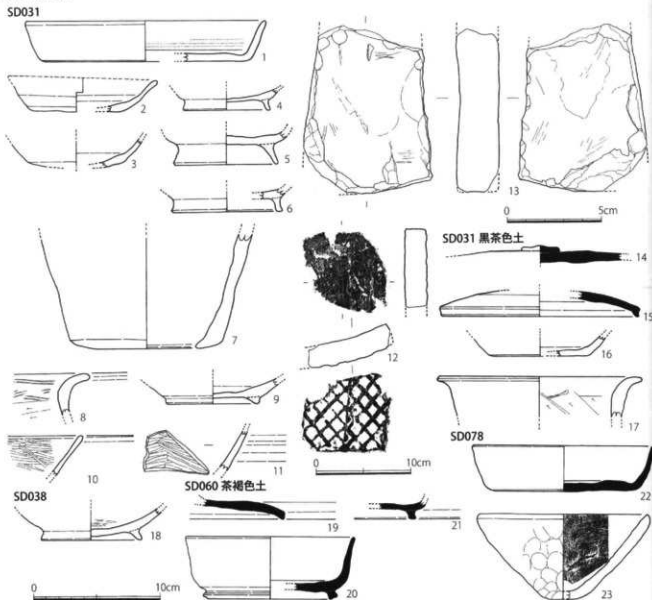


Fig. 20 178SD031・038・060・078 出土遺物実測図 (1/3, 12は1/4, 13は1/2)

皿 (11) I-1b 類。高台はやや低い。全面施軸するが高台層付は軸を抜き取り、目跡を残す。内面の底部と体部の屈曲部には浅い沈線が巡る。口縁端部には輪花がありそれに対応して捲押し縦線文が全体で4本施されている。口径15.2cm、器高3.45cm、高台径5.7cm。

中国陶器

壺 (12) 復元口径24.6cm。直立する口縁部で、端部は肥厚する。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み粗く、色調は灰色ややや暗い灰色を呈する。軸調は黄褐色や暗黄褐色で透明度は低い。口縁部内外面から体部外面は回転ナデの後薄く施軸するが、下位ほど剥落が目立つ。体部内面は回転ナデの後ナデで、下半の一部に軸が垂れて付着している。

178SD038 出土遺物 (Fig. 20)

黒色土器

碗c (18) 外開きの高台を貼付し、高台径7.95cm。磨滅するが内面にミガキcを残す。B類。

178SD060 茶褐色土出土遺物 (Fig. 20)

須恵器

蓋c3 (19) 外面上半部は回転ヘラケズリ、内面のほとんどが不定方向のナデ、それ以外は回転ナデ。

胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。

坏c (20, 21) 底部内面不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラ切り痕跡を残す。胎土は白色砂粒を含み、色調は灰色や暗灰色を呈する。20は復元口径13.4cm、器高4.9cm、復元高台径10.6cm。

178SD078 出土遺物 (Fig. 20)

須恵器

坏a (22) 口径17.4cm、器高3.6cm、底径15.5cm。外面底部は回転ヘラ切り後不定方向のヘラケズリを行う。還元やや不良で色調は黄褐色を呈する。

製塩土器

焼塩壺 (23) 円錐形の焼塩壺で、復元口径13.6cm、器高6.7cm。外面には指頭圧痕、内面には布目痕が残る。胎土は0.1cm以下の砂粒を多く含み、色調は橙褐色を呈する。

井戸

178SE020 茶褐色土出土遺物 (Fig. 21)

製塩土器

焼塩壺 (1) 小片で明確ではないが、壺型の製塩土器の頸部付近と推測される。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み粗く、色調は橙褐色を呈する。内面には当て具のような平行する線が残り、外面には叩き目が残る。

灰釉陶器

壺 (2) 肩部の破片だが、細い頸を持つ壺と推測される。胎土は精製され灰色を呈する。外面には深い緑灰色の透明釉を施す。内面は回転ナデで露胎。耳部は1個しか残っていない。耳部は丁寧に面取りされる。

178SE020 暗茶色土出土遺物 (Fig. 21)

須恵器

壺 (3) 復元高台径11.8cm。胎土は0.6cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗青灰色を呈する。底部外面は粗いナデ、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。

土師器

甕 (4) 復元口径29.6cm。胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、僅かに角閃石を含む。外面はタテハケで下半は煤が付着する。内面はヨコハケのあとナデ調整し、ハケ目はうっすらと残る。

黒色土器

甕 (5) 胎土は0.1m以下の白色砂粒や茶色粒を含み、色調は薄茶色を呈する。内面は黒化シミガキを施し、外面には煤が付着する。A類。

瓦類

平瓦 (6) 外面は方形格子叩き、内面布目痕を残す。色調は淡茶灰色を呈する。

石製品

砥石 (7) 欠損部以外研磨され、擦痕が残る。

178SE020 黄茶色土出土遺物 (Fig. 21)

土師器

碗c (8) 復元口径14.3cm、器高4.9cm、復元高台径8.0cm。焼成不良で全体的磨滅し調整不明。色調は白黄色を呈する。

緑釉陶器

碗 (9) 胎土は須恵質に焼成され、色調は淡灰色を呈する。回転ナデの後光沢のある薄緑色釉を薄

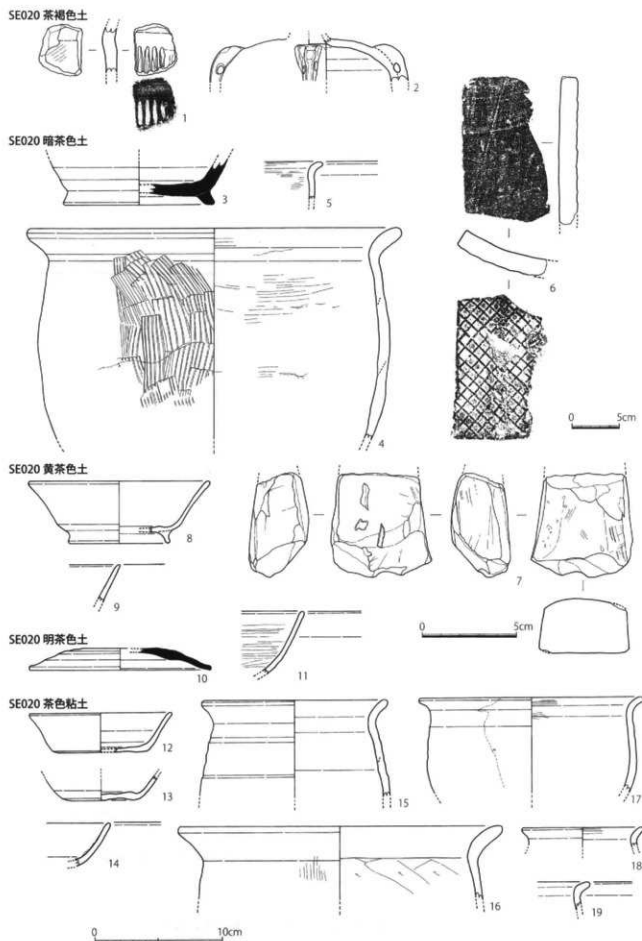


Fig. 21 178SE020 出土遺物実測図 (1/3, 6は1/4, 7は1/2)

く施す。東海産か。

178SE020 明茶色土出土遺物 (Fig. 21)

須恵器

蓋3 (10) 復元口径14.4 cm。口縁端部は丸味があるが、内面に僅かに沈線を巡らす。外面上半部は回転ヘラ切り後未調整、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。

黒土器

碗 (11) 胎土は淡茶灰色を呈する。外面ヨコナデ、内面は黒化しミガキが残る。A類。

178SE020 茶色粘土出土遺物 (Fig. 21)

土師器

坏a (12, 13) 12は復元口径11.2 cm, 器高3.1 cm, 復元底径7.6 cm。底部はヘラ切りで板状圧痕を残す。色調は白黄色を呈する。13は復元底径6.1 cm。底部は回転ヘラ切り。色調は白灰色を呈する。

碗 (14) 胎土は精製され色調は淡黄茶色を呈する。内面には漆が厚く付着する。

甕 (15, 16) 15は復元口径14.6 cm。胎土は0.3 cm以下の白色砂粒を多く含み、角閃石も僅かに含む。色調は暗茶色を呈する。全体的にヨコナデだが器面は荒れている。16は復元口径25.6 cm。全体的に磨滅気味だが体部外面にはタテハケ、内面はヘラケズリを残す。

黒土器

甕 (17) 復元口径17.8 cm。胎土は0.2 cm以下の白色砂粒を含み、色調は薄黄橙色を呈する。内外面とも磨滅するが、内面は黒化し口縁部内面はヨコハケ、体部内面はミガキを施す。外面は煤が付着する。A類。

小甕×小壺 (18) 復元口径9.6 cm。内面は黒化し、ミガキが僅かに残る。外面は煤が付着する。A類。

小甕 (19) 胎土は0.2 cm以下の砂粒を含む。内面は黒化しミガキ、外面はヨコナデ。A類。

178SE030 出土遺物 (Fig. 22・23)

須恵器

蓋c3 (1~4) 復元口径14.0~18.4 cm。1の上面にはヘラ記号がある。2の口縁端部は摘まんだだけの断面三角形である。4は口縁端部外面に沈線状の段が巡る。

蓋3 (5~16) 復元口径12.8~17.6 cm。外面上半部が回転ヘラケズリ、内面上半部はナデ調整、その他は回転ナデ調整。胎土は0.1 cm以下の白色砂粒を多く含む。7は口縁端部外面に沈線状の段が巡る。8は外面中位に浅い沈線が2条めぐり、10は器面全体が被打ち、外面端部には重ね焼き痕が残り、色調も灰色と黒色に分かれている。14~16の口縁端部は僅かに摘まんだ程度である。15は外面上半部が回転ヘラケズリの後粗いナデ調整。内面はやや平滑である。

蓋c (17) 外面上部は回転ヘラケズリでツマミに近い方はその後回転ナデ。内面は不定方向のナデ。色調は暗茶色を呈する。

皿a (18) 復元口径16.4 cm, 器高1.95 cm, 復元底径14.0 cm。底部外面は回転ヘラ切りの後粗いナデ調整、内面は回転ナデの後ナデ、その他は回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。

坏a (19) 復元底径10.4 cm。底部外面は回転ヘラケズリ、内面は一方の強いナデ調整、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

坏c (20~27) 内面底部は不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラ切り。体部内外面は回転ナデ。20は低い高台を貼付する。復元口径12.0 cm, 器高4.2 cm, 復元高台径8.2 cm。21は復元口径13.8 cm, 器高3.75 cm, 高台径9.45 cm。底部外面は回転ヘラ切り後粗いナデ。

高坏 (28) 脚部径11.6 cm。内外面とも回転ナデ。

SE030

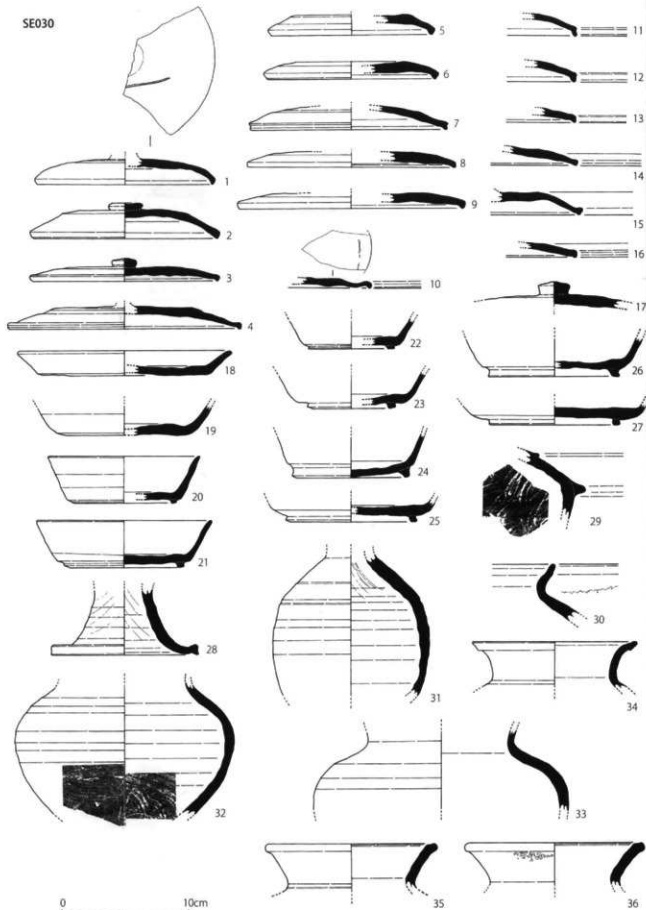
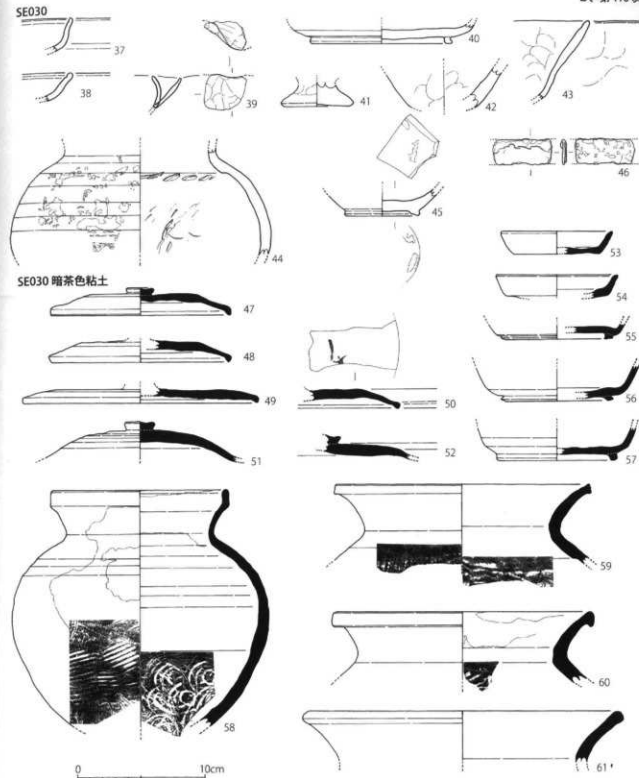


Fig. 22 178SE030 出土遺物実測図① (1/3)

SE030



SE030 暗茶色粘土

Fig. 23 178SE030 出土遺物実測図② (1/3)

壺 e(29) 体部の突起部分で、内面は当て具をヨコナデで消している。胎土は微細な砂粒を多く含み、色調は灰色を呈する。

壺 (30 ~ 33) 30 は内外面回転ナデで、外面体部には緑灰色の自然軸のみられる。31 は内外面とも回転ナデで内面上部に絞り痕が残る。32 は体部中位まで回転ナデで、体部下半は外面叩きの後ナデ、内面は当て具痕をナデ消している。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色や黒灰色を呈する。33 は内外面回転ナデで、焼成良好で色調は暗灰色を呈する。

壺 (34～36) 34は復元口径13.0cm。内外面回転ナデ。還元やや不良で淡茶灰色を呈する。35・36はほぼ同じ器形で、内外面とも回転ナデ。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み灰色を呈する。35は復元口径13.6cm。36は復元口径14.2cm。口縁端部付近に自然軸がある。

土師器

坏 (37, 38) 口縁端部内面に沈線が巡る。内外面回転ナデでミガキは確認できない。色調は黄褐色を呈する。37の胎土は微細な砂粒を含む。38の胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含む。

耳皿 (39) 胎土は軟質の須恵器のような焼成具合で灰黄色を呈する。外面は指頭圧痕がうっすら残り、全く軸はないが緑軸陶器である可能性も考えられる。

坏c (40) 復元口径11.25cm。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は橙褐色を呈する。残存する外面は回転ヘラケズリ、内面は不定方向のナデ。

小壺 (41) 小片のため明確に言い切れぬが壺に付いていた脚部と推測される。胎土は精製され色調は暗茶褐色を呈する。全体的にうっすらと指頭圧痕が残る。復元脚径5.7cm。

製塩土器

焼塩壺 (42, 43) 42は円錐形の焼塩壺の底部付近とみられ、内外面とも指頭圧痕を残す。外面は被熱で荒れている。胎土は微細な白色砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。43は円錐形のもので、内外面に指頭圧痕を残す。胎土は精製され、色調は内面赤茶色で、外面は被熱で紫赤色などに変色する。

施軸陶器

壺 (44) 胎土は砂粒が少なく精製され、焼成はやや軟質で色調は黄白色を呈する。内面は回転ナデで当て具痕を消している。外面は回転ナデで、軸の残りは良くなく全体的に点在する状況である。軸は二彩で、肩部が明灰色軸で、体部中位以下が黄褐色軸である。

越州窯系青磁

碗 (45) 1-1b類。内外面とも緑灰色釉を施し、内外面に目跡を残す。

金属製品

用途不明品 (46) 現存長4.2cm、幅2.0cm、厚さ0.15cm程の鉄製の板材で、全面錆に覆われる。用途は不明。

178SE030 暗茶色粘土出土遺物 (Fig. 23)

須恵器

壺c3 (47～50) 47・48は外面上半部が回転ヘラケズリ、内面上半部は回転ナデの後ナデ調整。その他は回転ナデ。47は復元口径14.2cm、器高2.2cm。49の器形は扁平で復元口径18.6cm。外面中位が回転ヘラケズリ、内面の殆どが回転ナデの後ナデ調整。50の上面は回転ヘラ切りで、不明瞭だが墨痕のようなものがみられる。

壺c (51, 52) 51の外面は回転ヘラ切りの後粗いナデ調整。内面上半部は回転ナデ後不定方向のナデ。色調は淡灰色を呈する。52の外面は回転ヘラ切りの後ナデ調整。内面上半部は回転ナデ後不定方向のナデ。色調は暗灰色を呈する。

小坏a (53, 54) 2点は破片であるが、胎土や焼成具合などから同一体の可能性も考えられる。色調は灰色を呈する。53は復元口径8.8cm、器高1.8cm、復元底径6.7cm。54は復元口径9.6cm、器高約1.85cm、復元底径7.8cm。

坏c (55～57) 55・56とも内面底部が不定方向のナデ、底部外面はナデ調整。その他は回転ナデ調整。55の色調は灰褐色を呈する。56は高台が潰れている。色調は灰白色を呈する。57は底部外面が不定方向のナデ、それ以外は回転ナデ調整。色調は黒灰色や灰色を呈する。

壺 (58) 復元口径14.0cm。頸部は外反し、口縁端部を直線的に立ち上げる。胎土は0.1cm以下の茶灰色を多く含み、色調は淡灰色を呈する。内外面上半部は回転ナデ、外面下半は叩きの後ヨコナデ。内面下半は当て具痕が残る。頸部内面と肩部外面には自然軸が付着する。一見灰軸陶器のようにも見える。

壺 (59～61) 59は復元口径20.2cm。還元不良で淡茶灰色を呈する。頸部内外面はヨコナデ、体部外面は叩き、内面は同心円の当て具を残す。60は復元口径20.6cm。胎土は微細な砂粒を多く含み、灰黄色を呈する。頸部内外面はヨコナデで部分的に自然軸が付いている。体部内面には当て具痕が残る。61は復元口径25.2cm。内外面ともヨコナデ調整。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。

178SE030 黄茶色土出土遺物 (Fig. 24・25)

須恵器

蓋3 (1, 2) 2点とも外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は回転ナデの後ナデ調整、その他は回転ナデ。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、色調は淡灰色を呈する。1は復元口径13.2cm、2は復元口径13.8cm。

皿a (3) 底部付近の破片のため全形が掴みにくい。内面は回転ナデの後不定方向のナデ、外面は回転ヘラケズリである。胎土は0.6cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は灰白色や暗灰色を呈する。他の器種の可能性も考えられる。

坏c (4～9) 復元口径12.3～14.8cm。器高3.75～4.65cm、復元高台径8.6～9.8cm。底部内面は不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラ切り、その他は回転ナデ調整。色調は淡灰色や暗灰色などを呈する。4は全体的に歪んでいる。

壺 (10) やや胴が長くきれいな作りをした壺で、復元口径8.9cm、器高28.5cm、復元底径13.1cm。外面下半は格子叩きの後回転ヘラケズリを行っているため、叩きはうっすらと見える。体部内面の下方2/3ほどは同心円の当て具痕を残す。底部外面は回転ヘラケズリ、内面底部は強い回転ナデ。体部上位と口縁部は回転ナデ。胎土は微細な白色砂粒や茶色粒をやや多く含み、還元やや不良で色調は灰褐色や茶灰色を呈する。

壺b (11) 頸部は内外面とも回転ナデで、中位に浅い沈線が巡る。体部は内外面回転ナデだが内面上半部は強い回転ナデである。色調は暗灰色を呈する。

小壺 (12) 胴部径10.0cmで、上下を欠損するため全形は不明。胎土は微細な白色砂粒を含み、色調は淡灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

壺 (13, 14) 13は復元口径19.2cm。口縁部は回転ナデ、体部外面は格子叩きをナデ消している。内面は同心円の当て具痕を残す。還元やや不良で灰茶色を呈する。14の胎土は0.4cm以下の白色砂粒を多く含み、焼成還元不良で色調は黄褐色を呈し、器形で須恵器とわかるが、それ以外では一見土師器に見える。

横板 (15) 頸部が欠損する。胴部最大径は32.4cm。内面は同心円の当て具痕、外面には平行叩き痕が明瞭に残る。内面胴部中位には5cm程の円形の窪みがあり、製作時に開いていた穴を外側から粘土板で塞いだものと考えられる。胎土は0.5cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色や灰色を呈する。

土師器

大蓋3 (16) 復元口径23.0cm。胎土は微細な砂粒を含み、色調は橙色を呈する。外面上部は回転ヘラケズリの後ミガキaで、それ以外の内外面全てにミガキaを施す。

坏c (17) 口径12.85cm。器高3.2cm、高台径10.2cm。全面にミガキaを施す。色調は橙色を呈する。

SE030 黄茶色土

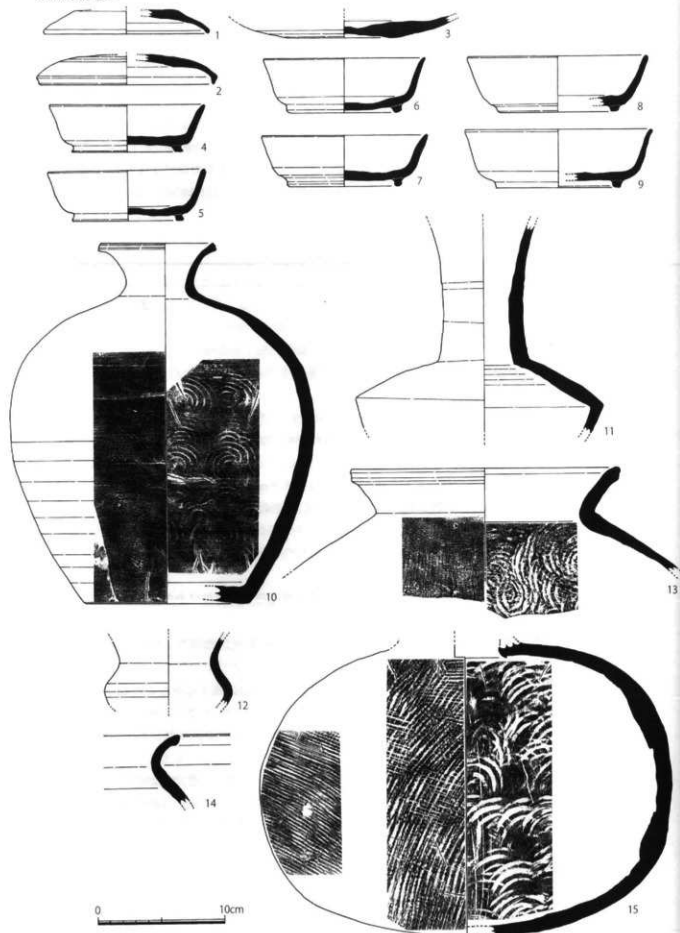
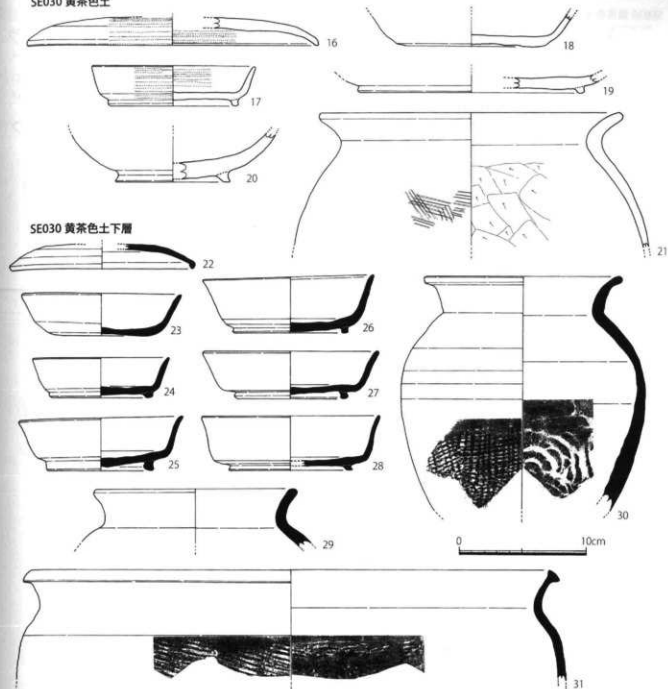


Fig. 24 178SE030 出土遺物実測図③ (1/3)

SE030 黄茶色土



SE030 黄茶色土下層

Fig. 25 178SE030 出土遺物実測図④ (1/3)

皿 a (18) 底部外面は回転ヘラ切りだが、それ以外は磨滅し調整不明。胎土は0.2 cm以下の白色砂粒を含み、色調は黄白色を呈する。

大皿 c (19) 復元高台径17.8 cm。外面底部は回転ヘラケズリ、内面は磨滅し調整不明。胎土は0.1 cm以下の白色砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。

鉢 (20) 復元高台径9.0 cm。内外面とも磨滅し調整不明。胎土は精製され、色調は淡橙色を呈する。

甕 (21) 頸部より体部が張る形で、復元口径24.0 cm。胎土は0.3 cm以下の砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はヘラケズリ。

178SE030 黄茶色土下層出土遺物 (Fig. 25・26)

須恵器

蓋 3 (22) 復元口径14.6 cm。外面上半部回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他

SE030 黄茶色土下層

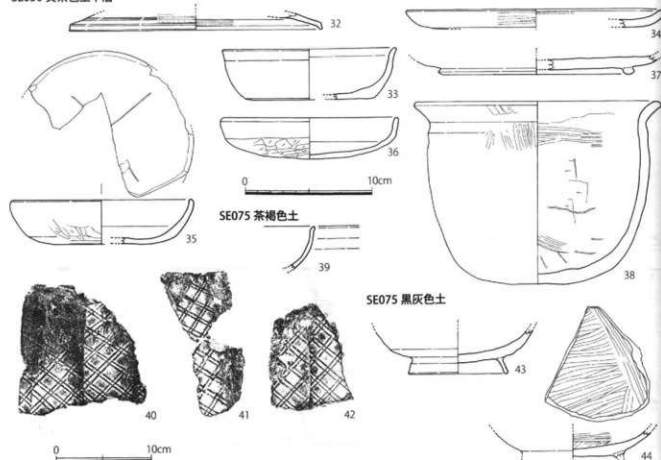


Fig. 26 178SE030 (5)・075 出土遺物実測図 (1/3, 42~44は1/4)

は回転ナデ。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を多く含み灰色や暗灰色を呈する。

坏 a (23) 口径12.65cm。器高3.4cm、高台径8.4cm。底部内面は回転ナデの後不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラケズリで、一部粘土が付着する。体部は回転ナデ調整。焼成還元ともやや不良で色調は淡灰黄色を呈する。

坏 c (24~28) 復元口径10.8~14.0cm。器高3.15~4.6cm、復元高台径8.25~9.8cm。底部内面は回転ナデのあと不定方向のナデ、体部は回転ナデ調整。色調は灰白色や灰黄色を呈する。24・25・27の底部は回転ヘラ切り後未調整。25の高台は粘土紐を付けただけのような感じである。26の底部外面は回転ヘラケズリ。27は外面に僅かに自然釉が付いている。

甕 (29~31) 29は復元口径16.0cm。内外面とも回転ナデ。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡灰黄色を呈する。30は復元口径15.0cm。体部下は外面が格子叩き、内面が同心円の当て具痕が残る。胎土は0.3cm以下の白色砂粒や黒色粒を多く含み、焼成還元ともやや不良で色調は淡灰色を呈する。31は復元口径42.2cm。口縁部はヨコナデ、体部外面は叩きの後一部ヨコナデ、内面は当て具の一部をヨコナデする。胎土は0.2cm以下の白色砂粒を含み、色調は黒灰色を呈する。

土師器

蓋 3 (32) 復元口径20.0cm。内外面ともミガキ a を施す。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を含み、色調は橙褐色を呈する。

坏 a (33) 復元口径13.7cm。器高4.0cm、復元底径10.2cm。外面磨減し調整不明。口縁部は回転ナデで、内面底部はナデ調整か。胎土は0.1cm以下の茶色粒を多く含み、色調は淡橙色を呈する。

皿 (34) 復元口径20.4cm。内面底部は丁寧ナデ、底部外面は回転ヘラケズリの後ミガキ a、そ

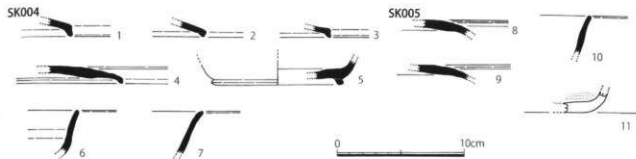


Fig. 27 178SK004・005 出土遺物実測図 (1/3)

の他はミガキ a を施す。色調は橙褐色を呈する。

皿 b (35, 36) 35は復元口径20.4cm。器高3.5cm。体部は丸味がある。口縁部は回転ナデ、底部は手持ちヘラケズリで、内面にはヘラ記号がみられる。胎土は精製され色調は淡黄褐色を呈する。36は口径14.0cm。器高3.35cm。口縁部は回転ナデ、底部は手持ちヘラケズリで、内面は不定方向のナデ調整。胎土は微細な白色粒や茶色粒を含むが精製され、色調は淡黄褐色を呈する。

大皿 c (37) 復元高台径15.4cm。底部外面は回転ヘラケズリだが、ほかは磨減し調整不明。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。

甕 (38) 復元口径19.5cm。口縁部外面と体部上位は浅く広いハケ、体部上位はヨコハケ、中位以下はヘラケズリで、底面には工具の当たり痕が残る。外面下半は使用時の被熱で磨減している。色調は橙色などを呈する。

178SE075 茶褐色土出土遺物 (Fig. 26)

土師器

碗 (39) 口縁部を僅かに外反させる。内外面とも回転ナデ調整。色調は明橙色を呈する。

瓦類

平瓦 (40~42) 二重格子叩き。色調は淡黄灰色を呈する。42は焼成やや不良。

178SE075 黒灰色土出土遺物 (Fig. 26)

土師器

碗 c (43) 復元高台径7.8cm。内面不定方向のナデ、底部外面ヘラ切り、その他回転ナデ。色調は淡黄褐色を呈する。

黒色土器

碗 c (44) 底部付近の破片で、内面は黒化し丁寧ミガキ c が施されている。外面底部は回転ヘラ切り後板状圧痕を残す。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈する。A類。

土坑

178SK004 出土遺物 (Fig. 27)

須恵器

蓋 3 (1~4) 色調は暗灰色を呈する。1は還元がやや不良で淡赤茶色を呈する。4は外面上半部が回転ヘラケズリ、内面上半部ナデ、その他は回転ナデ調整。口縁端部を僅かに擠み出している。

坏 c (5) 復元高台径10.4cm。内外面回転ナデ、内面底部はナデ調整か。色調は淡黒灰色や灰黄色を呈する。

坏 (6, 7) 2点とも内外面は回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。

178SK005 出土遺物 (Fig. 27)

須恵器

蓋 (8, 9) 2点とも外面上部は回転ヘラケズリ、内面上部はナデ、その他は回転ナデ調整。色調は

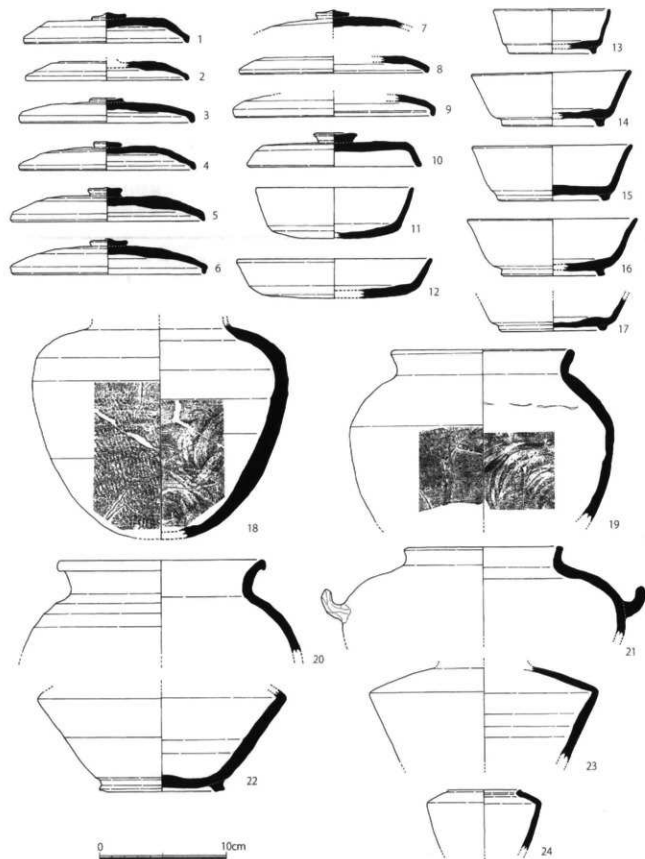


Fig. 28 178SK010 出土遺物実測図① (1/3)

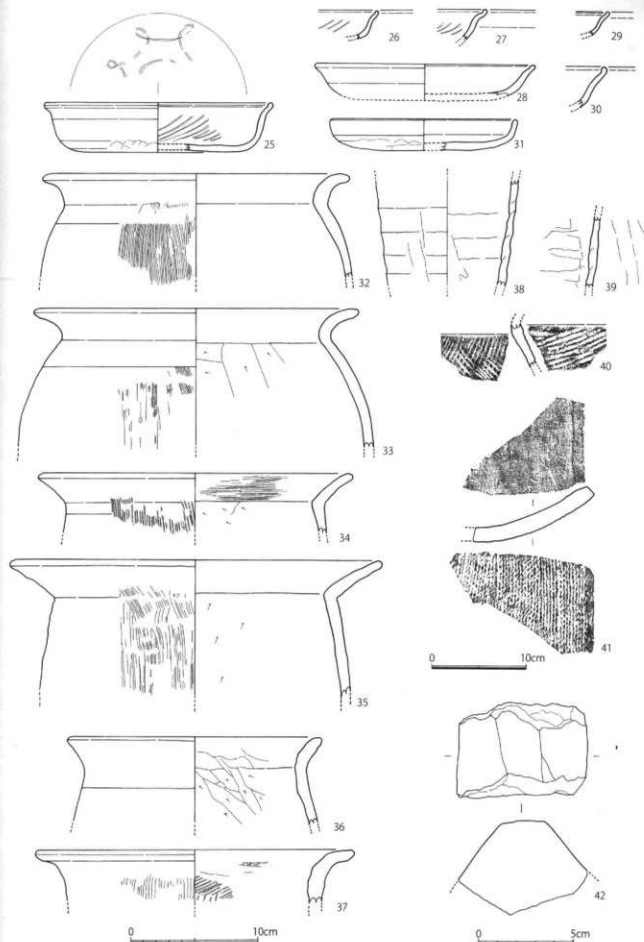


Fig. 29 178SK010 出土遺物実測図② (1/3, 41は1/4, 42は1/2)

8が暗青灰色で、9は還元がやや不良で茶灰色を呈する。

坏 (10) 内外面回転ナデで、色調は暗灰色を呈する。

土師器

坏 a (11) 底部と外面との境がやや丸みがある。内面にはミガキ a を施す。色調は淡橙黄色を呈する。

178SK010 出土遺物 (Fig. 28・29, Pla. 14)

須恵器

蓋 c3 (1~6) 復元口径 13.0~15.8 cm。ツマミは扁平な擬宝珠形。外面上半部は回転ヘラズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。5 は全体的に難な作りで、色調は淡灰色を呈する。

蓋 c (7) ツマミは扁平な擬宝珠形。外面上半部は回転ヘラズリ、内面上半部は不定方向のナデ。色調は灰色を呈する。

蓋 3 (8, 9) 外面上半部 2/3 ほどが回転ヘラズリで、それと対応する内面が不定方向のナデ調整。8 は口縁端部を僅かに曲げた程度。

蓋蓋 (10) 口径 13.8 cm、器高 2.65 cm。胎土は微細な白色砂粒を多く含む。還元焼成とも良好で色調は灰色を呈する。外面は回転ナデ、内面は不定方向のナデ調整。

坏 a (11, 12) 11 は復元口径 12.4 cm、器高 4.0 cm、復元底径 10.6 cm。底部外面はヘラ切り後雑なナデで、一部板状瓦痕が残る。その他内面は回転ナデ。12 は復元口径 15.4 cm、器高 3.05 cm、復元底径 13.4 cm。底部外面はヘラ切りだが磨減しその他調整不明瞭。色調は灰白色を呈する。

坏 c (13~17) 13 だけ極端に小さいが、その他は復元口径 12.6~13.4 cm、器高 4.25~4.55 cm、復元高台径 8.05~8.75 cm。調整は底部内面が不定方向のナデ、外面が回転ヘラ切り後ナデ、その他は回転ナデ。13 は復元口径 9.2 cm、器高 3.55 cm、復元高台径 6.9 cm。焼成還元とも良好で色調は暗灰色を呈する。14 は底部外面に板状瓦痕を残す。

甕 (18~20) 18 の胎土は 0.1 cm 以下の白色砂粒をやや多く含む、焼成がやや不良で、還元良好。色調は淡灰色を呈する。外面は叩きの後回転ナデ、内面下半は当て具痕をナデ消している。底部付近は使用のためか磨減している。19 は復元口径 13.9 cm。外面は叩きの後回転ナデ、内面下半は当て具をナデ消している。焼成還元とも良好で色調は淡灰色を呈する。体部上半部と口縁部は内外面とも回転ナデ調整。20 は復元口径 16.4 cm。焼成還元とも良好で色調は暗灰色を呈する。内外面とも回転ナデだが、体部内面は強い回転ナデ。

蓋 c (21) いわゆる短頸蓋で、把手が両側に貼付される。胎土は白色砂粒を多く含むやや粗く、色調は灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。復元口径 12.5 cm。

蓋 b (22, 23) 22 は復元高台径 9.8 cm。体部外面下半は回転ヘラズリ、底部内面は不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラズリ、その他は回転ナデ調整。胎土は微細な白色粒や黒色粒を含み、焼成還元とも良好で色調は暗青灰色を呈する。23 の胎土は微細な白色粒を多く含む、焼成還元とも良好で色調は暗青灰色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

小壺 (24) 口縁端部を僅かに揃み出す。復元口径 5.8 cm。胎土は精製され、焼成還元とも良好で色調は暗灰色を呈する。内外面とも回転ナデ。

土師器

坏 (25~30) 都城系の土師器で、体部は丸みを帯び、口縁端部は外反した後僅かに内湾させ、内面に沈線状の窪みが巡る。胎土は白色砂粒や赤色粒を少量含む、色調は薄茶褐色や淡橙褐色を呈する。25~27 は内面に暗文が残る。28~30 については磨減が目立ち暗文は確認できない。25 は復元口径

18.0 cm、器高 3.95 cm、復元底径 14.1 cm。外面底部が手持ちヘラズリで、その他は回転ナデ。胎土は白色砂粒を僅かに含む、色調は赤褐色を呈する。26 は外面が回転ナデ調整。27 は暗文以外の所は回転ナデで外面下半はミガキのようにも見える。28 は復元口径 17.4 cm。

皿 b (31) 復元口径 14.8 cm、器高 2.5 cm。胎土は赤色粒を多く含む、色調は薄橙茶色を呈する。外面下半は不定方向の手持ちヘラズリで、口縁部はヨコナデ調整。口縁端部内面や内面の一部に煤が付着する。

甕 (32~38) 32~35 は全体的に胎土に 0.3 cm 以下の白色砂粒を多く含む、色調は淡橙黄色や薄赤茶色を呈する。体部外面はタテハケ、内面はヘラズリである。32 は復元口径 24.2 cm。体部外面は細かいタテハケ、内面は磨減するがヘラズリである。33 は復元口径 25.6 cm。体部外面はとても細かいタテハケか強い縦方向なナデ調整である。34 は復元口径 24.8 cm。口縁部内面はヨコハケの後ナデ調整する。35 は復元口径 29.4 cm。体部外面は細かいタテハケ、内面はヘラズリ、口縁部内面は磨減するがヨコハケのようである。36 は復元口径 20.0 cm。胎土は 0.1 cm 以下の白色砂粒を含み、角閃石や雲母も多く含む。内面は不定方向のケズリ、口縁部はヨコナデ、体部は縦方向のナデ。37 は復元口径 25.1 cm。口縁部は磨減が目立つが内面はヨコハケのようも見える。体部内外面はハケ目調整。胎土は 0.1 cm 以下の白色砂粒や赤色粒と共に角閃石を多く含む。色調は薄橙茶色を呈する。

製塩土器

埴壇蓋 (38~40) 38・39 は円筒形のもので現存復元径 9~11 cm。胎土は 0.5 cm 以下の砂粒や赤色粒を多く含む。外面に縦方向、内面に横方向もしくは不定方向のナデ調整を行うが、粘土組織が明瞭に残る。焼成は良好で淡灰黄色や淡灰茶色を呈する。40 は甕形のもので、胎土は 0.1 cm 以下の砂粒を多く含む、赤色粒も少量含む。色調は淡橙茶色を呈する。外面は叩き、内面は当て具痕が残る。

瓦類

平瓦 (41) 凸面は縄目、凹面は布目が残る。側面はヘラズリ。

石製品

砥石 (42) 欠損するが、3面が研磨される。

178SK015 上層出土遺物 (Fig. 30)

須恵器

蓋 1 (1, 2) 1 はやや暗い灰色を呈する。残存範囲では全て回転ナデ。2 は内面上半部がナデ、その他は回転ナデ。還元不良で色調は淡黄茶灰色を呈する。

蓋 c3 (3) 復元口径 11.0 cm、器高 3.1 cm。外面上半部は回転ヘラズリ、内面上半部は回転ナデのあと粗いナデ調整。胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒や黒色粒を含み、色調は白灰色や灰色を呈する。

蓋 3 (4) 残存範囲では全て回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。

蓋 c (5) 扁平のやや大きい擬宝珠のツマミを貼付する。胎土は 0.2 cm 以下の白色砂粒などを含み、色調は灰色を呈する。

坏 (6) 内外面とも回転ナデ。色調はやや暗い灰色を呈する。

土師器

甕 (7) 丸味のある口縁部で、復元口径 17.8 cm。胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒を含み、色調は薄橙茶色を呈する。口縁部はヨコナデ、体部外面はヨコハケ、内面はヘラズリ。

178SK036 出土遺物 (Fig. 30)

土師器

坏 a (8) 復元口径 14.1 cm、器高 3.5 cm、復元底径 8.2 cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。色調は

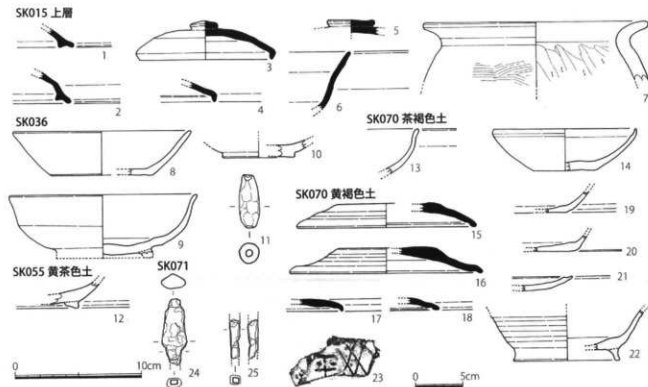


Fig. 30 178SK015・036・055・070・071 出土遺物実測図 (1/3、23は1/4)

薄い橙白色を呈する。

椀c (9) 体部は口縁部に向かって僅かに外反する。復元口径 14.85 cm。色調は淡橙色を呈する。

緑釉陶器

椀×皿 (10) 高台ケズリ出して、復元高台径 5.8 cm。焼成は須恵質で内外面に緑灰色釉を施す。

京都産。

土製品

土釜 (11) 縦 4.2 cm、径 1.5 ~ 1.65 cm で、中央に径 0.5 cm の円孔を通す。胎土は精製され色調は淡黄褐色を呈する。

178SK055 黄茶色土出土遺物 (Fig. 30)

緑釉陶器

椀 (12) 焼成は須恵質で胎土は淡灰色を呈する。高台は内側に段を有し、露胎で回転ナデが施す。

体部内外面にうっすらと淡黄灰色釉を施す。外面は釉が少々剥けている。近江産。

178SK070 茶褐色土出土遺物 (Fig. 30)

土師器

椀×丸底坏 (13) 口縁端部を僅かに外反させる。色調は茶黄色を呈する。

越州窯系青磁

坏 (14) I-3 類。全面施軸するが、口縁端部は軸を掻き取る。底部外面には目跡が残る。

178SK070 黄褐色土出土遺物 (Fig. 30)

須恵器

蓋 3 (15 ~ 18) 2点とも外面上部は回転ヘラ切り後未調整、その他内外面は回転ナデ。15は復元口径 14.2 cm、口縁部は直線的だが、内面に僅かに沈線を巡らせている。色調は淡灰黄色を呈する。16は口縁端部を僅かに曲げている。色調は暗灰色を呈する。17は外面上部が回転ヘラケズリ、その他は回転ナデで、色調は明灰色を呈する。18は15と同様に口縁内面に沈線を巡らす。

土師器

坏 a (19, 20) 19は外面底部がヘラ切りで、焼成はやや不良で、色調は淡黄白色を呈する。20は底部回転ヘラ切り後に板状圧痕を残す。色調は明褐色を呈する。

小皿 a2 (21) 外面底部は回転ヘラ切りで、その他は磨減し調整不明。口縁端部内面に磨減するが僅かに沈線が巡る。色調は淡黄白色を呈する。

椀c (22) 復元高台径 8.4 cm。体部外面は強いナデ、底部内外面はナデ調整。色調は明褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (23) 「平」のある文字瓦。残っていれば「平井瓦」となる。焼成還元やや不良で黄褐色を呈する。

178SK071 出土遺物 (Fig. 30)

金属製品

鉄鏃 (24) 両端を欠損する。現存長 5.25 cm。鏃で覆われているが、形状は三角形をなす。

鉄釘 (25) 一辺 0.4 cm 前後の角釘。

178SK085 黒茶色土出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

蓋 a3 (1) 口径 11.5 cm、器高 1.7 cm。胎土は 0.1 cm 以下の白色砂粒や黒色粒を含み、焼成良好で色調は青灰色や暗灰色を呈する。外面上半部が回転ヘラ切りの後粗いナデ調整。内面上半部はナデ、その他内外面は回転ナデ。

蓋 3 (2) 復元口径 13.2 cm、器高 1.9 cm。外面上半部は回転ヘラ切り後に粗いナデ調整。内面上半部は回転ナデの後ナデ調整。その他は回転ナデ。色調は灰色を呈する。

坏 a (3) 外面底部はヘラ切りの後粗いナデ。体部は回転ナデ、内面底部はナデ調整。色調は灰色を呈する。

坏 c (4 ~ 10) 復元口径 13.0 ~ 14.6 cm、器高 3.5 ~ 4.35 cm、復元高台径 8.6 ~ 11.3 cm。内面底部は不定方向のナデ、体部内外面は回転ナデ。色調は灰色や白灰色を呈する。4の底部外面は回転ヘラ切り後未調整。6は底部外面に板状圧痕を残す。8は高台を底部と体部の境界部分に貼付する。底部外面は回転ヘラ切り後未調整。9の底部外面は回転ヘラ切り後簡単なナデ調整。

大坏 c (11) 復元口径 20.2 cm、器高 6.9 cm、復元高台径 13.6 cm。還元不良で色調は赤茶色を呈する。内面底部は回転ナデの後不定方向のナデ。それ以外は全体的にきれいな回転ナデ調整。

壺 (12) 復元高台径 10.4 cm。胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒や黒色粒を含み、色調は青灰色や淡灰色を呈する。体部中位より下は回転ヘラケズリ、内面下半はナデ、その他は回転ナデ。

土師器

椀 a (13) 復元口径 16.2 cm、器高 4.0 cm、復元底径 13.0 cm。焼成不良で調整不明。色調は薄褐色を呈する。

皿 c × 坏 c (14) 皿もしくは坏で、方形の低い高台を貼付する。復元高台径 12.4 cm。内外面磨減し調整は不明瞭。胎土は白色粒や茶色粒を含み、色調は黄褐色や橙色を呈する。

皿 c (15) 復元高台径 14.6 cm。胎土は明黄褐色を呈する。体部下半はミガキ a、外面底部も回転ヘラケズリの後ミガキ a を施す。内面は磨減し調整不明。

甌 (16) 甌の下端部分で、胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒などを多く含み、色調は淡茶色や薄黄茶色を呈する。外面タテハケ、内面ヘラケズリ調整。

甕 (17 ~ 21) 17・18は体部外面がタテハケ、内面ヘラケズリ。胎土は 0.3 cm 以下の白色砂粒を多く含む。色調は17が薄こげ茶色や薄黄灰色で、18が白黄褐色を呈する。19は胎土が白色砂粒や金雲

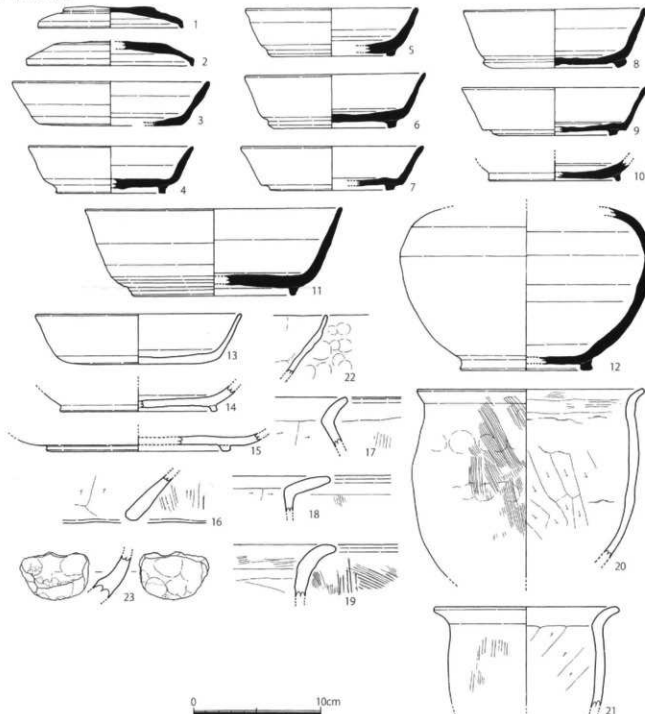


Fig. 31 178SK085 黒茶色土出土遺物実測図 (1/3)

母を多く含み、色調は橙色を呈する。外面が細かいハケと粗いハケの両方を施し、口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリか。20は復元口径17.9 cm。口縁部はヨコナデの後内面はヨコハケ。体部外面は細かいタテハケ、内面はヘラケズリ。頸部付近では粘土紐痕跡が確認できる。胎土は白色砂粒のほか角閃石も混入する。色調は淡黄褐色や暗茶灰色を呈する。21は復元口径14.6 cm。口縁部は磨減し調整不明。体部外面も磨減するがうっすらとタテハケがみえる。内面はヘラケズリ調整。色調は橙灰色を呈する。

製埴土器

焼埴壺 (22) 円錐形に復元されるもので、胎土は少量の白色砂粒や金雲母を多く含み、色調は淡黄褐色を呈する。内面ナデで、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

土製品

トリーベ (23) 内外面に指頭圧痕があり、それを覆うように付着鉱物がみられる。特に内面は赤茶色や白色や黄褐色などに変色する。また、図の下半断面部分でも変色や融解物がみられることから割れ目に侵入したものと考えられる。

178SK085 黒茶色土下層出土遺物 (Fig. 32・33, Pla. 14)

須恵器

蓋c3 (1~4) 外面上半部回転ヘラケズリ、内面回転ナデ後不定方向のナデ、その他は回転ナデ。復元口径14.9~15.6 cm。2・3の口縁端部は明瞭な断面三角形。

坏c (5~12) 復元口径12.4~16.3 cm。器高3.3~4.4 cm。復元高台径8.9~11.4 cm。底部は回転ヘラ切りで、底部内面は不定方向のナデ、その他は回転ナデ調整。色調は淡灰色等を呈する。6の底部外面は回転ヘラ切り後未調整。

大坏c (13) 復元口径18.8 cm。器高6.1 cm。復元高台径12.0 cm。内面底部は不定方向のナデ、外面下半は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ調整。胎土は白色砂粒や黒色粒を含み、色調は灰色を呈する。

皿a (14) 復元口径18.8 cm。器高3.1 cm。復元底径16.6 cm。底部内面は不定方向のナデ、底部外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。

坏a×高坏 (15) 復元口径15.0 cm。底部が欠損するため坏か高坏かは明確でない。外面底部はヘラ切り後ナデ調整。内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は淡灰色を呈する。

壺 (16) 復元高台径11.3 cm。胎土は0.2 cm以下の白色砂粒や融解した黒色粒を多く含み、灰色や黒灰色を呈する。底部はヘラケズリの後ナデ調整。外面下半は回転ヘラケズリ、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。

壺b (17) 高台径10.4 cm。外面高台付近がヘラケズリで、その他は回転ナデ。胎土は0.4 cm以下の白色砂粒をやや多く含み、色調は青灰色を呈する。

土師器

皿a (18, 19) 18は復元口径17.3 cm。器高2.6 cm。復元底径13.3 cm。焼成やや不良で全体的に磨減し調整不明瞭。胎土は白色砂粒や茶色粒を含み、色調は白黄色を呈する。19は復元口径19.3 cm。器高3.65 cm。復元底径17.3 cm。外面底部は回転ヘラケズリ、体部内外面はミガキaを施す。色調は橙色を呈する。坏×皿 (20) 内外面ミガキaを施す。色調はにぶい橙色を呈する。

坏a (21) 丸味を持った体部で、内面にはヘラ記号がある。外面には板状圧痕のようなものがある。胎土は精製され、色調は淡橙色を呈する。

大坏c (22~24) 22は復元高台径14.0 cm。磨減が目立つが内外面にミガキaを施す。色調は黄褐色を呈する。23は復元口径19.4 cm。器高4.95 cm。復元底径13.8 cm。底部は回転ヘラケズリで、体部内外面ミガキaを施す。色調は鈍い橙色を呈する。24は復元高台径12.6 cm。内外面とも磨減し調整不明。焼成やや不良で、色調は薄黄褐色を呈する。

坏c (25) 外面下半にミガキaを施す。内面は磨減するが僅かにミガキがみえる。色調は淡褐色を呈する。

高坏 (26) 復元口径24.4 cm。坏部内外面ともミガキaを施す。外面の一部に指頭圧痕が残る。胎土は0.3 cm以下の白色砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈する。

甕 (30~39) 30は口縁部が体部より肥厚する。復元口径15.4 cm。体部内面はヘラケズリ。胎土は0.3 cm以下の白色砂粒を多く含む。31は復元口径15.8 cm。頸部はやや肥厚し口縁部に向かって薄くなる。

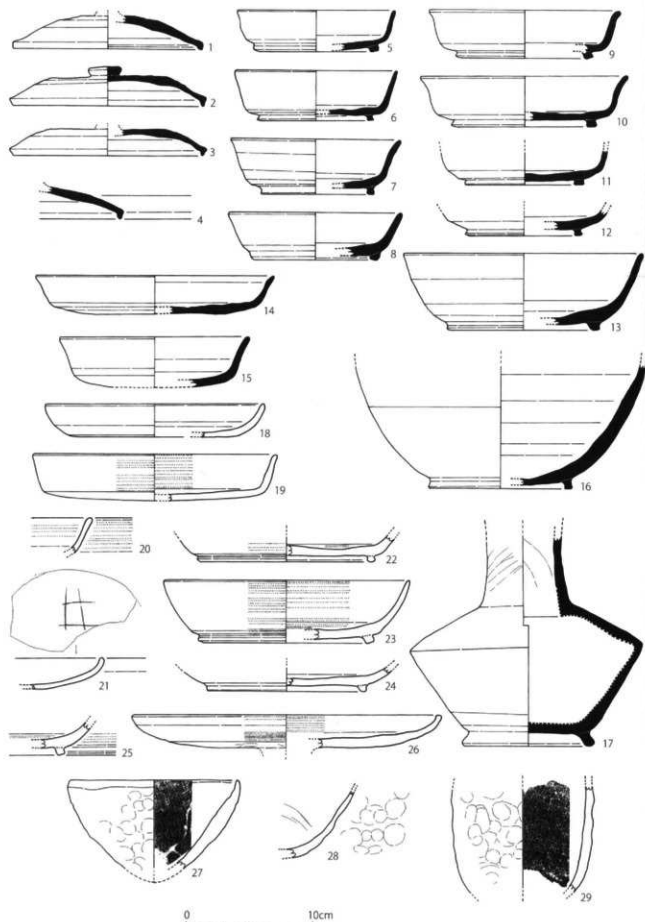


Fig. 32 178SK085 黒茶色土下層出土遺物実測図① (1/3)

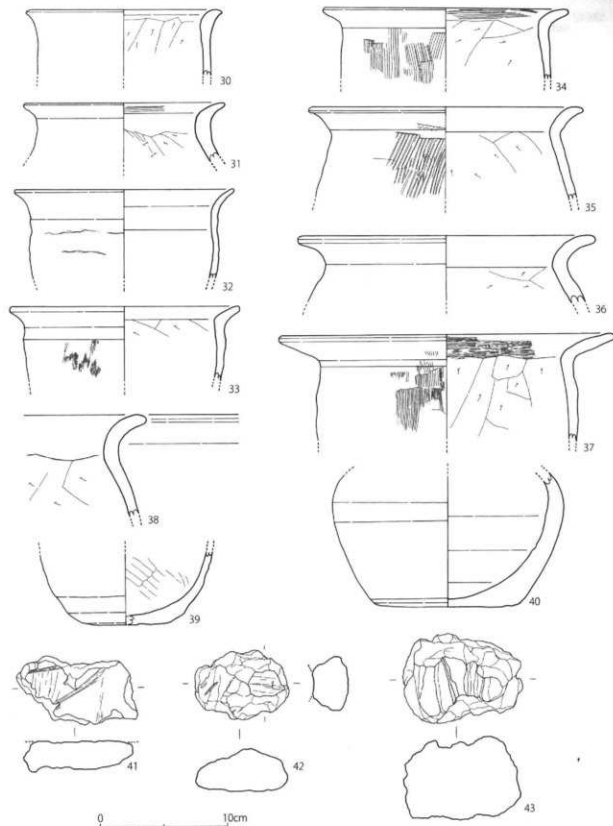


Fig. 33 178SK085 黒茶色土下層出土遺物実測図② (1/3)

口縁部内面がヨコハケ、外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリである。胎土は角閃石を少量含み、色調は鈍い黄茶色を呈する。32は復元口径17.3cm。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を含み、色調は薄橙色を呈する。内外面ヨコナデで粘土紐痕跡がみることができる。33は復元口径18.1cm。体部外面は細かいタテハケ、内面はヘラケズリ調整。色調は淡こげ茶色を呈する。34は復元口径19.3cm。胎

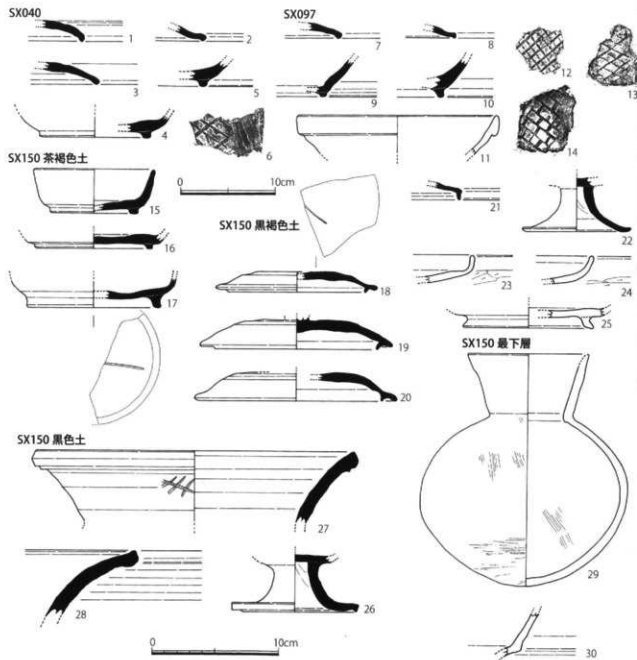


Fig. 34 178SX040・097・150 出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4)

土は0.3 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗灰茶色や白黄茶色を呈する。体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ、口縁部内面はヨコナデ、内面はヨコハケである。35は復元口径21.6 cm。胎土は0.3 cm以下の白色砂粒や雲母を多く含み、口縁部はヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面タテハケを施す。色調は薄黄茶色を呈する。36は復元口径23.4 cm。胎土は0.4 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は薄黄茶色を呈する。磨滅が目立つが体部内面はヘラケズリ。37は復元口径26.4 cm。胎土は0.4 cm以下の白色砂粒や茶色粒を多く含み、色調は淡こげ茶色や白黄茶色を呈する。口縁部内面はヨコハケ、体部外面は細かいタテハケ、内面はヘラケズリ。38の胎土は0.4 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は薄橙色を呈する。体部内面はヘラケズリ。

小甕 (39) 甕の底部付近と思われるが、甕の可能性もある。底部が明瞭ではない。胎土は0.4 cm以下の白色砂粒を多く含み粗い。内面はハケもしくは強いナデ。底部はナデで器面は粗くザラザラしている。色調は淡黄橙色を呈する。

壺 (40) 丸味のある体部で上部の形状は欠損し不明。磨滅が目立つが体部下半はヘラケズリとみられる。底部は回転ヘラ切り。胎土は0.4 cm以下の白色砂粒や茶色粒を含み、色調は薄黄橙色を呈する。

製土器

焼塩壺 (27～29) 27・28は円錐形のもの。27は内面に布目痕が明瞭に残る。28は外面指頭圧痕、内面ナデ調整で、色調は薄黄橙色を呈する。29は円筒形で、外面には明瞭に指頭圧痕が残る、内面は磨滅するが布目痕が残る。胎土は白色砂粒を多く含み、色調はこげ茶色を呈する。

土製品

土壁 (42～44) 胎土は白色砂粒や茶色粒を含み、スサが混じる。色調は薄黄橙色を呈する。部分的に面が残っているように見える。

その他の遺構

178SX040 出土遺物 (Fig. 34)

須恵器

蓋3 (1～3) 1の外面上半部は明確でないが未調整。2と3の口縁端部は僅かに擠み出す。外面上半部は回転ヘラケズリ。

坏c (4、5) 4の復元高台径は8.8 cm。色調は暗灰色を呈する。5は灰茶色を呈する。

瓦類

平瓦 (6) アミダくじ状の格子叩きで、色調は灰色を呈する。

178SX097 出土遺物 (Fig. 34)

須恵器

蓋3 (7、8) 口縁端部を僅かに断面三角形に擠み出す。色調は灰色や暗青色を呈する。

坏c (9、10) 底部端に高台を貼付し、内外面とも回転ナデ調整する。色調は灰色を呈する。

白磁

碗 (11) IV類。

瓦類

平瓦 (12～14) 格子叩き。色調は12が焼成良好で灰色を呈する。13は白灰色を呈する。14は焼成不良で淡黄茶色を呈する。

178SX150 茶褐色土出土遺物 (Fig. 34)

須恵器

坏c (15～17) 15は復元口径9.6 cm、器高3.5 cm、復元高台径7.0 cm。外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ、内面底部は回転ナデ後不定方向のナデ、その他は回転ナデ。16は復元高台径9.3 cm、外面底部は回転ヘラ切り後粗いナデ、内面底部は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。17は復元高台径10.5 cm。還元や不良で底部外面にはヘラ記号が付いている。なお、ヘラ記号は高台の下へもぐるため、高台貼付前に付けたものとわかる。

178SX150 黒褐色土出土遺物 (Fig. 34)

須恵器

蓋a1 (18) 復元口径12.8 cm、器高1.6 cm。外面頂部が回転ヘラ切りの後粗いナデ調整。ヘラ記号もある。内面上半部は回転ナデの後不定方向のナデ。その他は回転ナデ。還元不良で色調は黄白色を呈する。

蓋c1 (19) 復元口径15.2 cm。ツマミは欠損する。外面上半部は回転ヘラケズリで焼成時に荒れている。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は灰色や暗灰色を呈する。

蓋1 (20) 復元口径16.0 cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他内外面は回転ナデ調整。胎土は微細な白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。

蓋3 (21) 口縁端部を折り曲げている。胎土は0.1 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。内外面とも回転ナデ。

高坏 (22) 復元脚部径8.6 cm。内外面回転ナデ、内面には絞り痕が残る。胎土は微細な砂粒を多く含み、色調は暗灰色を呈する。

土師器

皿b (23, 24) 胎土は0.1 cm以下の白色砂粒を含む。外面底部は手持ちヘラケズリ、その他は回転ナデ。23の色調は淡褐色を呈する。24の色調は黄褐色を呈する。

椀c (25) 復元高台径10.2 cm。内外面ヨコナデ。胎土は0.3 cm以下の白色砂粒を多く含み、茶色粒を僅かに含む。色調は淡黄褐色を呈する。

178SX150 黒色土出土遺物 (Fig. 34)

須恵器

高坏 (26) 復元脚部径10.0 cm。内外面回転ナデだが、外面は器面が荒れている。色調は暗灰色を呈する。

甕 (27, 28) 27は復元口径25.0 cm。胎土は0.1 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡暗灰色を呈する。内外面ともヨコナデ調整で、頸部にヘラ記号がある。28は内外面ともヨコナデ調整。胎土は0.1 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は黒色や暗灰色を呈する。

178SX150 最下層出土遺物 (Fig. 34)

古式土師器

壺 (29) 口径25.0 cm、器高18.3 cm。胎土は白色砂粒や茶色粒を含み、色調は暗茶色や黄茶色を呈する。頸部はヨコナデだが、胴部はヨコナデの後ハケを施すが磨滅する。

二重口縁壺 (30) 屈曲する口縁部付近で、胎土は0.2 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡褐色や暗茶褐色を呈する。内外面回転ナデ。

第178次調査灰褐色土出土遺物 (Fig. 35)

須恵器

椀 (1) 丸味のある底部だが、全形は不明。外面は小刻みなヘラケズリ、内面は回転ナデ。焼成はやや不良で淡灰色を呈する。胎土は精製されている。全体的な質感から輸入品の可能性が考えられる。

土師器

ミニチュア土器 (2) 胎土は0.5 cm以下の白色粒や赤色粒を含み、内外面ナデ調整。色調は薄赤褐色を呈する。

壺 (3) 底部付近の破片とみられるが、全形は不明瞭。底部は厚い。胎土は0.1 cm以下の砂粒を多く含み、色調は薄橙茶色を呈する。

灰軸陶器

椀 (4) 復元口径13.8 cm。胎土は0.3 cm以下の黒色粒を少量含み、硬質に焼成され、色調は薄明灰色を呈する。内外面とも灰緑色釉を施す。

緑軸陶器

皿×椀 (5) 皿もしくは椀の底部で、復元高台径7.6 cm。胎土は精製され、土師質に焼成され、色調は淡黄灰色を呈する。全面に光沢のある淡黄緑色釉を薄く施すが剥落も目立つ。内面にヘラ描き文様がある。

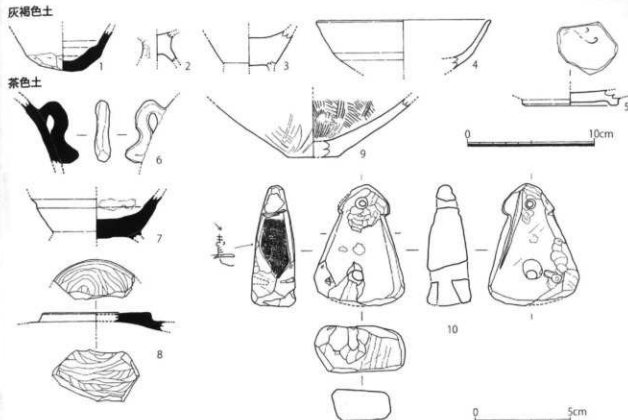


Fig. 35 第178次調査灰褐色土・茶色土出土遺物実測図 (1/3, 10は1/2)

第178次調査茶色土出土遺物 (Fig. 35, Pla. 14)

須恵器

壺 (6, 7) 6は耳の部分。胎土は白色砂粒を含み、焼成還元良好で色調は灰色を呈する。7の胎土は0.2 cm以下の砂粒を多く含み、還元不良で薄橙茶色を呈する。外面下部は回転ヘラケズリで、その他内外面は回転ナデ。内面には漆が付着する。

円面硯 (8) 内外面にミガキがみられるが、ぼんやりと見える程度で明瞭ではない。胎土は精製され、色調は暗灰色を呈する。

弥生土器

壺 (9) 底部は小さく復元底径4.0 cm。胎土は0.2 cm以下の白色砂粒を多く含み、色調は灰茶色を呈する。内面は小刻みなハケ、外面にはヘラケズリのようなナデがみられる。

石製品

椀 (10) 大きさ6.45 cm、最大幅2.4 cm、厚さ2.4 cm。側面には文字が刻まれているが、文字の内容は判読できない。上部と下部には円孔を穿つ。また、下部には径0.01 cm程の貫通していない孔が彫られている。滑石製。

(5) 小結

今回の調査でわかったことは以下のとおりである。

- ・奈良時代～平安時代中期の遺構が中心。
- ・東西道路(条路)の検出。
- ・南北道路(坊路)の検出。
- ・底部切り離しが糸切りの土師器出土(SD035)。
- ・都城系の土師器坏出土(SK010)。

○道路について

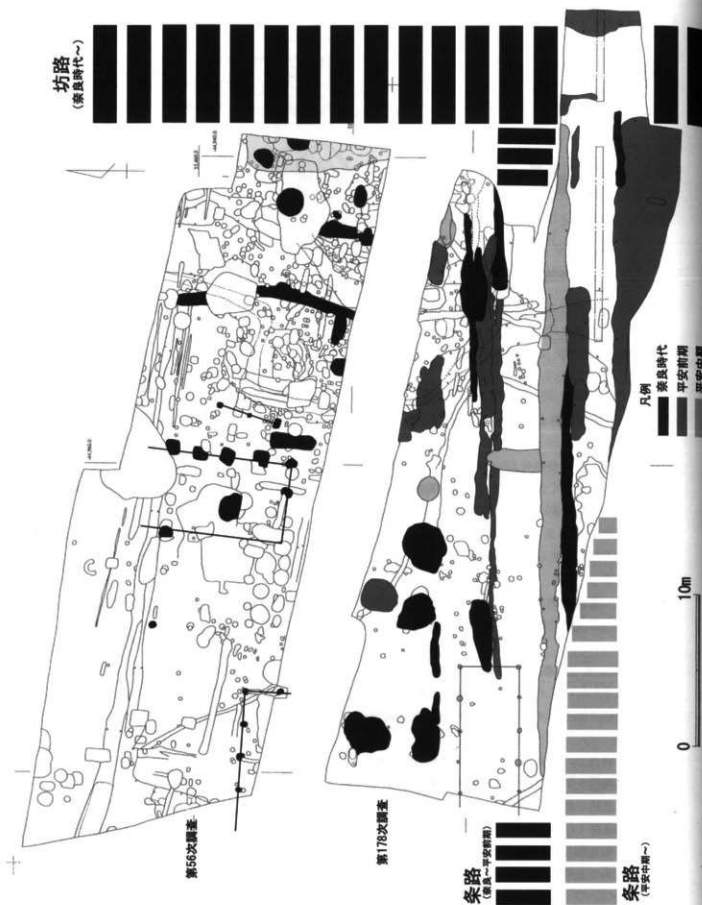


Fig. 36 第56・178次調査主要遺構図 (1/250)

今回の調査では東西方向に走る溝が多く確認され、それを側溝とする道路として178SF105(路面幅2.6~3.1m)と178SF110(路面幅3.3m)を確認した。側溝の埋没時期は8世紀後半から11世紀前半~中頃と幅広く、側溝が同時に埋没したとは限らないため、必ずしも各道路遺構で拾い上げた溝前土が同時期の側溝とは限らない。掘立柱建物(SB001)が道路上で検出されているものの、大きくみれば178SD060から178SX097にかけての約8.8mが道路など区画境の範囲にとらえてもよいかもしれない。

近年注目された推定客館跡(第236-1・257・267・277次調査)一帯では、明確な条坊痕跡が検出され、井上信正氏が提示している条坊一区画約90m四方とする条坊案を証明するものとなった。ちなみに第178次調査の道路遺構と推定客館跡で検出された東西道路(257SF375)との距離は、路面中央でそれぞれ南にSF105で約270mとSF110で約274mであり、ほぼ90mで割り切れる。つまり、257SF375からちょうど3番目の道路となる。よって、井上条坊案の18条路ということになる。

また、井上条坊案からすると、ちょうど第178次調査地が、右郭1坊の道路推定線にも位置している。このことを加味して調査所見をみると、178SD013・002が178SD099手前で途切れている上に、その東側の178SX101に挟まれた範囲で遺構が希薄であった。第56次調査でも、調査区東端で平安後期埋没の窪み(56SX045)が検出されており、道路の西側溝の区画に關係するものとも考えられる。これらのことから、178SD099と178SX101に挟まれた範囲(SF115)が南北道路(坊路)の路面と推測される。

これらのことから、今回の調査地は井上条坊案の示す通り、右郭18条と1坊の道路の交差点であることがわかった。

○条坊景観

今回の調査では西側ほど遺構は希薄になり、東西溝の178SD013も西側で消滅している。また、調査地西隣で確認調査でも遺構は削平されている状況が確認された。現在でも調査地の西方を通る県道112号線は北側の鶯田川より緩やかに上っていることから、奈良時代にはもっと土地が高かったと推測される。

そして、前述した道路に囲まれた条坊区画内で検出した井戸や土坑は政庁Ⅱ期が中心で、Ⅲ期におよぶ生活痕跡は残されていない。第56次調査では掘立柱建物が2棟確認され、東西道路の北側に井戸と廃棄土坑が道路遺構に近い位置で並んで検出された。つまり、道路に近い敷地隅に井戸や土坑を設け、さらに内側に建物が並んでいたと推測できる。

出土遺物では、178SD035から糸切り底部切り離しの土師器・輸入陶器、緑釉陶器など、若干特異な遺物がまとまって出土している。第56次調査では、特筆すべき遺物は見つかっていないが、この調査地付近の小字「立明寺」からは、大正11(1922)年に越州系青磁の三足壺が発見され、発見者の石田琳樹が住職を務めていた観世音寺に收藏され、昭和53年に重要文化財に指定されている。発見時の状況は詳細に知られていないが、発見地は小字「立明寺」の鏡山条坊案の右郭15条2坊付近で、桑畑横の道端に捨てられていたといわれている。当時、立明寺を通る道路は、現在も第178次調査地の東側を通る南北道路しかなかったと考えられ、この壺が調査地周辺で出土したことは間違いなく、政庁から約1.2kmと離れているこの付近にこのような搬入品を持ち得た人物が生活していたと推測される。

参考文献

- 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』1992
- 太宰府市教委『太宰府条坊跡 XIV』太宰府市の文化財第48集 2000
- 太宰府市教委『太宰府条坊跡 36』太宰府市の文化財第99集 2008
- 太宰府市教委『太宰府条坊跡 42』太宰府市の文化財第114集 2012
- 太宰府市教委『太宰府条坊跡 44』太宰府市の文化財第122集 2014

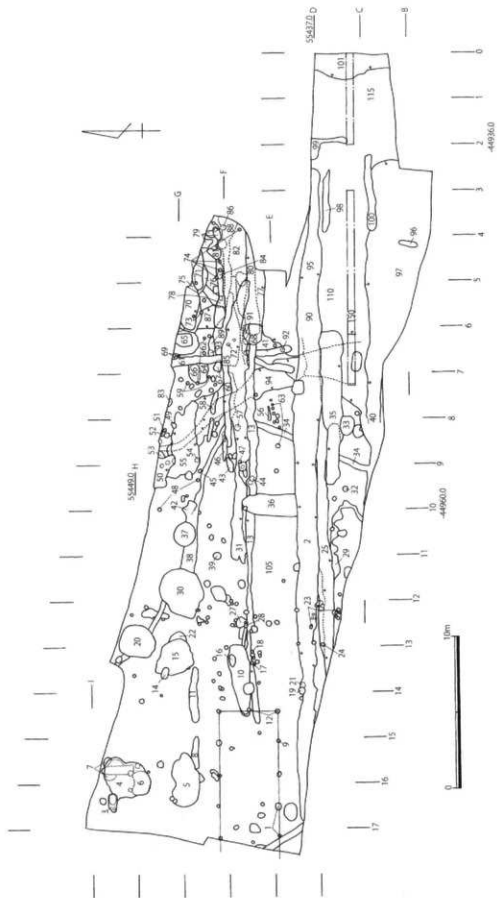


Fig. 37 第178次調査遺構略測図 (1/250)

表1 第178次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	埋没時期	地区
1	178SB01	竪立柱礎物 (2×4間の東西棟)	灰茶色土	平安時代	D16
2	178SD02	溝 (東西溝)	灰茶色土	X-11期	D7ライン
3		土坑	黒茶褐色土		H16
4	178SK04	土坑	黒茶褐色土	8世紀前半~中頃	H15
5	178SK05	土坑	黒茶褐色土	8世紀前半	G16
6		土坑	黒茶褐色土 (明黄褐色土ブロック混じり)		H16
7		土坑	黒茶褐色土 (明黄褐色土ブロック混じり)		H15
8	178SD08	土坑	黒茶褐色土	古代	F15
9	178SB01	ピット、竪立柱礎物 (S801)の一部	黒茶褐色土 (赤黄褐色土ブロック含む)	平安時代	D15
10	178SK010	土坑	茶褐色土	8世紀前半	E14
11	178SB01	溝	茶褐色土 (明黄褐色土ブロック混じり)	奈良時代	F14
12	178SB01	ピット群、竪立柱礎物 (S801)の一部	黒茶褐色土	平安時代	E14
13	178SD13	溝	茶褐色土、遺物は奈良時代が多い	Ⅷ期	D14
14		土坑 (覆土?)	茶褐色土 (明黄褐色土ブロック含む)		G13
15	178SK015	土坑	黒褐色土	7世紀末~8世紀前半	C13
16		土坑	暗茶褐色土		E13
17		ピット	明灰褐色土		E13
18		ピット	明灰褐色土		E13
19		ピット	茶褐色土		D13
20	178SE020	井戸	茶褐色土	9世紀中頃	H13
21		ピット	茶褐色土 (黄色土ブロック含む)		D13
22		土坑	茶褐色土		C12
23		ピット	黄褐色土 (黒色土混じり)		D12
24		ピット	黄褐色土と黒色土の層在		C12
25	178SD25	溝 (東西溝)	北側黄褐色土、南側暗茶色土、底が黒褐色土	8世紀後半	C7ライン
26		ピット			E12
27		土坑	場所不明		E12
28		ピット			E12
29		溝		8世紀後半~	C10地
30	178SE030	井戸		8世紀中頃~後半	G12
31	178SD01	溝	暗灰色土、奈良時代の遺物多い	9世紀中頃前後	H10
32		ピット			C9
33		凹み			C8
34	178SD04	溝	S-34-2・13・25・35	8世紀中頃以前	C8
35	178SD035	溝	黒灰土	VIII期	C8・9
36	178SK036	土坑	淡黒色土 S-13-36-2	IX期前後	F9
37	178SK037	土坑	黒色土 (黄色粘質土ブロック混じる)	10世紀代	D10
38	178SD038	溝	黒色土	平安時代	F10
39		ピット			F10
40	178SK040	落ち込み		平安前期々	C7地
41		ピット	明灰色土 S-61と同一遺構か、S-41-13	平安時代?	D6
42		土坑			F9
43		ピット		奈良時代	E9
44		ピット		平安時代	E9
45	178SD045	溝	黒色土	奈良時代?	F9
46		溝	黒茶褐色土	9世紀前半前後	E8
47		ピット			E8
48		ピット		平安時代	F9
49		ピット		平安時代	G8
50		土坑	黒褐色土	9世紀前半	G9
51		ピット		平安時代	G8
52		ピット			G8
53		凹み			F8
54		ピット			F8
55	178SK055	土坑	黒茶褐色土	平安前期	F8
56		溝			E7
57		ピット			E8
58		溝			F7
59		ピット群			F7
60	178SD060	溝	S-31-60	8世紀中頃~後半	F7ライン
61		溝	S-41と同一遺構か、S-61-85、56SD015の延長	平安時代	F6
62		ピット群			F6
63		ピット群			D6
64		ピット			F7
65		土坑	黒茶褐色土	平安時代	F7
66	178SK065	土坑	茶褐色土→黄褐色土	平安時代	F6

66	土埃		平安時代	F7	
67	土埃			F6	
68	土埃	遺物は奈良時代のみ。	平安時代	E6	
69	ビット群			G6	
70	178SK070	土埃	S-70と75の切り合いは不明瞭	9世紀~10世紀	F5
71	土埃	茶褐色土ブロック混じり	10世紀以降	F4	
72	ビット			E6	
73	ビット群			F5	
74	ビット群			F4	
75	178SE075	井戸	S-70と75の切り合いは不明瞭	IX期前後	F4
76	跡み	井戸の一部		10世紀代?	F4
77	溝	黒褐色土に若干黒色土や黄褐色土混じり。	11世紀代?	E5	
78	溝	黒褐色土	8世紀後半	F4・5	
79	跡み	茶褐色土	奈良時代	F4	
80	178SD080	溝	茶褐色土	奈良時代	F4・5
81	跡み			F4	
82	跡みもしくは溝	茶褐色土	9世紀初	F4・5	
83	ビット			G7	
84	ビット			F4	
85	178SK085	土埃	黒褐色土 S-85~31・60	8世紀前半	F6
86	ビット群			平安時代	F3
87	土埃			8世紀中頃~後半	F5
88	溝			8世紀前半頃	F4・5
89	跡み			黒褐色土	F6
90	178SD092	溝		XI期	E6
91	土埃				D6
92	ビット				D6
93	ビット				F6
94	178SD094	溝	S-94~13・2		E7
95	178SD092	溝	茶褐色土 S-2と同一遺構で反転後の遺構番号。	XI期	D7イン
96	土埃(覆土)				B4
97	178SI097	落ち込み	茶褐色土	平安前期	B7イン
98	178SD098	溝	茶褐色土	平安前期	C2・3
99	178SD099	溝	茶褐色土	平安前期	CD・2
100	178SD100	溝	茶褐色土 S-97~106	奈良時代?	B23
101	178SI101	段落ちもしくは溝	茶褐色土、遺物は殆ど奈良時代	平安後期?	B20
105	178SF105	遺跡遺構	S0013とSD025を遺跡範囲とする。	奈良~平安前期	E7イン
110	178SF110	遺跡遺構		平安時代	C7イン
115	178SF115	遺跡遺構		平安後期?	I7イン
150	178SK150	段落ち	トレンチ調査のみ	古墳前期~8世紀	C~C7

表2 第178次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
178SD002	西端中点	55437.92	-44974.2	-1272.232	-140.747	
	東端中点	55437.07	-44940.4	-1272.744	-106.940	F=1° 6' 26" -N
178SD013	西端中点	55441.14	-44973.6	-1269.006	-140.179	
	東端中点	55441.206	-44949.2	-1268.696	-115.781	F=0° 9' 18" -S
178SD008・011	SD008西端中点	55445.26	-44976.3	-1264.913	-142.920	
	SD011東端中点	55445.18	-44970.6	-1264.936	-137.219	F=0° 48' 15" -N
178SD025	西端中点	55436.52	-44969.1	-1273.581	-135.633	
	東端中点	55436.65	-44956.5	-1273.325	-123.035	F=0° 33' 28" -S
178SD031	西端中点	55442.25	-44962.15	-1267.782	-128.740	
	中間中点	55442.16	-44954.0	-1267.790	-120.590	F=0° 33' 45" -N
178SD035	西端中点	55436.12	-44968.07	-1273.870	-124.600	
	東端中点	55436.1	-44948.8	-1273.798	-115.330	F=0° 7' 25" -N
178SD080	西端中点	55441.15	-44947.85	-1268.738	-114.430	
	中間中点	55441.25	-44944.05	-1268.600	-110.631	F=1° 30' 27" -S
178SD098	西端中点	55436.28	-44941.0	-1273.540	-107.532	
	東端中点	55436.33	-44938.2	-1273.462	-104.732	F=1° 1' 23" -S
178SD099	北端東肩	55437.16	-44935.6	-1272.606	-102.141	
	南端東肩	55434.9	-44935.62	-1274.866	-102.138	N=0° 30' 25" -E
178SD100	西端中点	55433.42	-44941.4	-1276.404	-107.903	
	東端中点	55433.54	-44936.85	-1276.284	-107.904	F=1° 30' 39" -S
178SX101	北端西肩	55436.92	-44931.15	-1272.801	-97.689	
	南端西肩	55432.16	-44931.02	-1277.560	-97.511	N=1° 33' 52" -W
178SF105	SD013~025の中点西端	55439.08	-44968.6	-1271.016	-135.158	
	SD013~025の中点東端	55439.0	-44957.4	-1270.984	-123.958	F=0° 24' 33" -N
178SF110	SD002~SX097の中点西端	55435.52	-44959.60	-1274.486	-126.123	
	SD002~SX097の中点東端	55435.07	-44938.20	-1274.722	-104.720	F=1° 12' 17" -N
178SF115	SD002~SX101の中点	55437.10	-44934.35	-1272.653	-100.890	
	SX097~SX101の中点	55432.0	-44934.05	-1277.750	-100.539	N=3° 21' 59" -E

政庁中軸線方位=N-0° 34' 24" -E 政庁南門中点座標=(X=56708.680, Y=-44820.730)

5-31

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-006	Fla.20-1	179.0	3.0	14.0	3.0	○
	中	0-010	Fla.20-2	2.7	7.0	7.0	7.0	○
	底	0-012	Fla.20-3	2.4	7.0	7.0	7.0	○
	中	0-005	Fla.20-4	1.7	10.0	10.0	10.0	○
	底	0-000	Fla.20-5	2.0	10.0	10.0	10.0	○
黒色土層	表	0-011	Fla.20-4	1.6	6.0	6.0	6.0	○
	中	0-002	Fla.20-11	3.1	10.0	10.0	10.0	○
	底	0-003	Fla.20-10	3.2	9.0	9.0	9.0	○
底	0-001	Fla.20-9	1.9	9.0	9.0	9.0	○	

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
表層	表	0-002	Fla.20-14	1.7	9.0	9.0	9.0	○
	底	0-004	Fla.20-16	1.5	9.0	9.0	9.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-002	Fla.17-9	13.4	4.1	7.2	4.1	○
	中	0-016	Fla.17-10	13.3	3.4	7.8	3.4	○
	中	0-004	Fla.17-7	13.3	3.4	8.0	3.4	○
	中	0-005	Fla.17-9	13.3	3.4	8.0	3.4	○
	中	0-006	Fla.17-5	13.0	3.4	8.3	3.4	○
	中	0-007	Fla.17-10	13.0	3.4	8.0	3.4	○
	中	0-008	Fla.17-2	12.8	4.0	8.4	4.0	○
	中	0-009	Fla.17-10	12.8	3.0	8.0	3.0	○
	中	0-011	Fla.17-10	13.1	3.5	9.0	3.5	○
	中	0-012	Fla.17-10	13.0	3.5	9.0	3.5	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-016	Fla.17-11	13.0	3.2	8.0	3.2	○
	中	0-013	Fla.17-12	13.0	3.0	8.0	3.0	○
	底	0-009	Fla.17-12	13.0	3.0	8.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-019	Fla.18-1	14.5	6.0	7.5	6.0	○
	中	0-011	Fla.18-2	14.5	6.0	7.5	6.0	○
	中	0-006	Fla.18-1	13.9	7.2	7.2	7.2	○
	中	0-010	Fla.18-2	13.9	7.2	7.2	7.2	○
	中	0-017	Fla.18-1	13.5	3.0	7.8	3.0	○
	中	0-018	Fla.18-1	13.5	3.0	7.8	3.0	○
	中	0-022	Fla.18-1	13.1	4.0	9.0	4.0	○
	中	0-023	Fla.18-1	13.0	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-024	Fla.18-1	13.0	3.1	7.0	3.1	○
	中	0-025	Fla.18-1	13.0	3.2	7.4	3.2	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-027	Fla.18-1	13.1	4.2	7.4	4.2	○
	中	0-028	Fla.18-1	12.8	3.1	7.4	3.1	○
	中	0-029	Fla.18-1	12.4	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-034	Fla.18-1	12.0	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-030	Fla.18-2	12.0	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-001	Fla.18-2	12.0	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-008	Fla.18-2	12.0	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-033	Fla.18-2	12.0	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-007	Fla.18-1	11.8	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-032	Fla.18-1	11.8	3.0	7.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-031	Fla.18-1	11.8	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-009	Fla.18-1	11.8	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-018	Fla.18-2	11.8	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-011	Fla.18-1	11.7	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-013	Fla.18-1	11.7	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-014	Fla.18-1	11.7	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-009	Fla.18-1	11.7	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-015	Fla.18-1	11.7	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-012	Fla.18-1	11.7	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-016	Fla.18-1	11.7	3.0	7.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-035	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-036	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-037	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-038	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-039	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-040	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-041	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-042	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-043	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-044	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-045	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-046	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-047	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-048	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-049	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-050	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-051	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-052	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-053	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-054	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-055	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-056	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-057	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-058	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-059	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-060	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-061	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-062	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-063	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-064	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-065	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-066	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-067	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-068	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-069	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-070	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-071	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-072	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-073	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-074	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-075	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-076	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-077	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-078	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-079	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-080	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-081	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-082	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-083	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○
	中	0-084	Fla.18-2	11.5	3.0	7.0	3.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-085	Fla.20-1	1.9	9.0	9.0	9.0	○
	中	0-086	Fla.20-2	2.7	7.0	7.0	7.0	○
	底	0-087	Fla.20-3	2.4	7.0	7.0	7.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-088	Fla.20-4	1.6	6.0	6.0	6.0	○
	中	0-089	Fla.20-5	2.0	10.0	10.0	10.0	○
	中	0-090	Fla.20-4	1.6	6.0	6.0	6.0	○
	中	0-091	Fla.20-4	1.6	6.0	6.0	6.0	○
	中	0-092	Fla.20-4	1.6	6.0	6.0	6.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-093	Fla.20-11	3.1	10.0	10.0	10.0	○
	中	0-094	Fla.20-10	3.2	9.0	9.0	9.0	○
	中	0-095	Fla.20-11	3.1	10.0	10.0	10.0	○
	中	0-096	Fla.20-11	3.1	10.0	10.0	10.0	○
	中	0-097	Fla.20-11	3.1	10.0	10.0	10.0	○

5-31 多量土土

種別	層	層厚	層番号	調査号	口径	深さ	底径	A/B
土層	表	0-098	Fla.20-14	1.7	9.0	9.0	9.0	○
	中	0-099	Fla.20-16	1.5	9.0	9.0	9.0	○
	底	0-100	Fla.20-17	1.5				

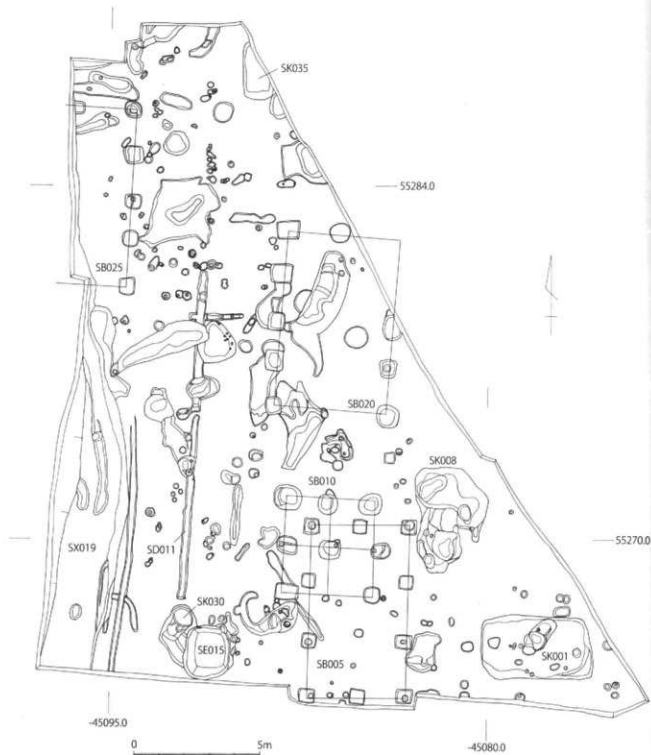


Fig. 39 第184次調査遺構全体図 (1/150)

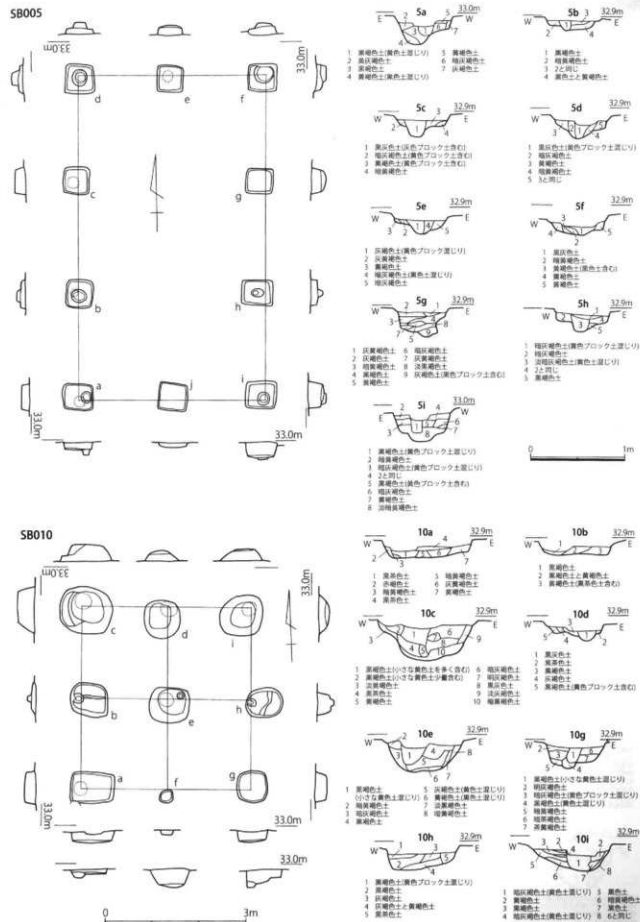
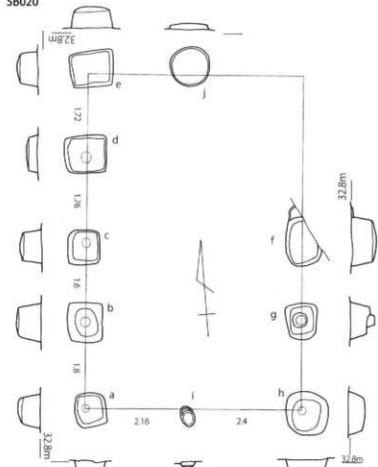


Fig. 40 184SB005・010 遺構実測図 (1/80、土層は1/40)

SB020



SB025

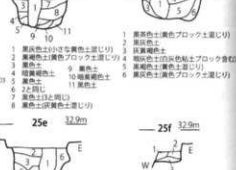
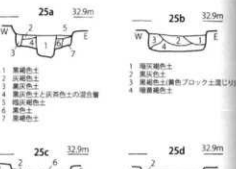
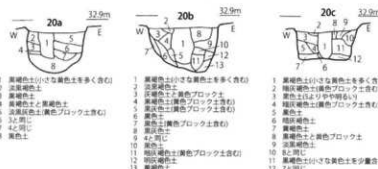
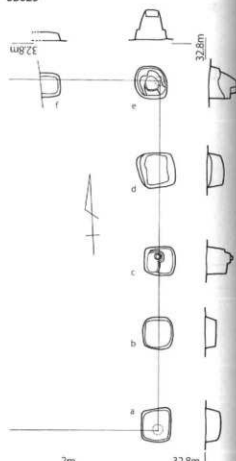


Fig. 41 184SB020・025 遺構実測図 (1/80、土層は1/40)

幅 0.35m、深さ 0.1m、長さ 13.5m の南北に続く溝で、振れは N-3° 52' 50" -E 程度である。溝の北側にはビットが列状に約 7.5m 検出された。このビット列は溝の底面部分の残欠と考えられ、これまで含めるとほぼ調査区を東西に分断ように全長約 21m 続いている。埋土は黒茶色土で、底部の凹凸付近のみ若干明黒茶色土であったが、およそ単一層の埋土である。溝両端の高差はほとんどない。この溝は、表土除去中に見られた灰色の田畑の床土を含む溝の埋土とは明らかに異なっているため、掘立柱建物 184SB020 と 184SB025 からそれぞれ約 3m の等距離の位置にあるため、掘立柱建物の区画を意味するものと推測される。

井戸

184SE015 (Fig. 42, Pla. 6)

南北 2.15m、東西 1.8m、深さ 2.2m の隅丸方形のような掘り方が確認できた。掘り方を約 0.3m 掘り下げた段階で、中央部分が黒色土で、その周囲がそれよりぼんやりと明るい部分があったが、明確に井戸枠のプランと確認するまでには到らなかった。その後掘り下げていくと深さ 0.5m 程から湧水が激しくなり、深さ 1m 程から木片が多く出土し始め、中央付近からのみ土器が出土した。そして、隅柱もしくは桟と考えられる丸木材が中央付近に倒れて検出された。黒色土の埋土を掘り抜いた底面は固い砂質土で、この層が湧水層で完掘後に放置するとすぐにきれいな水が 1m 程貯まる状態であった。

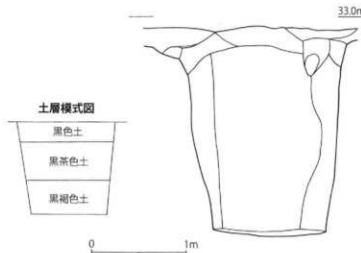


Fig. 42 184SE015 遺構実測図 (1/40)

掘り方を約 0.3m 掘り下げた段階で、中央部分が黒色土で、その周囲がそれよりぼんやりと明るい部分があったが、明確に井戸枠のプランと確認するまでには到らなかった。その後掘り下げていくと深さ 0.5m 程から湧水が激しくなり、深さ 1m 程から木片が多く出土し始め、中央付近からのみ土器が出土した。そして、隅柱もしくは桟と考えられる丸木材が中央付近に倒れて検出された。黒色土の埋土を掘り抜いた底面は固い砂質土で、この層が湧水層で完掘後に放置するとすぐにきれいな水が 1m 程貯まる状態であった。

土坑

184SK001 (Fig. 43, Pla. 6)

南北 2.5m、東西 4.5m、深さ 0.25m の東西に長い隅丸長方形の土坑である。埋土はきれいな黒褐色土で、底面からは埋土の異なる小土坑と幅 5cm 未満の小さなビット状の凹凸が全体的に確認できた。遺物の量が少ないため廃棄土坑とは考えられず、作業小屋や貯蔵小屋的なものの可能性も考えられる。

184SK008

東西 2.96m、南北 4.2m、深さは深い所で 0.66m を測る不定形な土坑である。底面は安定しておらず凹凸している。土坑中心付近の埋土中の一部からは焼土が検出された。

184SK030 (Fig. 43)

表土除去直後は 184SE015 によって切られた土坑と考えられたが、ひと下げた段階で円形プランを確認した。円形のプランを確認したレベルで短径 0.7m、長径 0.9m、深さ約 1m の楕円形である。人がやっ

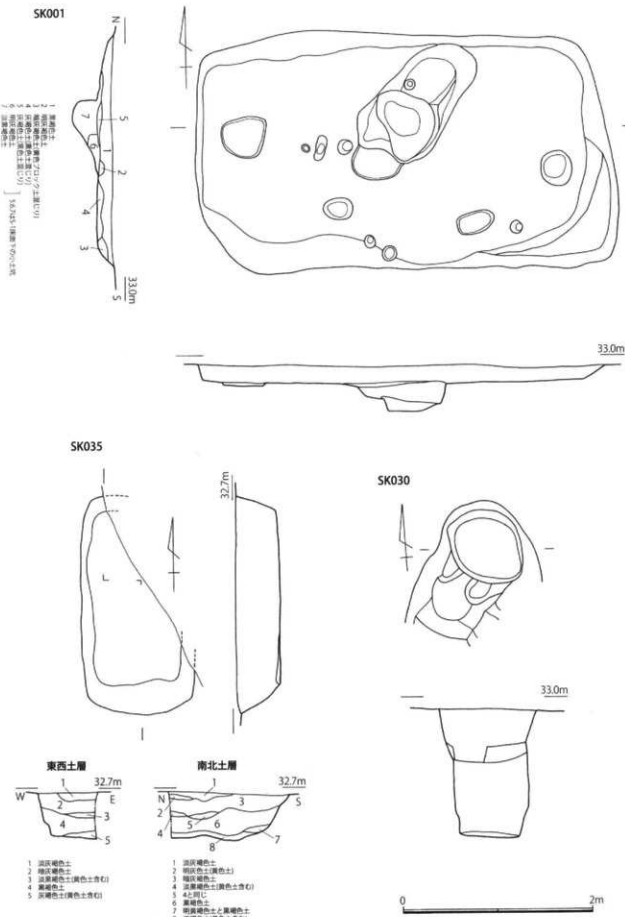


Fig. 43 184SK001・030・035 遺構実測図 (1/40)

と入れる程の狭い穴であったが、遺物は多く出土し、底面近くでは坏aが置かれていたような状態で検出された。底面からは僅かながら湧水がみられる程度ではあるが、井戸もしくは井戸に伴う施設の可能性も考えられる。

184SK035 (Fig. 43)

調査区際りに位置するため全容は把握できないが、南北約2.3m、東西約1.3m、深さ0.5m前後の南北に長い土坑と考えられ、一見土塚墓ではないかと思わせる形状を示している。埋土はちょうど半分程で大きく2層に分かれ、上層が暗灰褐色土、下層が黒褐色土で、その境にその2層より明るい埋土を挟んでいる。上層は多量の遺物を包含するが、下層からは遺物が殆ど出土しない。これらの状況から埋没途中の土坑を廃棄土坑として利用したものと推測される。

その他の遺構

184SX007

184SK015の西側に見られる黒色土の不定形のピット群である。その形状から足跡ではないかみられた。寸法は長さ9cm、12cm、15cm、19cm、24cmを前後する5種類の大きさで、足跡にしてはやや小さい感じを受けるが、この中に牛などの動物の足跡も含んでいるものと考えられる。このような遺構は今回の調査でこの付近のみに確認できることから、井戸際が柔らかな地盤であったため残ったのだろうか。しかし、掘立柱建物の掘り方の残存状況から、かなり削平を受けており、当時の生活面は遺構面よりかなり高い位置だったと推測されるため、足跡と認定するには検討を要する。

184SX019

調査区西側にみられる落ち込みで、東端は確認できるが西側はさらに調査区外に続いている。埋土は灰褐色砂質土で深さは0.3mを測る。さらに西側の調査区際では黒色土に黄褐色土を含む埋土が確認され、一段深くなっているようだが、調査区際のため底面まで確認していない。埋土の状況から上部については現在隣接する水路の前進的なものと考えられ、比較的新しいものと考えられるが、下部の段落ちに関しては、掘立柱建物の掘り方の埋土に似ているため、奈良時代から存在した可能性が考えられる。

(4) 出土遺物

掘立柱建物

184SB005

184SB005b 出土遺物 (Fig. 44)

須恵器

坏(1) 復元口径12.2cm。内外面とも回転ナデで、内面下部はナデが強く段が付いている。胎土は精製され、焼成良好で色調は灰色を呈する。

184SB005i 出土遺物 (Fig. 44)

須恵器

坏c(2) 復元高台径9.6cm。焼成還元はやや不良で、色調は灰黄色を呈する。全体的に磨減し高台はやや丸くなっている。

184SB010

184SB010c 出土遺物 (Fig. 44)

須恵器

皿a(3) 皿の体部で、焼成還元とも良好で、色調は暗灰色を呈する。内外面とも回転ナデ。

184SB010i 出土遺物 (Fig. 44)

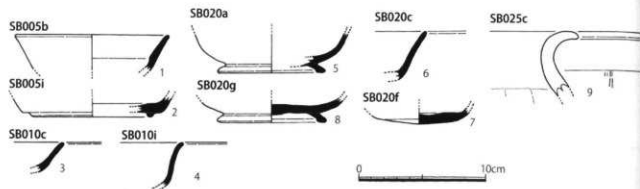


Fig. 44 184SB005・010・020・025 出土遺物実測図 (1/3)

須恵器

坏 (4) やや外反する体部で、焼成還元とも良好で暗灰色を呈する。内外面とも回転ナデ。

184SB020

184SB020a 出土遺物 (Fig. 44)

須恵器

坏 c (5) 高台は八字形に開き、しっかりと踏ん張っている。復元高台径 8.6cm。内外面とも回転ナデ調整。色調は暗灰色を呈する。SB020g の坏 c と同一個体の可能性がある。

184SB020c 出土遺物 (Fig. 44)

須恵器

坏 (6) 内外面とも回転ナデ。色調は灰色を呈する。

184SB020f 出土遺物 (Fig. 44)

須恵器

坏 a (7) 坏の底部とみられる。底径 6.4cm。外面は回転ヘラ切り後ナデ調整。内面底部は僅かにナデ、その他は回転ナデ。焼成還元は良好で、色調は暗灰色を呈する。

184SB020g 出土遺物 (Fig. 44)

須恵器

坏 c (8) 高台は八字形に開き、しっかりと踏ん張っている。復元高台径 8.6cm。底部外面はヘラ切り後未調整か。内外面とも回転ナデで、内面はやや平滑である。色調は暗灰色を呈する。SB020a の坏 c と同一個体の可能性がある。

184SB025

184SB025c 出土遺物 (Fig. 44)

土師器

甕 (9) 口縁部を丸く外反させる。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。体部外面は僅かにタデハケが残る。体部内面はケズリの後ヨコナデ。口縁部はヨコナデ。

井戸

184SE015 黒色土出土遺物 (Fig. 45)

須恵器

蓋 3 (1) 小さめの口縁部を作り、外面上半部は回転ヘラケズリで、内面上半部はナデ、その他は回転ナデである。外面端部には重ね焼き痕が残る。色調は青灰色を呈する。

坏 c (2) 低い高台を貼付し、復元高台径 10.0cm。色調は暗灰色を呈する。

土師器

坏 a (3) 復元口径 14.0cm、器高 3.75cm、復元底径 8.2cm。内外面はミガキ a で、底部外面は回転

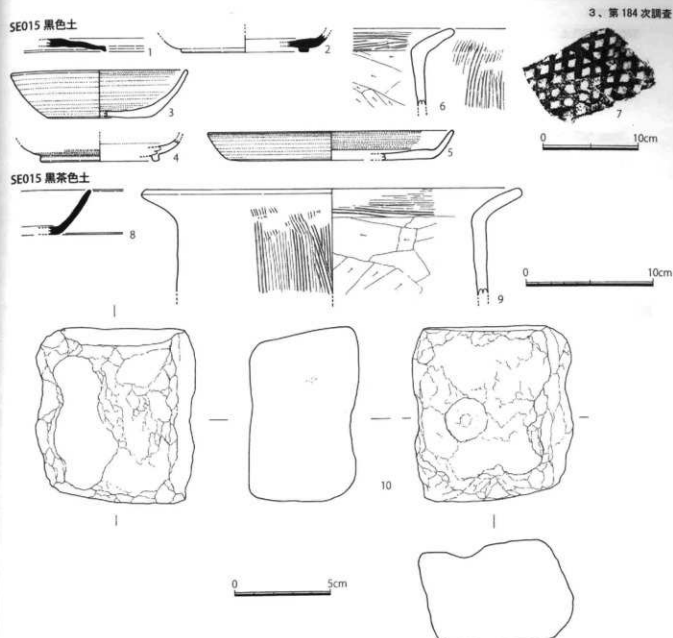


Fig. 45 184SE015 出土遺物実測図① (1/3, 7は1/4, 10は1/2)

ヘラケズリである。焼成良好で色調は淡褐色を呈する。

坏 c (4) 復元高台径 9.4cm。内外面はミガキ a で、焼成良好で色調は褐色を呈する。

大皿 a (5) 復元口径 19.4cm、器高 2.3cm、復元底径 16.0cm。内外面はミガキ a で、底部外面は回転ヘラケズリである。胎土は微細な金雲母を含み、焼成良好で色調は淡褐色を呈する。

甕 (6) 体部内面はヘラケズリ、外面はタデハケ、口縁部内面はヨコハケ、胎土には白色砂粒や雲母を含み、色調は黄褐色を呈する。

瓦類

平瓦 (7) やや太い格子叩きが施されている。厚さ 2.1cm で、焼成はやや不良で色調は茶黄色を呈する。

184SE015 黒茶色土出土遺物 (Fig. 45)

須恵器

坏 a (8) 外面底部はヘラ切り後未調整。体部内外面は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。

土師器

SE015 黒褐色土

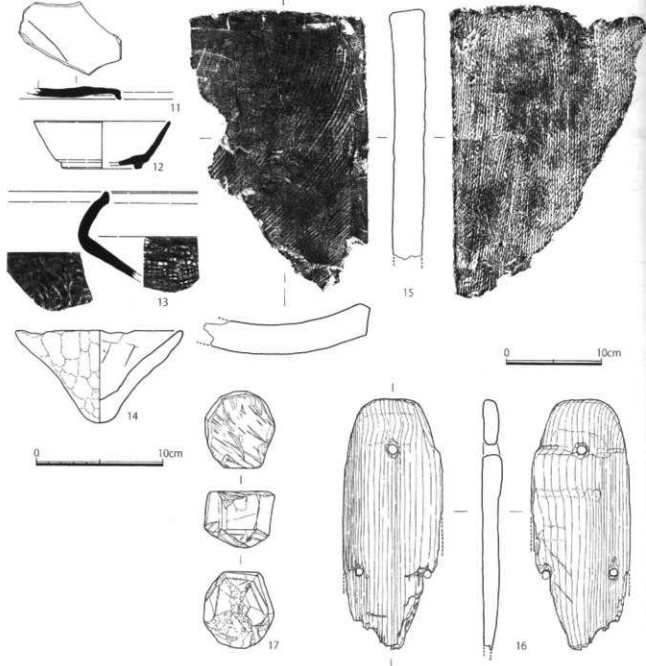


Fig. 46 184SE015 出土遺物実測図② (1/3, 15は1/4)

甕 (9) 復元口径30.0cm。体部内面はヘラケズリ、外面はタテハク、口縁部内面はヨコハク、胎土は白色砂粒を多く含み、色調は暗黄色や黄灰色を呈する。

石製品

砥石 (10) 大きさは9.2cm×8.2cm、厚さ5.7cm、主な研磨面は3面で、僅かな使用面が2面ある。また、研磨面の一面に径約2.2cm、深さ0.4cmの円形の窪みが施されている。

184SE015 黒褐色土出土遺物 (Fig. 46, Pla. 14)

須恵器

蓋c3 (11) 外面上半部は回転ヘラケズリで、内面上半部はナデ、その他は回転ナデである。外面にはヘラ記号が施されている。焼成良好で色調は灰色を呈する。

小坏c (12) 復元口径10.8cm、器高3.8cm、復元高台径6.3cm。底部内面はナデ、その他は回転ナデ調整。

焼成還元とも良好で、色調は暗灰色を呈する。

甕 (13) 口縁端部は僅かに肥厚させ丸く仕上げ。体部外面は叩き、その内面に当て具痕が残る。口縁部は回転ナデ。焼成良好だが還元不良で、色調は灰色や淡赤紫色を呈する。

製塩土器

焼塩壺 (14) 口径13.2cm、器高7.3cmでほぼ完形である。内面はヘラケズリ、外面は指頭圧痕が残る。焼成良好で色調は黄橙色を呈する。

瓦類

平瓦 (15) 内面は弓切りに布目痕が残る、外面は縄目である。側面はヘラ切りで面取りされている。焼成は良好で、色調は暗灰色や暗黄灰色を呈する。厚さは最大3.7cm。

木製品

下駄 (16) 下端が欠損しており、現存長26.4cm、幅10.4cm、径0.8~1.0cmの円孔が3ヶ所あけられ、鼻緒を通していたものと考えられる。指があたっていた部分はすり減り若干へこんでいる。下駄の歯は幅4cm程だがほとんど削れており、僅かに段が残る程度である。また、先端部も使用により全体的に丸味を帯びている。

鐘状木製品 (17) 大きさは8.1×7.4cm、厚さ5.9cmで、丸木を切斷し、側面も全て面取りしている。断面部は、片方はやや尖り丸味に削っているが、もう片方は丸木を切斷した時の状況に近い痕跡がみられる。これは一見鐘の子のようなものであるが、断面部は両方とも削られており、欠損した状況は見られないため、どのような目的で加工したのか不明である。

土坑

184SK001 出土遺物 (Fig. 47)

須恵器

蓋1 (1) 復元口径12.0cm。外面上半部が回転ヘラケズリで、その他は回転ナデ。焼成は良好で、還元はやや不良で、色調は淡赤紫色や淡灰色を呈する。

184SK030 最下層出土遺物 (Fig. 47)

須恵器

蓋c3 (2) 復元口径15.2cm、器高2.2cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。焼成良好で色調は灰色を呈する。

蓋3 (3) 外面上半部はヘラケズリとみられ、その他は回転ナデ。焼成還元ともやや不良で白黄色を呈するが、口縁端部外面は黒灰色を呈する。

坏c (5, 6) 5は復元口径14.8cm、器高3.9cm、復元高台径10.4cm。底部外面は回転ヘラ切り後未調整で、ヘラ記号が施されている。底部内面はナデ、その他は回転ナデ。色調は灰色を呈する。6は口径14.7cm、器高3.9cm、高台径10.4cm、外面底部は回転ヘラ切り後未調整。その他は回転ナデ。焼成還元はやや不良で、色調は淡茶褐色を呈する。

高坏 (4) 高坏の坏部の一部で、内外面とも回転ナデ。色調は暗青灰色を呈する。

土師器

甕 (7) 口縁部をやや肥厚させる。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は淡赤紫色を呈する。外面はタテハクで煤が付着する。口縁部内面はヨコハクの後ナデ調整か、体部内面はヘラケズリ。

184SK035 灰褐色土出土遺物 (Fig. 47, Pla. 14)

須恵器

蓋a1 (8) 復元口径13.6cm、器高1.9cm。外面頂部はヘラ切り後粗いナデ調整で、ヘラ記号を施す。

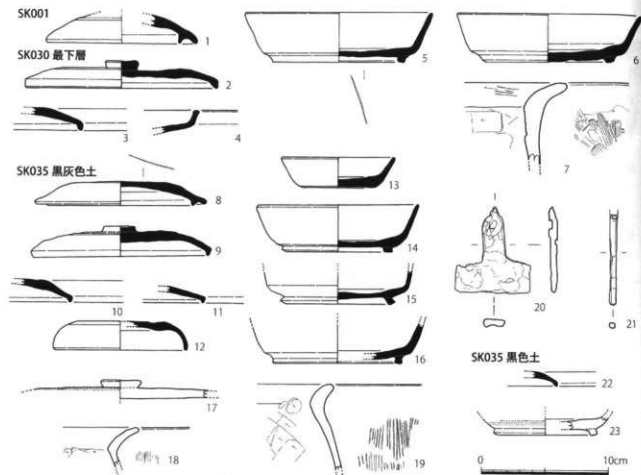


Fig. 47 184SK001・030・035 出土遺物実測図 (1/3)

色調は暗灰色を呈する。

蓋 c3 (9) 口径14.2cm、器高2.45cm。外面上半部は回転ヘラケズリ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。内面は若干黒く磨くとみられる。色調は灰色や暗灰色を呈する。

蓋3 (10、11) 10の外面上半部はヘラ切り後未調整。その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。11は口縁端部を小さな断面三角形にする。内外面とも回転ナデで色調は灰色を呈する。

壺蓋 (12) 復元口径10.6cm。外面頂部は回転ヘラ切り後未調整で、その他内外面は回転ナデ。色調は青灰色を呈する。

小坏 a (13) 復元口径9.0cm、器高2.4cm、底径6.0cm。底部外面は回転ヘラ切り、内面ナデ、その他内外面は回転ナデ調整。胎土は白色砂粒を多く含む、色調は明灰色を呈する。

坏 c (14～16) 14は口径12.8cm、器高3.75cm、高台径8.7cm。底部外面は回転ヘラ切り、底部内面は一方方向のナデ調整。体部は内外面とも回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。15は外側に踏ん張る高台を貼付する。復元高台径9.0cm。底部内面は不定方向のナデで、底部外面は焼成時に荒れている。色調は暗灰色を呈する。16は復元高台径10.2cm。焼成はやや不良で色調は灰色を呈する。

土師器

大蓋 c (17) 内外面ともミガキで、ツマミの下部にあたる内面は回転ナデ。胎土は精製され、微細な金雲母を多く含む。焼成は良好で、色調は茶黄色や褐色を呈する。

甕 (18、19) 18は体部外面がタテハケ、内面はヘラケズリで、色調は淡橙黄色を呈する。19は若干口縁部を肥厚させ、口縁部はヨコナデ、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。色調は淡橙黄色を呈する。

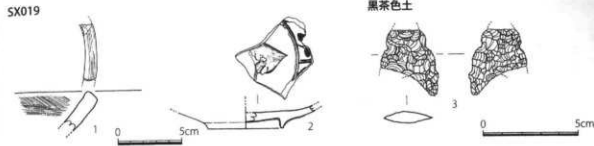


Fig. 48 第184次調査その他の遺構出土遺物実測図 (1/3, 3は1/2)

金風製品

用途不明鉄製品 (20) 厚さは0.4～0.6cmで、T字形で両端は欠損しているとみられる。

鉄棒 (21) 欠損しているが、現存長7.1cm、厚さ0.4～0.5cm。図の上部から0.5cmほど孔が開けられている。

184SK035 黒色土出土遺物 (Fig. 47)

須恵器

小蓋3 (22) 口縁端部を僅かにつまんでいる。外面上半部は回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ。内面には自然釉がみられる。

土師器

碗 c (23) 復元高台径8.2cm。内外面ともミガキを施す。色調は橙褐色を呈する。

その他の遺構

184SX019 出土遺物 (Fig. 48)

瓦質土器

鉢 (1) 内面と口縁端部は細かいハケが施されている。外面は磨減し調整不明。焼成はやや不良で、色調は白灰色を呈する。

染付

皿 (2) 復元高台径6.0cm。全面に内面に青白磁のような淡く青味がかった釉を施し、内面に濃青色で文様を施す。釉は光沢があり、細かく貫入が入る。また、内面に目跡を残す。

第184次調査 黒茶色土出土遺物 (Fig. 48)

石製品

石鏃 (3) 先端部と基部の片方を欠損する。現存長3.5cm、厚さ0.6cm。黒曜石製。

(5) 小結

第184次調査で特筆すべきことは、計4棟の掘立柱建物で確認されたことと出土遺物のほとんどが7世紀末～8世紀後半のものということである。

掘立柱建物については、柱次の埋土が包含する遺物には時期差が見られ、SB020のように7世紀末の遺物を包含しているものもある。しかし、出土遺物が極めて少なく、遺物だけで時期を特定するには厳しい状況であるが、7世紀の可能性を残しつつも、全体として奈良時代の遺構と判断すべきと考ええる。SB005とSB010は新旧こそ不明だが重複しており、建物としては最低2時期あつたがわかる。出土遺物や建物の柱筋などから遺構の時期を大きく分けて以下のように推測される。

【奈良時代前半】・・・SB010・020・025、SK001・030、SD011

【奈良時代後半】・・・SB005、SE015、SK035

奈坊の南辺部に位置するこの付近は、近年調査例が増えてきている。詳細については今後整理し明らかになると思われるが、奈良時代の遺構を中心に僅かに平安時代の遺構や遺物が見つかっている。そのような状況でこの調査地付近だけ平安時代の遺物がほとんど出土しておらず、建物を伴う土地利用は、奈良時代のみという限定的なものであったことが窺える。しかし、その明確な理由は見出せない。

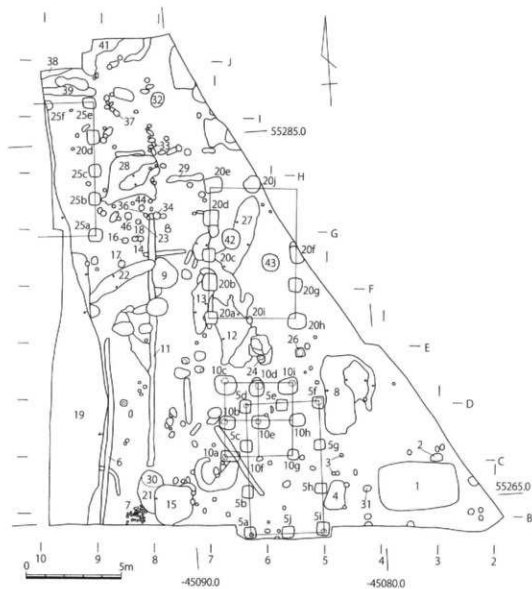


Fig. 49 第184次調査遺構略測図 (1/200)

表5 第184次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	埋没時期	地区
1	184SK001	土坑	黒色土	7世紀末頃? (奈良?)	B3
2		土坑	黒色土		C3
3		ピット群	黒色土		B4
4		土坑	黒色土		B4
5	184SB005	竪立柱建物	黒色土 (黄色ブロック混じり)	奈良時代	A~D、5・6
6		溝	灰褐色土	現代?	9ライン
7	184SD007	足跡?	長さ9cm, 12cm, 15cm, 19cm, 24cmを前後する5種類		A8
8	184SK008	土坑	黒色土	埋土中央付近に焼土あり	D4
9		土坑 (窪み)	黒色土		F7
10	184SB010	竪立柱建物	黒色土 (黄色ブロック混じり)	奈良時代	CD、5・6
11	184SD011	溝	黒茶色土	奈良時代?	8ライン
12		土坑 (窪み)	黒色土		E6
13		土坑	黒色土		E7
14		ピット	黒茶色土		F8
15	184SE015	井戸	黒色土	8世紀中頃~後半	B7
16		ピット	黒茶色土		F8
17		ピット	黒茶色土		F8
18		ピット	黒茶色土		F8
19	184SX019	段落ち	灰褐色砂	S-25→S-19	9ライン
20	184SB020	竪立柱建物	黒茶色土	7世紀末頃? (奈良?)	E~G、5~7
21		土坑	黒茶色土		B8
22		土坑 (窪み)	黒色土		F8
23		ピット	遺物なし		G8
24		ピット	遺物なし		D6
25	184SB025	竪立柱建物	黒茶色土	8世紀前半~中頃?	9ライン
26		ピット	黒色土		D6
27		窪み	黒色土		F8
28		窪み	黒色土		B8
29		溝			G7
30	184SK030	土坑 (井戸?)	黒色土	8世紀前半~中頃	B8
31		ピット	遺物なし		B4
32		土坑			18
33		ピット			B8
34		ピット			G8
35	184SK035	土坑	黒色土	8世紀後半	I7
36		ピット群			G8
37		ピット			18
38		土坑?			19
39		溝	黒色土		I9
41		土坑	黒色土 (黄色ブロック混じり)		F6
42		土坑?	黒色土 (黄色ブロック混じり)		F6
43		土坑?	黒色土 (黄色ブロック混じり)		F6
44		ピット			G8
46		ピット			G8

表6 第184次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
184SB005	柱穴a	55263.9	-45087.142	-1447.373	-251.942	
	柱穴d	55270.62	-45087.01	-1440.652	-251.877	N-1° 12' 35" E
184SB010	柱穴a	55267.949	-45088.205	-1443.335	-253.045	
	柱穴c	55271.754	-45088.001	-1439.528	-252.879	N-3° 4' 8" E
184SB020	柱穴a	55275.348	-45088.625	-1435.941	-253.539	
	柱穴d	55280.478	-45088.156	-1430.806	-253.121	N-5° 13' 25" E
184SB025	柱穴a	55279.936	-45094.291	-1431.411	-259.251	
	柱穴e	55287.108	-45093.925	-1424.234	-258.957	N-2° 56' 17" E
184SD011	北端中点	55280.602	-45091.285	-1430.714	-256.252	
	南端中点	55267.732	-45092.158	-1443.591	-256.996	N-3° 52' 50" E

政庁中軸線方位=N-0° 34' 24" E 政庁南門中点座標値=(X=56708.680, Y=-44820.730)

4. 第228次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市都府楼南2丁目620-2、621-1、621-6で、周辺一帯はかつて田畑が広がっていたものの、昭和40年代後半に宅地造成され、住宅街となっている。

1998(平成10)年7月24日にエース建設(株)から共同住宅建設に先立ち、青柳泰祐氏所有の土地について埋蔵文化財の問い合わせがあり、2000(平成12)年12月19日に確認調査を行い、遺構が確認された。その後協議を重ね、2003(平成15)年2月10日に正式な建築計画が上がり、建物建築によって破壊が予想される部分と条坊痕跡の確認のため開発地の西端を調査することとなった。確認調査を行った西端部分および建物建設地以外の駐車場等の残地には、遺構は保存されている。発掘調査は2003(平成15)年4月3日から6月9日にかけて実施した。調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は1415㎡、調査面積は684㎡である。

(2) 基本層位 (Fig.50)

調査前は畑地で、西側の道路より約0.85m下がっていて、四方より低い土地だが、この土地が低いというより周囲が盛土されている。表土は耕作土が厚さ約0.2mあり、さらに厚さ0.15mほど床土と思われる黄灰色土が広がり、それを除去すると明灰色土や淡灰色土の地盤に遺構が確認できる状況である。遺構が確認されたレベルはおおよそ標高30mである。

(3) 検出遺構

竪穴住居

228S1080 (Fig.52, Pla.9)

隅丸方形の土坑で、東西2.8m、南北3.2m、深さ0.08～0.3mを測る。東側に炭や焼土が堆積し、焼土には土器も混じっている。この焼土の堆積箇所から東側に土坑から突出した掘り込みが見られる。また、焼土の両側にはビットが1個ずつ検出された。土坑の底面は、やや西側が低いのが全体的に平坦である。土坑の規模は住居としては大きくないが、焼土がみられること、煙道のような痕跡が見られることから、底面の2つのビットを柱穴と考えられる。なお、北側第222次調査でもカマドを伴う7世紀後半埋没の竪穴住居(4.53×3.58m)が1棟検出されている。

掘立柱建物

228SB045 (Fig.53・54, Pla.8)

振れはE-2°49'50"-Nの東西棟で、桁行6間(12.3m)、梁間2間(3.65m)で、東西それぞれに1間とり付く。北側の2列に並ぶビットは、やや小さい掘り方で底と窺えられる。ビットは北西隅で切り合っており、建て替えがあったことがわかり、北側の列が新しいことが確認された。当初の建物の大きさは底を含めると16.3m×4.53mである。南側に庇が廻る可能性も考え、一部調査区を拡張したが、2mの範囲では、未確認であったため、調査区内で確認した範囲が建物の範囲と考えられる。主屋は径0.35m前後の円形掘り方で、柱径は0.13m前後で、柱間は南北が1.65～2.0m、東西は1.98～2.14m、建物中央には床柱がある。北側庇の柱間は1.9～2.12mで、掘り方は主屋よりやや小さく径0.25m前後で、柱径は約0.1mである。掘り方は11世紀後半から12世紀初めに埋没した遺構に切り込んで建てられている。

228SB055 (Fig.55)

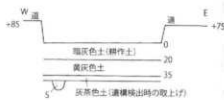


Fig.50 第228次調査土層模式図
(単位: cm)

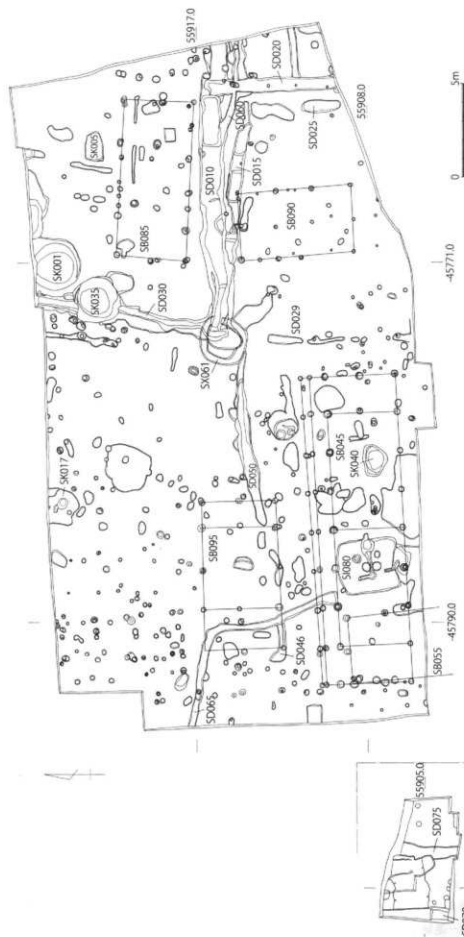


Fig.51 第228次調査遺構全体図 (1/200)

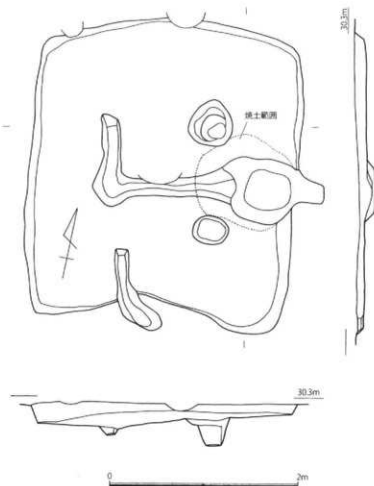


Fig. 52 228S1080 遺構実測図 (1/40)

振れは $E-11^{\circ}39'24''-N$ の南北棟で、東西2間、南北2間以上。掘り方は0.4m前後の円形で、柱径は0.15m程である。柱間は東西1.74mと1.78m、南北は2.02mと2.14mを測る。建物はSB045と重複しているが、遺構の切り合いがなく、新旧は不明である。

228SB085 (Fig. 55, Pla. 8)

振れは $W-2^{\circ}54'14''-N$ の東西棟で、桁行3間、梁間2間。掘り方は0.3m前後の円形で、柱間は2.6～3.04mを測る。しかし、ピットは並んでいて、柱痕が不明瞭で、柱間も広くバラツキがあり、3間×2間の建物として成立するかは疑問も残る。

228SB090 (Fig. 55)

振れは $N-2^{\circ}41'23''-W$ の南北棟で、梁間2間、桁行3間だが、西側の1ヶ所の柱穴が未確認で、柱穴の深さもバラバラである。掘り方は0.25m前後の円形で、柱間は東西約1.8m、南北約2.0mを測る。

228SB095 (Fig. 56)

振れは $E-2^{\circ}52'24''-N$ の東西棟で、東西2間、南北2間で、東西両側に1間の庇を付ける。庇の柱間が東西と異なるため、建物として成立するかは疑問も残る。掘り方は0.25～0.4mほどの円形で、柱間は東西約2.2m、南北1.85～2.2mを測る。

溝

228SD010・030 (Fig. 57)

東西から南北に 90° 曲がっている。調査進行上、屈曲部分から東西溝をSD010、南北溝をSD030に分けたが、同一遺構と考えられる。SD010の振れは $E-0^{\circ}36'58''-N$ で、検出した長さは16.3m、幅0.85

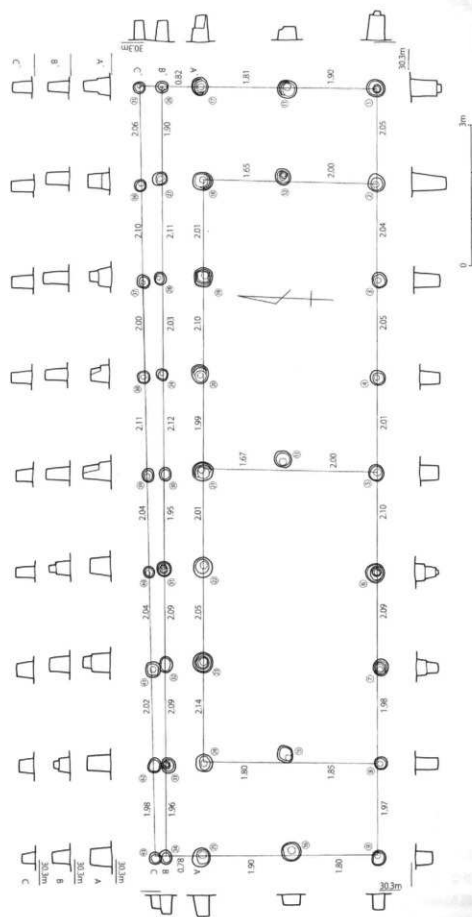


Fig. 53 228SB045 遺構実測図① (1/80)

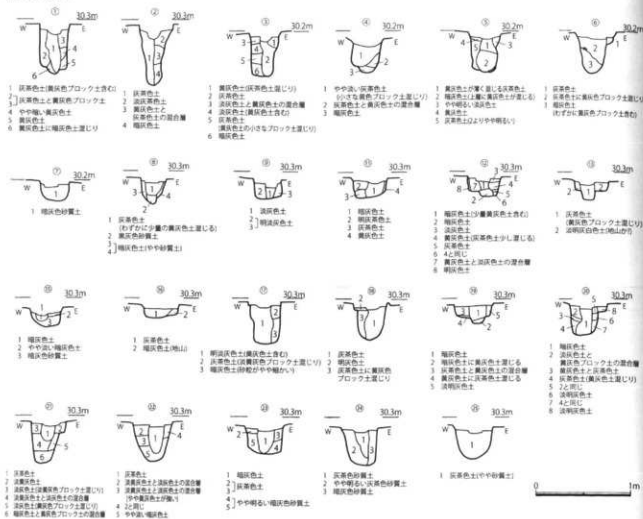


Fig. 54 228SB045 遺構実測図② (1/40)

～1.4m、深さ0.03～0.28mを測る。SD030の振れはN-10°16'24"Eで、検出した長さは9m、幅0.56～1.18m、深さ0.13～0.3mを測る。それぞれ北側と東側は調査区外へ続いている。溝の断面形状は、SD010がU字形であるのに対し、SD030は2段掘りの形状を示している。このことは時期差があった可能性も考えられるが、調査段階では押さえ切れていない。

SD010とSD020は切り合っているが、非常に不明瞭である。どちらかと言えばSD010が新しいようにみえた。また、SD010はちょうどSD020と切り合っている箇所から、西側にやや深くなっており、SD010の底面に残るSD020の痕跡の可能性も考えられる。また、SD010の北側に僅かに張り出した、やや埋土の異なる部分が見られたが、これはSD020が西側に屈曲した名残りの可能性が考えられる。それから、SD010はSD060とも切り合っていて、その新旧も難しいが、埋土から最終埋設はSD010が新しいものと判断される。これらのことからSD020→SD060→SD010の順で重複しているものと推測される。

228SD015 (Fig. 57)

振れはW-9°35'10"-Nの東西溝で、断面形状は逆台形を呈する。検出した長さは8.6m、幅0.25～0.8m、深さ0.03～0.15mを測る。西側ほど浅く、西端はSD010によって切られている。

228SD020

振れはN-2°12'9"-Wの南北溝で、検出した長さは7.0m、幅0.66～0.78m、深さ0.2mを測る。さらに南側の調査区外へ続いている。底面からは1.8m、1.46m、1.64mの間隔でピットが3個確認された。ピットは直径0.12m、深さ0.1～0.25mで、ほぼ真つ直ぐに掘られていて、掘り方はなく、杭を打ち並べ

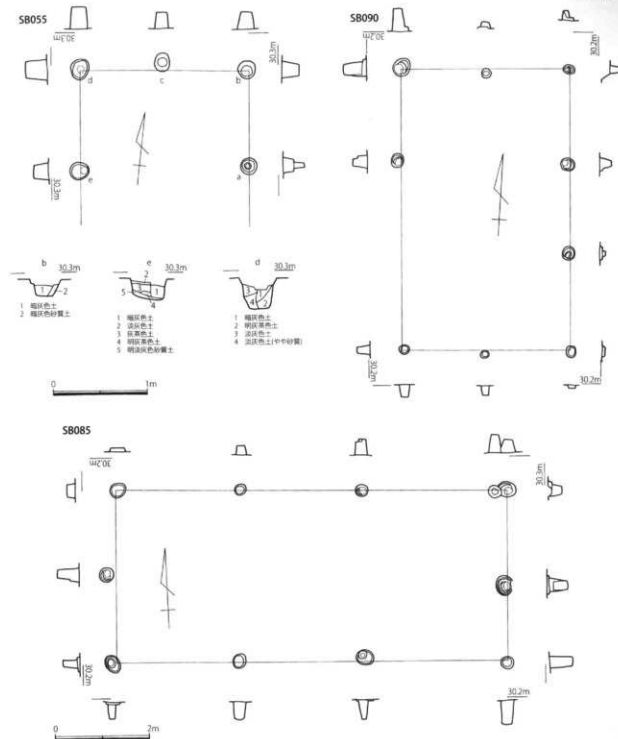


Fig. 55 228SB055・085・090 遺構実測図 (1/80, 土層は1/40)

ていた可能性も考えられ、築地などの工作物の可能性も考えられる。

228SD025

振れはN-1°13'39"-Wの南北溝で、長さは2.1m、幅0.7m、深さ0.3mを測る。形状から溝というより土坑といった感じであるが、北側にも同じ形状の土坑が並んでいる。

228SD029・046・050 (Fig. 57)

SB045に伴う溝とみられるが、建物からやや離れた位置にあるため、雨落ち溝というより、区画溝と考えた方が妥当であろう。北側の溝はSD050で長さ9.35m、幅0.34～0.85m、深さ0.18mを測る。部分的に途切れ、連続土坑状になっているため、それを繋げると全体は約16.5mになる。形状はU字

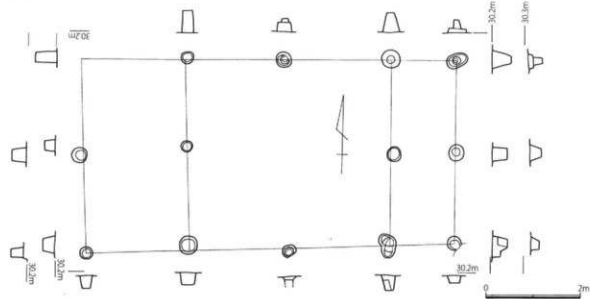


Fig. 56 228SB095 遺構実測図 (1/80)

形をしていて、埋土状況から自然堆積と推測される。東側の溝(SD029)は、北側より規模は小さく、浅いためか連続土坑として検出された。幅0.15～0.47m、深さ0.05～0.12mを測る。SD046の西端からは土師器が多く出土した。

228SD060 (Fig. 57)

掘れはE-6°14'16°-Sの東西溝で、やや蛇行している。検出した長さは5.7m、幅0.23～0.4m、深さ0.14mを測る。SD010と切り合っていて、平面的にはやや不明瞭だったが、土層観察によって、SD010より古いことが確認された。

228SD065

蛇行しながら北西から西に続く溝で、長さは12m以上、幅0.28～0.7m、深さ0.1～0.24mを測る。埋土は灰茶色土に黄灰色土が混じっていて、黄灰色土が人為的な掘削土のような塊であることから、自然堆積というより人為的に埋められた可能性が高い。

228SD070

掘れはN-2°27'43°-Wの南北溝で、検出した長さは3.55m、幅0.7m以上、深さ0.2mを測る。西暦は調査区外で確認できていないため、段落など溝でない可能性も考えられる。南端部の長さ1mほどを完掘したが、その他は掘削せずに保存している。SD075と平行しており、双方の間隔は2.5mである。

228SD075

掘れはN-1°0'18°-Eの南北溝で、検出した長さは3.05m、幅0.5～0.9m、深さ0.04mを測る。南端部のみを完掘したが、全体的に非常に浅い。

土坑

228SK001 (Fig. 58)

調査区北端に位置する。東西2.74m、南北2.45m以上、深さ0.82mの円形の土坑である。東側に若干段が付いていて、それから径約0.6mの円形土坑になる。深さ約0.4m付近から炭が一面にみられ、その層から丸底環等の土師器が多量に出土した。炭層の直上には薄い砂層が見られた。炭層は厚さ0.1～0.2mで、個体の揃った土師器が多く見られる。炭と土師器は一括廃棄と見られる。炭層の下は灰色砂層で、その下は明灰色砂質土である。平面形状から井戸とも考えられたが、炭層が土坑の壁面ぎりぎりまで存在していたこと、井戸枠や曲物の痕跡が全く見られなかったことなどから、井戸とは特定できず、土坑として報告する。

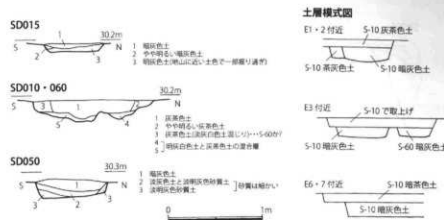


Fig. 57 第228次調査溝土層実測図 (1/40)

228SK005 (Fig. 58)

隅丸方形形状の土坑で、東西1.58m、南北0.95m、深さ0.2mで、埋土は2層で、上層は淡灰色土で、下層は砂層である。

228SK017 (Fig. 58)

調査区北端で検出した不定形の土坑で、北側にはさらに続いている。南北1.65m以上、東西1.9m、深さ0.03mを測る。中央付近には0.52m×0.56m、深さ0.1mの土坑があり、内部には炭が混じり、土師器残底が据えられていた。

228SK035 (Fig. 59)

大きさは東西2.45m、南北2.7m、深さ0.9mの円形土坑である。遺物は上層の暗灰色土には小片しかみられないが、下層の灰色土では、完形の土師器の小皿や丸底環が出土した。SD030と切り合っており、現場ではSD030より古い遺構と判断したが、その切り合めはやや不明瞭で新旧逆の可能性も残している。埋土は全体的に砂混じりで、壁面が砂質であるため自然堆積の様子が窺える。底面では若干の湧水がみられ、井戸枠や曲物の痕跡は確認できず、土坑と考える。

228SK040 (Fig. 59)

不定形の土坑で、南北1.32m、東西1.68m、深さ0.35mを測る。埋土はおよそ2層に分かれ、下層に土師器を多く含む。上層には遺物が少なく、下層が廃棄土砂、上層は自然堆積と推測される。

その他の遺構

228SX061 (Pla. 9)

円形周溝遺構で、幅0.4m前後、深さ0.2～0.3m程の溝が、外径2.5mの円形に掘られている。溝で囲まれた中央部分は砂質土で、正円形にはなっていないが1.6～1.7mの大きさである。弥生時代の祭祀遺構と考えざるを得ないが、特異な遺物が出土しているわけではない。

(4) 出土遺物

竪穴住居

228S1080 出土遺物 (Fig. 60)

須恵器

蓋a1 (1) 復元口径12.0cm、器高2.2cm。外面上半部は回転ヘラ切り後ナゲ調整で、ヘラ記号がある。その他内外面は回転ナゲ。色調は暗灰色を呈する。

土師器

高坏 (2) 口径17.2cm。全体的に磨滅するが、体部はヨコナデ、内面底部はナゲ、外面底部はヘラ切りが残る。胎土は白色砂粒を多く含む、色調は暗黄褐色を呈する。

甕 (3, 4) 3は復元口径17.8cm。胎土は白色砂粒を多く含む、色調は橙褐色や暗茶褐色を呈する。内外面ヨコナデだが、内面下半はケズリのようにもみえる。4は復元口径13.0cm。口縁部を僅かに外反させる。胎土は白色砂粒や赤色粒を含む、色調は橙色や茶灰色を呈する。全体的に磨滅するが、内面に縦方向のケズリのような痕跡を残す。

228S1080 焼土出土遺物 (Fig. 60)

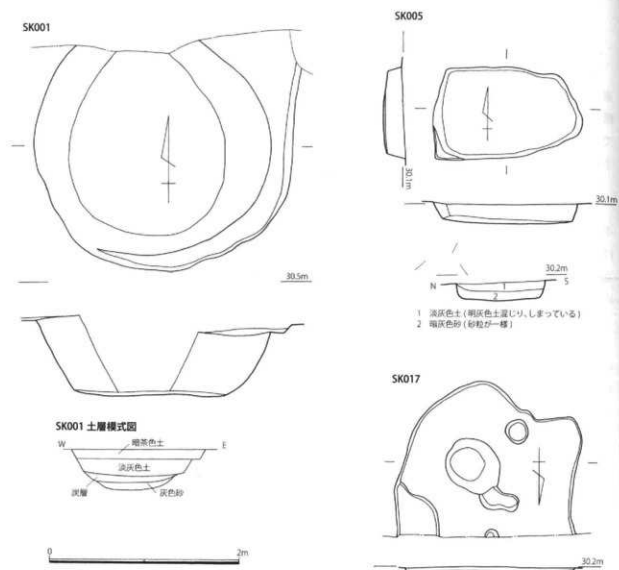


Fig. 58 228SK001・005・017 遺構実測図 (1/40)

須恵器

高杯 (5) 口径 14.4 cm。上半部内外面は回転ナデ、内面底部は不定方向のナデ、外面底部は回転ヘラケズリ。色調は暗灰色を呈する。

土師器

坏 (6) 口縁部の破片で、全形が掴みにくい。復元口径 12.8 cm。外面下半は不定方向のナデ、その他はヨコナデ。色調は橙褐色を呈する。

甕 (7~9) 7は復元口径 15.0 cm。全体的に磨減するが、口縁端部はヨコナデ、その他はヘラケズリのような痕跡を残す。胎土は白色砂粒や茶色粒を多く含み、色調は橙褐色を呈する。8・9は甕などの体部の一部とみられる。胎土は白色砂粒を多く含み、色調は被熱したように赤褐色を呈する。8は内面が横方向のヘラケズリ、9は内外面ヨコナデで、外面下半はヘラケズリ。

土製品

土壁 (10) 胎土は 0.4 cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は淡黄灰色を呈する。

掘立柱建物

228SB045 出土遺物

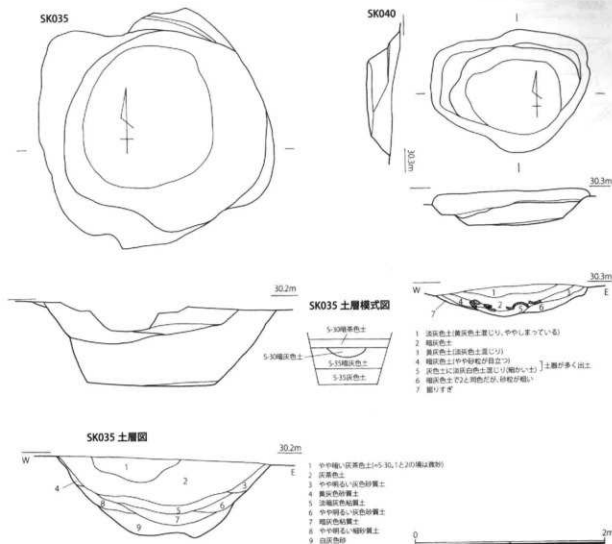


Fig. 59 228SK035・040 遺構実測図 (1/40)

228SB045 ①出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (1) 全体的に磨減するが、底部切り離しは回転ヘラ切りに見える。器高 0.85 cm。

228SB045 ④出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (2) 復元口径 9.6 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、内面底部は不定方向のナデ。色調は明黄褐色を呈する。

228SB045 ⑤柱穴出土遺物 (Fig. 61)

土師器

碗 c (3) 高台径 7.0 cm。内面不定方向のナデ調整。色調は淡黄灰色を呈する。

228SB045 ⑥柱穴出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (4) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。色調は淡黄白色を呈する。

228SB045 ⑦柱穴出土遺物 (Fig. 61)

土師器

SI080

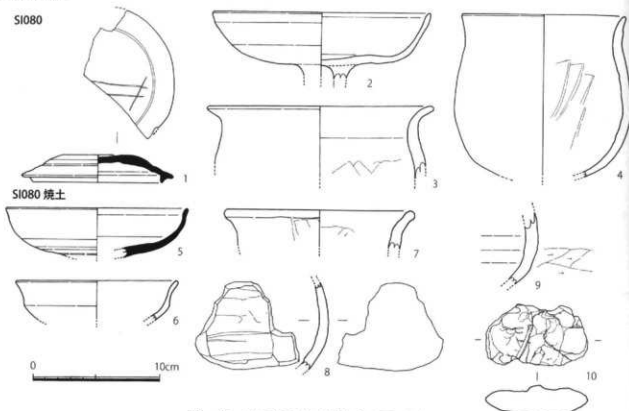


Fig. 60 228SI080 出土遺物実測図 (1/3)

小皿 a (5) 復元口径 8.7 cm、器高 0.55 cm、復元底径 6.4 cm。底部は回転ヘラ切り。色調は淡黄褐色を呈する。

228SB045 柱穴出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (6) 器高 0.7 cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで、内面底部は不定方向のナデ。色調は黄褐色を呈する。

228SB045 器方出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (7) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残し、やや厚い。色調は淡黄白色を呈する。

228SB045 器方出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (8) 復元口径 7.6 cm、器高 0.95 cm、復元底径 6.0 cm。底部は回転ヘラ切り。胎土は金雲母を多く含む。

228SB045 器方出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (9) 全体的に磨滅する。色調は淡黄白色を呈する。

228SB055 出土遺物

228SB055a 出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (10) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、その他は回転ナデ調整。色調は淡黄白色を呈する。

228SB055b 器方出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (11) 復元口径 10.2 cm、器高 1.3 cm、復元底径 6.4 cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。

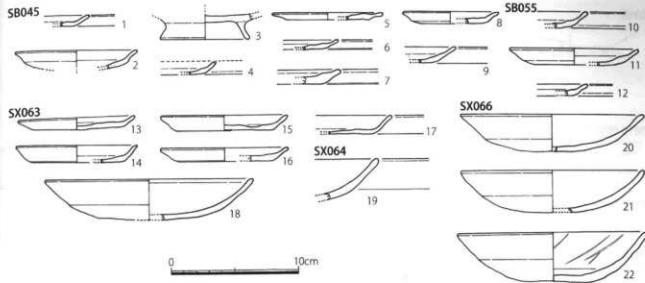


Fig. 61 第228次調査掘立柱建物及び関連遺構出土遺物実測図 (1/3)

胎土は黄褐色で金雲母を多く含む。

228SB055d 出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (12) 器高 0.95 cm。全体的に磨滅するが、内面ナデ、その他は回転ナデ。色調は淡黄褐色を呈する。

掘立柱建物基盤遺構

228SX063 出土遺物 (Fig. 61)

土師器

小皿 a (13~17) 復元口径 9.2~10.0 cm、器高 1.05~1.45 cm、復元底径 7.2~7.8 cm。底部は回転ヘラ切りで、13・15・16には板状圧痕を残す。色調はおよそ淡黄白色を呈する。

丸底坏 a (18) 復元口径 16.4 cm、器高 3.2 cm。底部は押し出しで、板状圧痕を残す。内面磨滅し調整不明。色調は淡黄白色を呈する。

228SX064 出土遺物 (Fig. 61)

土師器

丸底坏 a (19) 全体的に磨滅するが、内面はミガキ b と思われる。色調は淡黄褐色を呈する。

228SX066 出土遺物 (Fig. 61)

土師器

丸底坏 a (20~22) 復元口径 14.4~15.0 cm、器高 3.0~4.0 cm。底部は押し出し。21の底部には板状圧痕が残る。22は内面ミガキ b、外面底部は回転ヘラ切り痕跡を残す。

溝

228SD010 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

碗 c (1, 2) 2点とも磨滅が目立つ。色調は淡黄白色や淡黄白色を呈する。1は復元高台径 6.8 cm、2は高台径 6.3 cm。

丸底坏 a (3) 口径 15.3 cm、器高 3.2 cm。全体的に磨滅する。色調は淡黄白色を呈する。

228SD010 灰茶色土出土遺物 (Fig. 62)

土師器

丸底坏 a (4, 5) 全体的に磨滅する。色調は黄白色や淡灰白色を呈する。4は口径 15.4 cm、器高 3.2 cm。

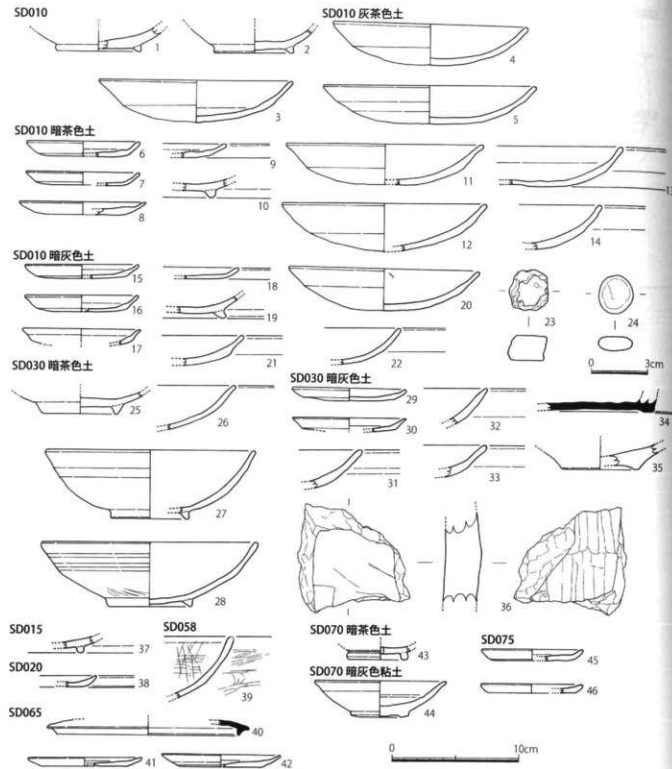


Fig. 62 第228次調査溝出土遺物実測図 (1/3、23-24・36は1/2)

5は復元口径16.8cm、器高3.0cm、外面底部に僅かに板状圧痕を残す。

228SD010 暗茶色土出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (6~9) 復元口径9.0~10.0cm、器高1.0~1.2cm。全体的に磨滅するが、7と9は底部へラ切りが確認できる。色調は淡黄白色を呈する。

椀 c (10) 磨滅し調整不明。色調は淡黄白色を呈する。

丸底坏 a (11~14) 全体的に磨滅する。色調は淡橙白色や淡黄白色を呈する。11は口径15.8cm、12は復元口径16.2cm、13は内面にミガキbが確認できる。

228SD010 暗灰色土出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (15~18) 復元口径9.0~9.4cm、器高0.9~1.3cm。底部は回転へラ切りで板状圧痕を残す。色調は黄白色を呈する。

椀 c (19) やや低く外反する高台を貼付する。内外面とも磨滅する。色調は淡黄白色を呈する。

丸底坏 a (20~22) 底部切り離しはへラ切り。20は口径15.1cm、器高3.2cm。底部には板状圧痕を残す。20と21では内面にミガキbが確認できる。

瓦類

瓦玉 (23) 大きさは3.2×3.0cm、厚さ2.0cm。色調は灰色を呈する。

石製品

平玉石 (24) 黒色の石材で、大きさは2.05×1.8cm、厚さ0.7cm。

228SD030 暗茶色土出土遺物 (Fig. 62, Pla. 14)

土師器

椀 c (25) 復元高台径5.8cm。色調は暗茶灰色を呈する。

丸底坏 a (26) 内面ミガキbだが、外面は磨滅し調整不明。

瓦器

椀 c (27, 28) 全体的に磨滅する。27は復元口径16.6cm、器高5.4cm、復元高台径6.2cm。28は復元口径17.1cm、器高5.1cm、高台径6.1cm。部分的にミガキがみられ、外面底部は板状圧痕を残す。色調は灰色や黄白色を呈する。

228SD030 暗灰色土出土遺物 (Fig. 62, Pla. 14)

土師器

小皿 a (29, 30) 29は復元口径9.0cm、器高1.05cm、復元底径7.1cm。底部へラ切りで、板状圧痕を残す。30は復元口径9.0cm、器高1.1cm、復元底径7.4cm。色調は黄白色を呈する。

丸底坏 (31~33) 全体的に磨滅する。色調は淡黄白色や淡橙白色を呈する。

朝鮮系無釉陶器

壺 (34) 底部で、色調は暗灰色で、断面は赤茶色を呈する。底部外面は粗いナデ、内面はヨコナデ。胎土は僅かに砂粒を含むが精製されている。

弥生土器

壺×甕 (35) 弥生土器か土師器か明確に特定しづらい。壺もしくは甕の上げ底状の底部で、胎土は0.4cm以下の砂粒を多く含み、色調は暗黄色や淡黄色を呈する。

石製品

石鍋 (36) 内外面ケズリ痕跡を残す。滑石製。

228SD015 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

椀 c (37) 方形の高台を貼付する。内外面磨滅し調整不明。色調は黄白色を呈する。

228SD020 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (38) 内外面磨滅し調整不明。器高0.9cm。色調は淡黄白色を呈する。

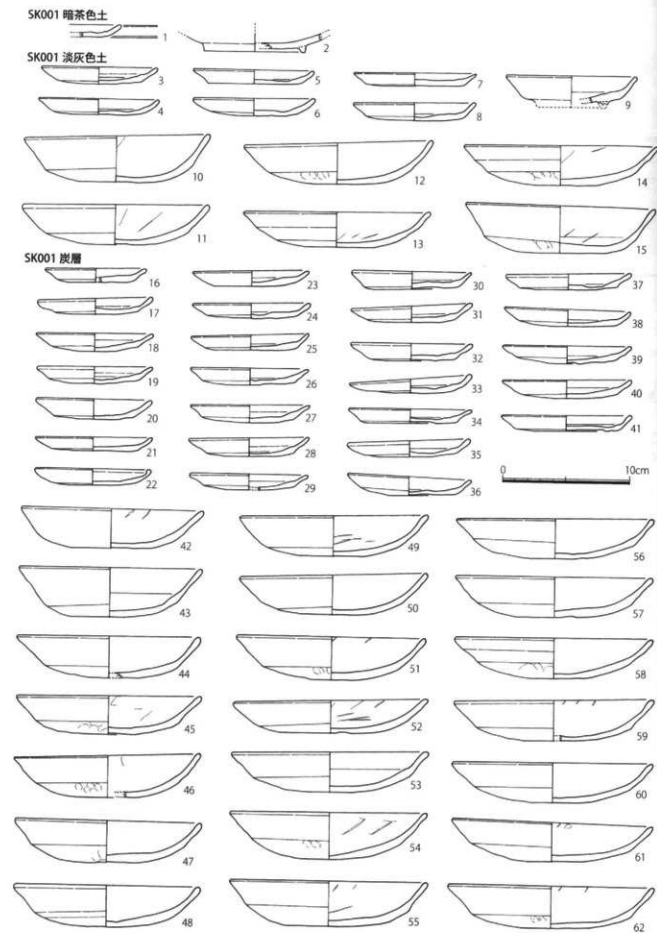


Fig. 63 228SK001 出土遺物実測図① (1/3)

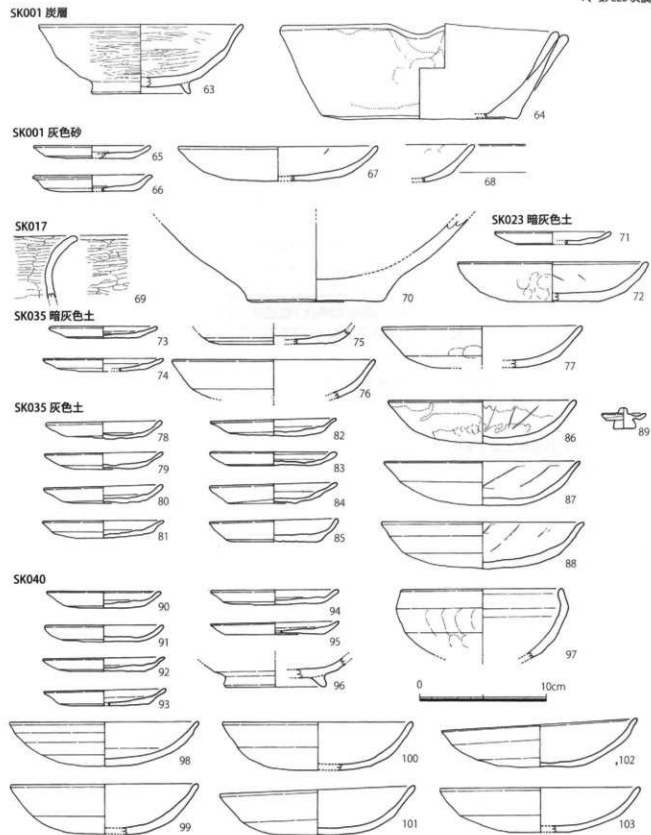


Fig. 64 228SK001 ②・017・023・035・040 出土遺物実測図 (1/3)

228SD058 出土遺物 (Fig. 62)

瓦器

碗 (39) 口縁端部を僅かに欠損する。内面はミガキ c の後縦方向のナデ、外面はミガキ c で、体部下半に指頭痕を残す。上半部は黒色化している。

228SD065 出土遺物 (Fig. 62)

須恵器

蓋 1 (40) 復元口径 14.3cm。内外面回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。

土師器

小皿 a (41, 42) 底部は回転ヘラ切り後板状圧痕を残す。色調は淡黄白色を呈する。41 は復元口径 9.0cm、器高 0.7cm、復元底径 6.8cm。42 は復元口径 9.4cm、器高 1.0cm、復元底径 6.2cm。

228SD070 暗茶色土出土遺物 (Fig. 62)

黒色土器

碗 c (43) 若干丸味のある高台を貼付する。復元高台径 5.0cm。内面は磨減し剥落する。

228SD070 暗灰色粘土出土遺物 (Fig. 62)

白磁

皿 (44) II-1a 類。復元口径 10.4cm、器高 2.85cm、復元高台径 4.6cm。

228SD075 出土遺物 (Fig. 62)

土師器

小皿 a (45, 46) 45 は復元口径 8.0cm、器高 0.9cm、復元底径 6.6cm。46 は復元口径 8.0cm、器高 0.7cm、復元底径 6.8cm。底部切り離しは不明瞭でナデ痕跡が見える。

土坑

228SK001 暗茶色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (1) 底部切り離しは回転ヘラ切り、内面底部ナデ、その他はヨコナデ。

瓦器

碗 c (2) 復元高台径 8.0cm。内面は磨いているが単位不明。色調は内外面とも暗黒色を呈する。

228SK001 炭灰色土出土遺物 (Fig. 63)

土師器

小皿 a (3~8) 復元口径 9.2~9.6cm、器高 1.1~1.4cm、底径 6.5~7.9cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。内面底部はナデ。色調は淡黄白色や淡橙白色を呈する。

小皿 c (9) 復元口径 10.3cm、内面底部ナデ、その他はヨコナデ。色調は白黄色を呈する。

丸底坏 a (10~15) 復元口径 14.7~15.3cm、器高 2.8~3.7cm。底部は回転ヘラ切り後押し出しで、外面下半には指頭圧痕を残す。12・13 以外は板状圧痕を残す。内面はミガキ b でコデ当て痕も残す。

228SK001 炭層出土遺物 (Fig. 63・64、Pl. 14)

土師器

小皿 a (16~41) 復元口径 8.0~10.3cm、器高 1.1~1.6cm、底径 5.6~7.7cm。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。内面底部はナデ。色調はおおよそ淡黄白色を呈する。29 の底部の一部に墨痕を残す。41 はやや歪んでいる。

丸底坏 a (42~62) 復元口径 14.4~16.3cm、器高 2.6~3.9cm。磨減も目立つが内面にはミガキ b を残す。外面底部は回転ヘラ切り後体部下半を押し出している。板状圧痕も残している。色調はおおよそ淡黄白色を呈する。

碗 c (63) 復元口径 16.0cm、器高 5.5cm、復元高台径 7.8cm。口縁部は僅かに外反気味である。内外面ともミガキ c を施す。色調は黄白色を呈する。

鉢 (64) 片口の鉢で、口径 22.4cm、器高 7.5cm、底径 15.4cm。胎土は 0.3cm 以下の砂粒を多く含

み黄白色を呈する。内外面ともヨコナデで、粘土細痕がよく残る。外面には煤が厚く付着する。

228SK001 炭灰色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (65, 66) 底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕を残す。色調は淡黄白色を呈する。65 は口径 9.2cm、器高 1.0cm、底径 7.1cm。66 は復元口径 9.5cm、器高 1.3cm、復元底径 7.5cm。

丸底坏 a (67, 68) 内面にミガキ b を施す。色調は淡黄白色を呈する。67 は復元口径 15.8cm、器高 2.7cm。外面底部に僅かに板状圧痕を残す。

228SK017 出土遺物 (Fig. 64)

弥生土器

壺 (69, 70) 69 は口縁部で、緩やかに外反する。胎土は 0.15cm 以下の白色砂粒を含み、色調は灰黄色を呈する。内外面とも細かい横方向のミガキを施す。70 は底部で、胎土は 0.4cm 以下の白色砂粒を多く含み、色調は内面が灰黒色や外面は暗黄灰色や淡橙色を呈する。底部外面はナデ、外面はミガキを施したような光沢がみられるが明確でない。内面は磨減で器面がボロボロに荒れている。底径 10.3cm。

228SK023 暗灰色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (71) 復元口径 9.2cm、器高 1.0cm、復元底径 6.1cm。底部は板状圧痕が残る、切り離しは回転ヘラ切り。

丸底坏 a (72) 復元口径 15.0cm、器高 3.1cm。内面はミガキ b、外面は底部押し出しで、指頭圧痕を残す。

228SK035 暗灰色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (73, 74) 外面底部は回転ヘラ切りで、内面底部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。73 は復元口径 8.4cm、器高 0.9cm、復元底径 6.0cm。74 は口径 9.5cm、器高 1.0cm、復元底径 7.2cm。

坏 a (75) 復元底径 9.0cm。底部切り離しは回転糸切り、その他はヨコナデ。

丸底坏 a (76, 77) 76 は復元口径 16.0cm。内面はミガキ b。77 は復元口径 15.8cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。

228SK035 炭灰色土出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (78~85) 口径 9.2~11.0cm、器高 1.1~1.45cm、底径 6.1~8.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。内面底部はナデ調整。色調は淡黄白色を呈する。

丸底坏 a (86~88) 復元口径 14.9~16.0cm、器高 3.5~3.8cm。底部は押し出しで、回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。内面はミガキ b でコデ当ても残る。86 は内外面に煤が付着する。

白磁

瓶蓋 (89) 器高 1.65cm、幅 3.45cm。胎土は精製され、上半部は光沢のある白釉を施すが、下半部は露胎。瓶の穴に差し込む部分の径は 1.8cm。

228SK040 出土遺物 (Fig. 64)

土師器

小皿 a (90~95) 口径 9.05~10.2cm、器高 0.8~1.3cm、底径 5.9~7.8cm。確認できるもの底部切り離しは回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。内面底部はナデ調整。色調は淡黄白色を呈する。

碗 c (96) 復元高台径 8.0cm。外面底部は回転ヘラ切り。内面ナデ調整。色調は黄白色を呈する。

甕 (97) やや深い体部で口縁部を内湾させる。胎土は白色砂粒を多く含む淡黄白色を呈する。全体的に磨滅するが、外面下半は指頭圧痕のようなものが見える。内面屈曲部は工具が当たったような痕跡が残る。口径12.7cm。

丸底坏 a (98 ~ 103) 復元口径14.8 ~ 15.8cm、器高2.9 ~ 3.9cm、全体的に磨滅する。体部下半は押し出して、底部は回転ヘラ切りで板状圧痕を残す。色調は淡黄白色を呈する。

その他の遺構

228SX061 出土遺物 (Fig. 65)

弥生土器

甕 (1 ~ 3) 1は口縁端部に刻み目を施す。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、色調は暗茶灰色や灰黄色を呈する。2は内外面ナデ調整。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、色調は暗茶灰色を呈する。3は底部で、外面タテハケ、内面ナデ、外面底部は不定方向のナデ。胎土は0.3cm以下の砂粒を多く含み、色調は暗茶灰色や灰黄色を呈する。

石製品

剥片 (4 ~ 6) 全て黒曜石製、4は大きさ2.45×1.9cm、厚さ0.45cm、5は大きさ2.9×1.5cm、厚さ0.9cm、6は大きさ1.9×1.45cm、厚さ0.35cm。

第228次調査灰茶色土出土遺物 (Fig. 65)

須恵器

蓋1 (7 ~ 10) 7はやや歪んでいるが復元口径12.2cm、器高1.4cm。外面上半部はヘラケズリ後ナデ、内面上半部は不定方向のナデ、その他は回転ナデ。色調は暗灰色を呈する。8 ~ 10は口縁端部で、色調は暗灰色を呈し、回転ナデ調整。

蓋3 (11) 口縁端部外面には重ね焼き痕を残す。内外面とも回転ナデ。

土師器

蓋1 (12) 外面は磨滅し調整不明、内面は回転ナデ。色調は黄褐色を呈する。

瓦器

甕 (13) 復元高台径7.2cm。内面ミガキで黒光りしている。

須恵質土器

鉢 (14, 15) 胎土は白色砂粒を多く含み、色調は灰白色を呈する。内外面ともナデ調整。14の内面は使用により若干平滑である。

弥生土器

甕 (16) 口縁端部はヨコナデで、刻み目を施す。外面は磨滅するがハケ目が残る。内面下半は指頭痕が残る。胎土は0.1cm以下の白色砂粒を多く含み、微細な金雲母も多く含み、暗茶灰色を呈する。

228SX004 出土遺物 (Fig. 65)

須恵器

蓋1 (17) 内外面ともヨコナデ。色調は灰色や黒灰色を呈する。

(5) 小結

この調査で確認できた遺構の時期は、弥生時代前期、7世紀後半、平安時代後期の3時期であるが、遺構・遺物のほとんどが平安時代後期である。

○弥生時代前期

遺構としてはSK017とSX061だけである。北側の第222次調査では7650㎡の面積を調査したにもかかわらず、弥生土器は数点しか出土していない。このことから、弥生時代の集落が展開するよう

SX061



Fig. 65 第228次調査その他の遺構出土遺物実測図 (1/3、4~6は1/2)

ものではなく、限定的な土地利用だった可能性が高い。しかし、逆に言えばなぜこの遺構が存在するのかわかる。調査が進んでいない南側一帯に弥生時代の遺構が点在する可能性もある。

○7世紀後半

遺構としては、堅穴住居 (SI080) のみであるが、北側第222次調査でも堅穴住居が1棟検出されている。Fig. 65などに示したように須恵器の蓋1が少量ながら出土している。特に付近一帯で奈良時代の遺構が展開しない状況の中で、大宰府政庁1期である7世紀後半頃の遺構や遺物が少量とはいえ散見されることは、この一帯の土地利用がどう行われていたか考える上で貴重な所見である。

○平安時代後期

今回の調査で確認された遺構のほとんどが、11世紀後半~12世紀前半を主体とする遺構で構成されている。調査区内には井戸と確定できるものは検出していない。出土物については、土師器の小皿a、丸底坏が特に多く、逆に陶磁器の出土量が少ない傾向にあった。

対象地の西端で確認された2条の溝 (SD070・075) は、確認範囲が狭く、非常に浅いため、今回の報告では道路側溝と限定していないが、北側の第222次調査のSF1000の道路の延長上に位置するため、道路に関連する遺構の可能性も考えられる。

また、調査区内に掘られている溝 (SD010・020・030) は、条里もしくは条坊の1区画内を細分する区画溝と想定されるが、溝が十字に交わっていない変則的な取りつき方をしていることから、面積が異なる区画が存在していた可能性が考えられる。

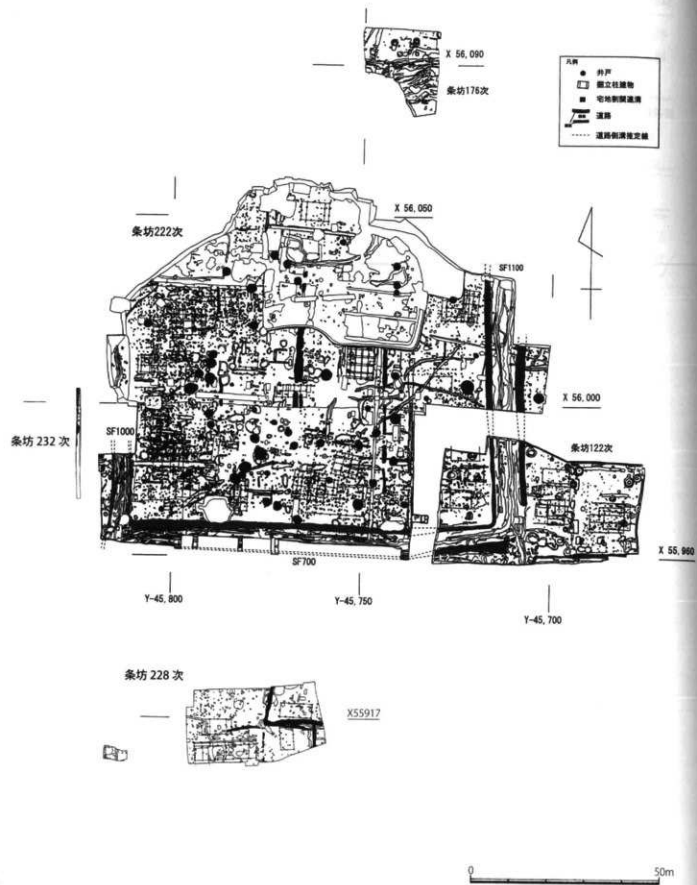


Fig. 66 第228次調査周辺遺構関係図 (1/1000)

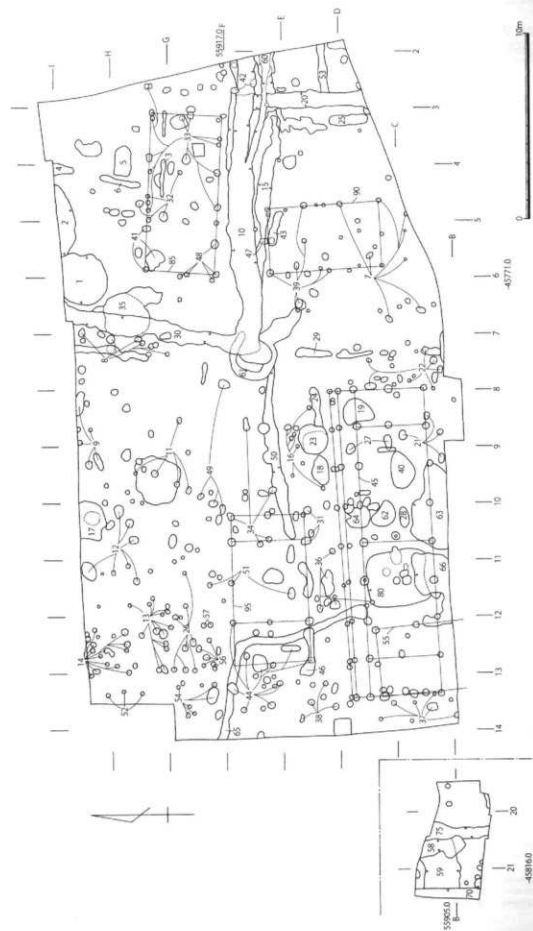


表8 第228次調査 遺構一覧表

S番号	遺構番号	種別	埋土等	埋設時期	地区
1	228S001	土坑		11世紀後半	B5・6
2		竪穴	褐色土、自然堆積か	平安時代	B5
3		溝			G4
4	228S3004	溝?		平安後期	B4
5	228S005	土坑		平安後期前後	G3・4
6		溝			G4
7		ピット群		平安後期～	B4・5・6
8		ピット群		平安時代	G7
9		ピット・土坑群		平安時代	B8・9
10	228S010	ピット群	S-20-40-10	11世紀後半～12世紀初	Eライン
11		ピット群		平安時代	F3
12		ピット群			G10・11
13		ピット群			G11・12
14		ピット群		平安後期	G12
15	228S015	溝	遺存形で小ピットあり	平安後期	G12
16		ピット群		平安後期	Eライン
17	228S017	土坑	土坑中央付近に散在したの堆積あり。	弥生前期	H10
18		土坑		平安時代	D9
19		土坑	ぼんやりした埋土	平安時代	C8
20	228S020	溝		平安後期	C02
21		ピット群		平安時代	B8
22		ピット群		平安時代	B7
23	228S023	土坑		平安後期	D8
24		溝			D8
25	228S025	土坑	褐色土上に黄灰色土が混じる	平安後期	C1
26		ピット群		平安後期	F11・12
27		土坑群		平安後期	C9
28		土坑		平安後期	B10
29	228S029	土坑		平安後期?	G7
30	228S030	溝	褐色土でまっすぐに、自然堆積の様子。S-35-30で調査したが、切り合いは不明瞭。	11世紀後半～12世紀初	D08
31		ピット群		平安後期	D10
32		ピット群		平安時代	G4
33	228S085	竪立柱建物		平安時代	F3・4
34		ピット群		平安後期	E10
35	228S035	土坑	S-35-30で調査したが、切り合いは不明瞭。	12世紀前半前後	G6
36		ピット群			D11
37		ピット群			B13
38		ピット群		平安時代	D13
39		ピット群		平安時代	D5・6
40	228S040	土坑		11世紀後半	B9
41		ピット群			G5
42		ピット群			E2
43		溝			E5
44		ピット群		平安後期	E13
45	228S045	竪立柱建物	2間×3間、3面庇付の東西棟。	11世紀後半～12世紀初	B・8・9・13
46	228S046	溝		11世紀後半～12世紀初	D12
47		ピット群			E8
48		ピット群			F8
49		ピット群			F9
50	228S050	溝		平安時代	D17-10
51		ピット群		平安後期	E1
52		ピット群		平安後期	G13
53		溝		平安時代	B2
54		ピット群		平安後期	F13
55	228S055	竪立柱建物	2間×2間以上の南北棟。	平安後期	B12, 13
56		ピット群		平安後期	F12
57		ピット群		平安後期	F12
58		溝		平安後期	B20
59		溝			B20・21
60	228S060	溝	暗紫色土 S-20-40-10	11世紀後半	E2・3
61	228S3061	円形周溝土坑	中央は砂質土?	弥生前期?	E7
62		たまり		11世紀後半～12世紀初	C10
63	228S3063	たまり	暗紫色土、埋土と地山の間に層に砂あり。S-63-45	11世紀後半前後	B9・10
64	228S3064	たまり	S-64-45	11世紀前半前後	C10
65	228S3065	溝	灰紫色土に黄灰色土混じる	11世紀?	C～F11-14
66	228S3066	たまり		11世紀後半～12世紀初	B11
67	228S3070	溝		平安後期	AB2
70	228S3075	溝		平安後期	AB20
75		溝		7世紀後半	BC11
80	228S1080	竪穴	炭層より S-80-46	平安時代	FG-5
85	228S085	竪立柱建物	報告整理中に確認。3間×3間の東西棟。	平安後期	C～E4・5
90	228S090	竪立柱建物	報告整理中に確認。2間×2間の東西棟。	平安後期	DE10-12
95	228S095	竪立柱建物	報告整理中に確認。2間×2間、東西庇付の東西棟。	平安後期	DE10-12

表9 第228次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
228SD010	検出東端中心	55915.85	-45759.45	-802.184	-930.740	
	検出西端中心	55915.70	-45773.40	-802.473	-944.687	E-0° 36' 58" -N
228SD015	検出東端中心	55914.36	-45762.60	-803.715	-802.632	
	検出西端中心	55915.50	-45769.35	-934.874	-940.636	F-9° 35' 10" -N
228SD020	検出北端中心	55915.20	-45761.70	-802.856	-932.983	
	検出南端中心	55910.00	-45761.50	-808.054	-932.731	N-2° 12' 9" -W
228SD030	検出北端中心	55925.00	-45773.05	-793.170	-944.430	
	検出南端中心	55917.00	-45774.50	-801.184	-945.800	N-10° 16' 24" -E
228SD060	検出東端中心	55914.95	-45759.30	-803.422	-964.529	
	検出西端中心	55915.42	-45763.60	-813.654	-934.775	E-6° 14' 16" -S
228SD070	検出北端東厨中心	55907.20	-45817.15	-811.410	-988.350	
	検出南端東厨中心	55904.00	-45817.05	-814.609	-988.218	N-2° 2' 43" -W
228SD075	検出北端中心	55906.15	-45814.00	-812.429	-985.190	
	検出南端中心	55903.30	-45814.05	-815.279	-985.211	N-1° 0' 18" -E
228SB045	柱穴1中心	55906.55	-45776.86	-811.657	-948.058	
	柱穴9中心	55905.75	-45793.04	-811.619	-964.237	E-2° 49' 50" -N
228SB055	柱穴b中心	55909.12	-45789.76	-809.216	-906.981	
	柱穴d中心	55908.40	-45793.25	-809.971	-964.463	E-11° 39' 24" -N
228SB085	柱穴北東端中心	55920.78	-45762.30	-797.282	-933.639	
	柱穴北西端中心	55921.20	-45770.58	-796.945	-941.923	F-2° 54' 14" -N
228SB090	検出北東端中心	55914.86	-45767.20	-803.285	-941.859	
	検出南東端中心	55908.90	-45766.92	-809.208	-938.140	N-2° 41' 23" -W
228SB095	柱穴南東端中心	55912.88	-45783.58	-805.395	-954.839	
	柱穴南西端中心	55912.49	-45791.35	-805.862	-962.604	E-2° 52' 24" -N

政庁中軸線方位 = N-0° 34' 24" -E 政庁南門中点座標 = (X=56708.680, Y=-44820.730)

5. 第232次調査



Fig. 68 第232次調査遺構全体図 (1/200)

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市都府楼南2丁目1544番1で、筑紫野市との市境に位置する。

2003(平成15)年12月19日、太宰府市建設課都市開発係より道路整備の計画が出された。工事内容は、道路の法面を土手からコンクリート壁に変更し、道路を拡幅するものであった。周囲で遺構が確認されていることや擁壁が恒久構造物とみなされるため、調査となった。

発掘調査は2004(平成16)年2月2日から2月3日にかけて実施した。調査は宮崎亮一が担当した。開発対象面積は30.7㎡、調査面積は30.9㎡である。調査面積が対象面積を上回ったのは、工事の都合上西側にやや広めに掘削を行ったためである。

(2) 基本層位 (Fig. 69)

調査前、調査地は道路土手の法面であって西側は畑地であった。道路と畑との落差は約0.7mあり、道路側はガス管理設に伴う掘削で遺構面は破壊され、真砂土の埋土で覆われていた。畑の面からは耕作土が厚さ0.1m、床土と見られる黄色土が厚さ0.05m、その下に淡灰色土が厚さ0.1mほどあって、その下の明淡灰色土に遺構が確認された。

(3) 検出遺構

232SX001 (Pl. 10)

検出長は15.35m、幅0.7m以上、深さ0.3mを測る。東肩は若干蛇行しているが、方位はN-1°20'19"Eである。現状では調査区が細長いため溝に見えるが、遺構は調査区外の西側に続いており、この遺構が溝なのか落ち込みの端部なのかは不明瞭である。埋土は淡灰色土と灰茶色土の混合層で、北側の底面近くで須恵器などの遺物は多く出土した。南側では平安後期の土師器が出土していることから、最初の堆積は7世紀中頃～後半だが、最終埋没が平安後期という可能性が考えられる。

(4) 出土遺物

232SX001 出土遺物 (Fig. 70, Pl. 14)

須恵器

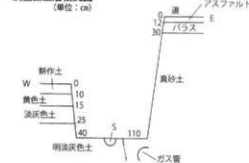
調査区土層構造図
(単位: cm)

Fig. 69 第232次調査土層構造図 (1/40)

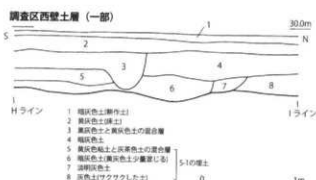
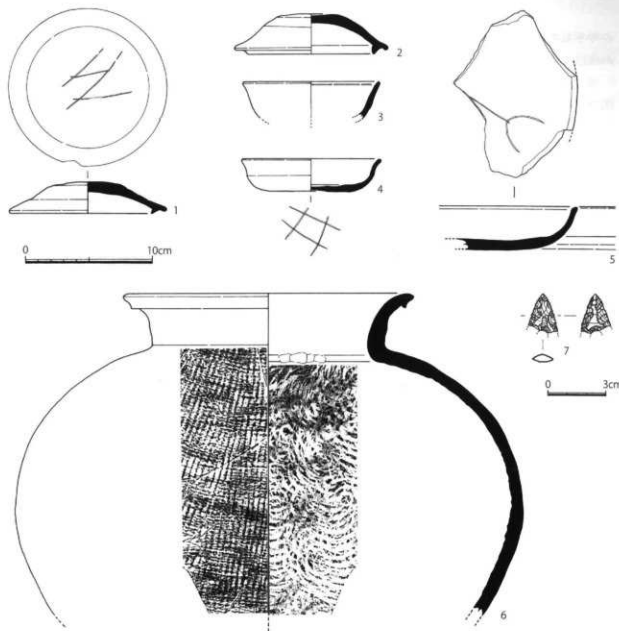


Fig. 70 232SX001 出土遺物実測図 (1/3, 7は1/2)



蓋 a1 (1, 2) 1は口径12.5 cm、器高2.5 cm。胎土は白色砂粒を少量含み、焼成還元ともやや不良で、内面は淡黄橙色、外面は黄白色を呈する。内面上半部は回転ナデの後ヨコナデ、外面上半部はヘラ切り後未調整。2は口径12.2 cm、器高3.2 cm。胎土は白色砂粒を少量含み、焼成還元ともやや不良で、色調は白黄色を呈する。内面上半部は不定方向のナデ、外面上半部はヘラ切り後未調整で、ヘラ記号を施す。

小环 a (2) 復元口径10.8 cm。焼成は良好だが、還元不良で内外面とも淡橙黄色を呈する。口縁内面には沈線を施す。内外面とも回転ナデ。

中環 a (4) 口径11.0 cm、器高2.6 cm、底径6.3 cm。底部外面は回転ヘラ切り後未調整で、ヘラ記号を施す。内面底部は被熱で荒れている。その他は回転ナデ。焼成還元良好で、色調は灰色や暗灰色を呈する。

大皿 a (5) 器高3.45 cm。口縁端部を若干平坦に面取りする。胎土は白色砂粒を含む。焼成還元は

やや不良の土師質で、暗茶灰色や暗灰色を呈する。外面下半は回転ヘラケズリ、内面底部はナデ、その他はヨコナデ。内面にヘラ記号を施す。

甕 (6) 口径23.0cm。頸部内面には叩きを施す際の当て具がコツコツと当たった痕跡が残る。口縁部はヨコナデ、体部外面は叩きの後全体的に軽くヨコナデする。焼成還元とも良好で暗灰色を呈する。

石製品

石鏝 (7) 基部を欠損するが、現存長2.0cm、現存最大幅1.6cm、厚さ0.4cm。黒曜石製。

(5) 小結

今回の調査は、細長く狭いため、全体像はわからないが、ピット群から出土する遺物が11世紀後半前後のものとみられるため、道路を挟んだ東側で調査された第222次調査と同じ時代の遺構が広がっていたことになる。また、調査区の西端に南北に長い溝状の遺構が確認され、時期が7世紀中頃～後半であることから、条坊成立以前の時期にも遺構の展開があったことを伺わせる貴重な所見を得られた。

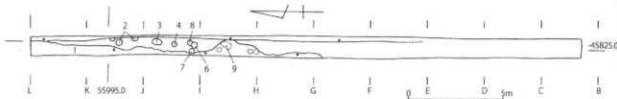


Fig. 71 第232次調査遺構略測図 (1/200)

表12 第232次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	増土等	時期	地区
1	232SX001	溝状遺構	淡灰色土と灰茶色土の混合層	7世紀中頃～後半	2ライン
2		ピット群	暗灰色土	平安後期	J2
3		ピット	暗灰色土	平安後期	I2
4		ピット	暗灰色土	平安後期	I2
6		ピット	暗灰色土	平安後期	I2
7		ピット	暗灰色土	平安後期	I1
8		ピット	暗灰色土	平安後期	I2
9		ピット	暗灰色粘質土	平安後期	H2

表13 第232次調査 条坊関連遺構座標値

遺構番号	位置	遺構中点座標値		南門からの距離		方位
		X	Y	X方向 (m)	Y方向 (m)	
232SX001	北端東岸	55999.155	-45825.0	-719.538	-997.120	N-1° 20' 19" -E
	南端東岸	55984.178	-45825.35	-734.518	-997.320	

政庁中軸線方位=N-0° 34' 24" -E 政庁南門中点座標=(X=56708.680, Y=-44820.730)

表14 第232次調査 出土遺物一覧表

S-1	土 師 器 鉢a, 小杯, 中杯a, 大皿a, 甕	S-6	土 師 器 杯
S-2	土 師 器 杯, 中(小)杯a, 甕, 磁片	S-7	白 磁 筒 (IV (1))
S-3	土 師 器 品石鏝, 鏡片 (灰山形)	S-8	土 師 器 杯, 杯c
S-4	土 師 器 品石鏝, 鏡片 (灰山形)	S-9	土 師 器 杯, 小皿a, 甕, 磁片
S-5	土 師 器 品石鏝, 鏡片 (灰山形)	S-10	白 磁 筒; 磁片 (1)
S-6	土 師 器 杯	S-11	土 師 器 磁片

6. 第247次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市都府楼南4丁目566-280で、鶯田川から西方80mに位置する。

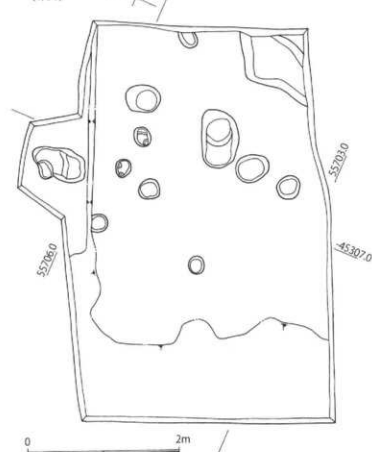
2005 (平成17)年2月23日に不動産のトーカイから、土地売買に先立ち文化財についての問い合わせがあった。確認調査を2005 (平成17)年3月8日に行い、G1-30cmで僅かに遺構が確認された。その後協議を行い、建物の基礎が遺構に達しない計画で合意した。2005 (平成17)年5月11日、駐車場部分の掘削に伴い立会を実施したところ、遺構面に掘削が及ぶことが確認されたため、緊急に調査を実施することとなった。

発掘調査は2005 (平成17)年5月13日に実施した。調査・実測は宮崎亮一、柳智子、森若知子が行った。開発対象面積は292.86㎡、調査面積は17㎡である。

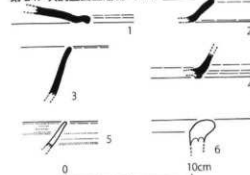
(2) 基本層位

宅地面から深さ約0.3m、道路面とはほぼ同一レベルに遺構面があり、包含層など綺麗に削平されていた。付近一帯の住宅地は昭和40年代後半に造成されたもので、かつては起伏もある田畑が広がっていた。現在は盛土や削平が行われ、かつての面影を残していないため、遺構面の深さが一定でなく、現況地形からの旧地形を予測することは難しい状況である。

遺構全体図 (1/50)



第247次調査出土遺物 (1/3)



遺構略測図 (1/100)

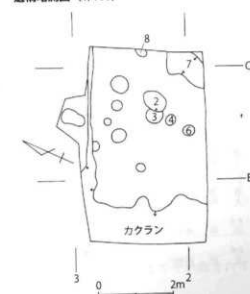


Fig. 72 第247次調査遺構全体図 (1/50)・出土遺物実測図 (1/3)・略測図 (1/100)

(3) 検出遺構 (Pl. 10)

調査面積が狭いため、検出した遺構はビット11個、土坑1個であった。全ての埋土は暗灰茶色土で、遺物が少量混じる程度であった。

(4) 出土遺物

第247次調査出土遺物 (Fig. 72)

須恵器

蓋 3 (1) 若干潰れたような口縁部で、内外面とも回転ナデ。焼成還元とも良好で、色調は灰色を呈する。胎土に黒色粒を少量含む。S-2より出土。

皿 a (2) 内外面とも回転ナデ。焼成還元とも良好で、色調は暗灰色を呈する。胎土に白色砂粒を少量含む。S-2より出土。

坏 (3) 内外面とも回転ナデ。焼成還元とも良好で、色調は暗灰色を呈する。胎土に白色砂粒や黒色粒を少量含む。S-2より出土。

坏 c (4) 小片で、底部に低い高台を貼付する。焼成還元とも良好で、色調は暗灰色を呈する。表土より出土。

土師器

坏 d (5) 胎土は精製され、焼成は良好。色調は淡橙色を呈する。内外面とも回転ナデの後ミガキ a を施す。S-8より出土。

甕 (6) 胎土は0.1 cm以下の砂粒を含み、焼成はやや不良で、色調は淡灰色を呈する。やや磨減するが、外面はヨコナデ、内面はヘラケズリが確認できる。S-2より出土。

(5) 小結

都府楼団地内は造成時に大きく改変されており、この地についても大きく削平されていることがわかった。遺物量も少ないが、全体的に奈良時代の遺物が多く、この調査地周辺は奈良時代の遺構が残されていることが窺える。

表 15 第247次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
2	ビット	暗灰茶色土		奈良時代	B2
3	ビット	暗灰茶色土			B2
4	ビット	暗灰茶色土			B2
6	ビット	暗灰茶色土			B2
7	土坑	暗灰茶色土			C2
8	ビット	暗灰茶色土			C2

表 16 第247次調査 出土遺物一覧表

S-2	須 恵 器 蓋 3、内、皿、坏 c、土 師 器 坏 d、甕、碗片	S-2	須 恵 器 坏 c
S-3	須 恵 器 坏 c、坏 d、土 師 器 甕、坏 c、甕	S-4	土 師 器 坏 d
S-4	土 師 器 坏 c	表土	須 恵 器 坏 c、土 師 器 碗片
S-6	土 師 器 碗片		

7、第296次調査

(1) 調査に至る経過

調査地は太宰府市都府楼南4丁目566-168で、標高34m前後の平坦地である。

2011(平成23)年より専用住宅建て替えについての照会があり、2月6日に確認調査を行い、前面道路より深さ25cmで遺構を確認した。住宅部分については、約40cmの盛土があるため、基礎が20cmであったが、遺構に影響がなかった。しかし、車庫のカーポートについては、その基礎部分が遺構に影響を与えることがわかり、発掘調査をすることとなった。

発掘調査は2012(平成24)年6月4日に実施した。開発対象面積は324.32㎡で、調査面積は1.73㎡である。調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位 (Fig. 73)

宅地の表土が30cm、その下に耕作土(灰色土)が厚さ10cm、その下に暗茶色土の包含層が厚さ10cm程あり、それを除去すると黄灰色土の地山に切り込んだ遺構が確認できる。

(3) 検出遺構 (Pl. 11)

車庫予定地内の基礎部分4ヶ所をスポットで調査したが、2ヶ所が擾乱で遺構面は荒れていた。その他の2ヶ所では大きさ0.3~0.4mのビットや土坑状の遺構が検出され、深さは最も深くても0.35m、全体として0.1~0.2m前後の深さである。

(4) 出土遺物

296SX008 出土遺物 (Fig. 73)

黒色土器

碗 (1) A類。復元口径18.0cm。胎土は淡橙白色を呈する。内面にはミガキ c を施す。

碗 c (2) A類。胎土は淡橙黄色を呈する。内面には細かいミガキ c を施す。

第296次調査暗茶色土出土遺物 (Fig. 73)

須恵器

蓋 c (3) やや貧弱なツマミを貼付する。外面は焼成時の被熱で荒れている。

蓋 3 (4~7) 4は折り曲げた口縁部で、外面上半部は回転ヘラケズリで、内面は不定方向のナデで、天井部に僅かにヘラ記号が残る。5は外面上半部回転ヘラケズリ。色調は暗灰色を呈する。6は内外面ヨコナデで、色調は暗茶色を呈する。7は口縁端部を僅かに擴み出している。外面上半部は磨減するが、ヘラ切りの後未調整もしくは粗いヨコナデを施す。焼成還元ともやや不良で、色調は白黄色や灰色を呈する。

蓋 4 (8) 口縁部は若干歪んでいて、内面はヨコナデだがやや凸凹している。外面の殆どが粗いヨコナデで若干凸凹している。焼成還元とも良好で、色調は暗灰色を呈する。

皿 a (9) 外面底部は回転ヘラ切り未調整。内面はやや平滑である。色調は暗青灰色を呈する。

坏 a (10) 復元口径12.2cm、器高4.0cm、復元底径8.6cm。焼成還元とも良好で色調は灰色を呈する。

坏 c (11、12) 11は復元高台径9.0cm。高台は小さくやや貧弱である。外面底部は回転ヘラ切りの後粗いナデである。色調は淡灰黄色を呈する。12はやや潰れた高台を底部端に貼付する。

土師器

坏 a (13) 色調は淡橙白色で、全体的に磨減する。

坏 d (14) やや丸みのある体部で、底部ヘラ切り、内外面は磨減するが内面にはミガキが施されていたように見える。焼成やや不良で、色調は淡橙黄色を呈する。

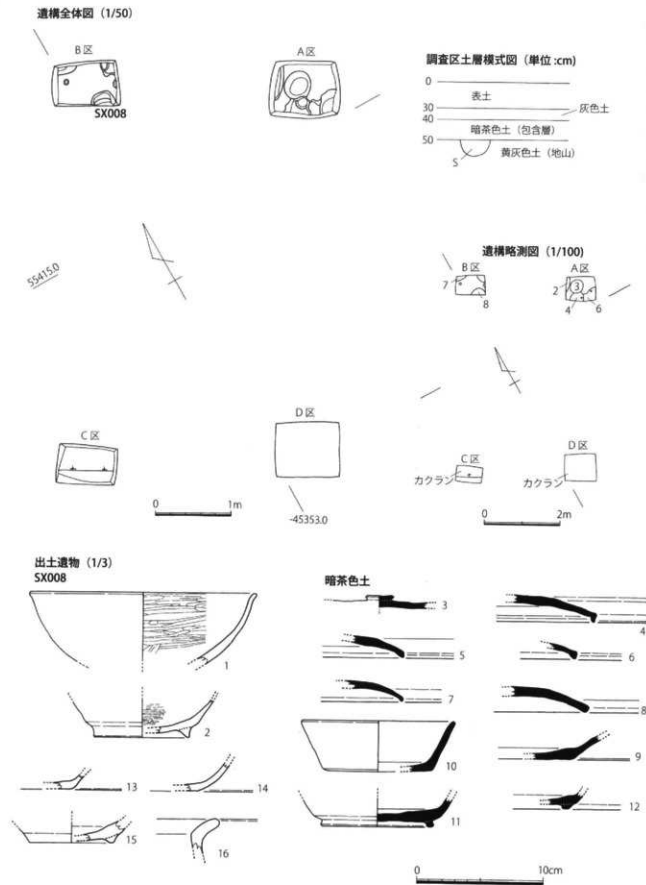


Fig. 73 第296次調査遺構全体図 (1/50)・出土遺物実測図 (1/3)・略測図 (1/100)・土層模式図

椀c (15) 復元高台径6.7cm。底部端に三角形の高台を貼付する。焼成やや不良で、色調は黄橙色を呈し、全体的に磨滅する。

甕 (16) 焼成不良で磨滅も目立つ。色調は淡橙色や黄白色を呈する。

(5) 小結

宅地の整地層の下には、耕作土や包含層が残されており、遺構は比較的良好な状態で残されていた。遺構として奈良～平安時代中期のビットや土坑を確認したが、調査範囲はわずかであったため、詳細なことは言及できない。遺物は、包含層(暗茶色土)から奈良時代のものが多く出土した。遺構や包含層の残り具合からすると周辺は遺構が良好に残存していることが予測される。

表17 第296次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	時期	地区
2		ビット		平安時代	AK
3		ビット		古代	AK
4		ビット		古代	AK
6		ビット		奈良時代?	AK
7		ビット		古代	BK
8	296SX008	ビット		10世紀中頃前後	BK

表18 第296次調査 出土遺物一覧表

5-2	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	陶 器 器蓋3、甕3、甕4、杯、甕、壺×壺、破片
5-3	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、甕、破片
5-4	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-5	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-6	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-7	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-8	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-9	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-10	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-11	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-12	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-13	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-14	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-15	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片
5-16	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片	黄灰色土 (AK)	土 餅 器片、破片

8. 田中の森伝承地の立会調査

(1) 田中の森について

所在地は、太宰府市都府樓南1丁目454-2で、地番面積は75㎡である。

田中の森とは、田中長者と二日市の虎丸長者が勢力くらべをした昔話に登場する田中長者の墓と伝えられる場所である。この昔話は市内で著名な昔話のひとつであり、全国放送されていたTBSテレビ「まんが日本昔ばなし」にも昭和56年11月7日(放送第314回目)に登場している。

(2) 調査に至る経過

2008(平成20)年

2月18日、通古賀区から、田中の森の敷地交換と樹木伐採等について相談があった。敷地交換の理由については、田中の森が道路に接していないことにより、個人地を横切らないと入れないため、個人地の利用に支障をきたすこと。樹木伐採については、敷地を越えて繁茂してしまい、隣接する建物に影響が出るなど様々な管理上の理由からであった。その後数回協議を行い、通古賀区の希望通り、土地交換、樹木伐採、板碑の移設、そして、説明板を設置することとなった。

2月20日、現状の写真撮影、実測調査を行う。調査は宮崎亮一行だった。

10月、クロナゲモチの枯死を確認。

12月10日、お蔵いを行う。通古賀区関係者9名、工事関係者3名が参列。

12月15日、石材の除去開始。

12月16日、サザンカ等の植木植樹。翌17日、板碑などの設置。

12月18日、移設整備完了。

2009(平成21)年

9月、通古賀区が説明板を設置。

2011(平成23)年

2月頃、クロナゲモチとタブノキが伐採され、その後駐車場となる。

(3) 田中の森の伝承

田中の森の伝承について、記載されている文献と内容は、以下の通りである。

『王城神社縁起』寛政2(1790)年

「古跡 田中氏屋敷ハ今村の東、社の丑寅にありしといへり、長者屋敷と云所村の西側、鞠屋の井の末申にあり、昔武蔵ノ長者武蔵寺の北に其跡アリ王城大明神に参詣せし時、俄に雨降りて笠を百箇國術の長者に借りけるか、返す時一眼一人に並つゝ宛持せ返しけるとなり、田中の森、くれは、市の上など前に誌せり、其余省略しぬ。」

(引用文献：太宰府市『太宰府市史 民俗資料編』1993年)

『太宰府旧蹟全図北図』文化3(1806)年

「田中ノ森 ツカアリ 熊別ノ廟也」

(『大野城太宰府旧蹟全図北図』原因より)

『筑前国統風土記拾遺』文政年間

「王城大明神社 …(略)。また、村の西北に小森あり。俗に西ノ陵と云。爰にも神あり。社はなし。田中の森とも云。これ田中熊別の墓なりといふ。この人ハ神武天皇東征の御時屢従せし人のよし當

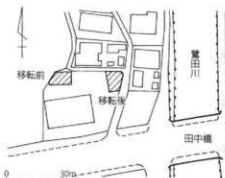


Fig. 74 田中の森位置図(1/2000)

里及宦宮の傳説あり。」

(引用文献：福岡古文書を読む会ほか『筑前国統風土記拾遺(上巻)』文獻出版 1993年)

『福岡縣地理全誌』明治13(1880)年

「東陵西陵 …(略)。又村ノ西北五町二。田中森ト云アリ。石神アリ。高五尺。幅三尺。田中熊別ノ墓。俗ニ。西陵ト云。舊記ニ。村ノ東北ニ。其宅地アリト記セトモ。今里ニ二間フニ。知ル者ナン。此人ハ。神武天皇。東征ノ御時。屢従セシ人ノ由言傳フ。一説ニハ。蚊田皇子ニ附従フ人共云…。」

(引用文献：畿西日本文化協会『福岡県史近代史料編 福岡県地理全誌(五)』福岡県 1993年)

『郷土読本』上巻 昭和13(1938)年

「田中長者 ムカシムカシ、トホノコガニ、田中長者トイフ大ヘナ金持ガ スンデキマシタ。「オイヘガクン、オクラガクン、田中長者ハモノモチ長者。オ米ノ山ニ金ノ山。」村ノ子ドモタチハカウイッテ ウタヒマシタ。オイヘノヒロサハ、ドノクラキアルカ、ワカリマセン。タンボノヒロサハ コチラノ山カラ、ムカウノ山マデアッタトイヒマス。

アル日、トナリ村ノトラマル長者トイフ大金モチガ、千人ノケライワツレテ、サイフノオ寺ニエキマシタ。ソノカヘリミチノコトデス。トチュウデハニカニ空ガクモツテ、雨ガザアザアフツケキマシタ。トラマル長者トケライタチハ、チカクノ田中長者ノウチヘカケコソデ、「ドウゾ カサヲ カシタダサイ。」ト タノミマシタ。スルト、田中長者ハニコリワラツテ、スグクラノ中カラ、千ボンノカサヲ出シテカシマシタ。ドノカサヲ見テモ、アタラシイリッパナカサデス。ケライタチハ、ビックリシテシマヒマシタ。トラマル長者ハナダカクヤシキガシタノデ、カヘリミチデ、「ドウカシテ、田中長者ヲオドロカシテヤリタイ。」ト、ココロウチデオモヒマシタ。

ソレデ、アクル日、スグニ、大ゼイノケライノ中カラ、大メシヒキニエンアラビダシマシタ。「オマヘタチハコレカラ田中長者ノウチヘイッテ、カサヲカヘシテオイデ。」トイヒマシタ。長イ長イカサノギャウツツツキマシタ。田中長者ノウチヘツツノハ、オヘルスギデシタ。ミンナヒロリツパナオザシキヘトホサレマシタ。ソシテ、大ソウナゴチソウガ出マシタ。ソコヘ田中長者ガ出テキテ、「ミナサン、ヨクキテダサイマシタ。ワタシノウチデゴハンヲ 少シタキスギマシタカラ、ドウゾタクサントバテ カヘツケダサイ。」トイヒマシタノデ、ツカヒモノハ、イヨイヨビックリシテシマツタトイフコトデス。」

(引用文献：水城尋常高等小学校『郷土讀本 上巻』1938年)

『太宰府市史 民俗資料編』平成5(1993)年

「田中長者 昔、通古賀に田中長者という大金持が住んでいた。広い屋敷と、こちらの山から向こうの山までいわれるほどの田畠を持ち、「お家が千軒、お蔵が千軒、田中長者は物持ち長者、お米の山に、金の山」と、村の子供たちは、はやした。ある日、となり村の虎丸長者が千人の家来をひきつれて、宰府のお寺にお参りをした。その帰り道、にわか雨が降りだしたので、近くの田中長者の家へかけこんで、「どうか傘を貸してください」とたのんだ。田中長者は困った顔もしないで、にっこり笑い、蔵の中から1000本の真新しい傘をだして貸した。虎丸長者の家来たちはびっくりし、虎丸長者は口惜しくならなかった。明るく日、虎丸長者は家来の中から大飯喰いを千人選んで、きくの傘を渡してこい」と命じた。長い傘の行列が続き、1000人目の家来が着いたのは昼過ぎになった。田中長者は、その1000人を広い屋敷に通して、「皆さん、よくおいでになった。ちょうど御飯を炊きすぎて困っていたところです。どうかたくさん食べてください」と、大そうな御馳走でもなした。虎丸長者の家来たちは、いよいよびっくりした。」

(引用文献：太宰府市『太宰府市史 民俗資料編』太宰府市 1993年)

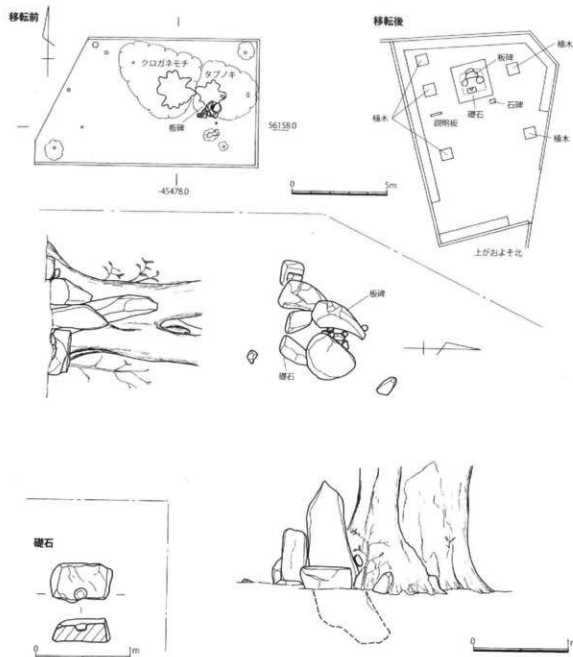


Fig. 75 田中の森現況図及び碓石実測図 (1/200、1/40)

(4) 調査成果

1. 石造物

板碑 (Fig. 75)

尖り気味の自然石板碑で、碑高176cmだが、地下に68cm埋没していたため、地上部は108cmである。石材は花崗岩で、花崗岩特有の玉ねぎ状に割った石材を用いている。石材に梵字や銘文は確認できない。板碑を除去した地盤には特に遺構は認められなかった。

碓石 (Fig. 75)

他所から持ち込まれたと考えられる碓石で、大きさ66cm×42cm、厚さ22cmの長方体である。上面端に径13cm、深さ5~8cm、底径9.5cmの円形削り込みが彫られている。周囲には花崗岩礫が集積されているが、加工は見られない。

2. 樹木

調査時点で大木はクロガネモチとタブノキの2本であったが、昭和13年の『郷土読本』掲載の写真を見ると、5本以上の大木の姿が広い範囲に写されている。その後伐採や剪定が行われ、縮小していったと推測される。

クロガネモチ

幹回りは2.85m、高さ2.4m付近から二又になっており、樹高は枝がない状況ではあるが、北幹が約8.4m、南幹が約7mを測る。全体的に若干西側に傾いている。枝葉が繁っていた時は、樹高は13m前後であった。2006(平成18)年7月初旬に強剪定された影響により、2008年調査時点で南幹に僅かに葉が残っていたものの、樹皮は剥がれ落ち、胴吹きも勢いが全くなく、枯死寸前であった。同年10月には胴吹きなど春先に出ていた枝葉は落葉し、樹皮の落下も目立ち始め、枯死したことを確認した。なお、このクロガネモチは同種としては市内最大の幹回りを誇っていたため、市指定天然記念物の候補にも挙げたが、上述のように衰弱が目立ち始めたため見送られていた。

タブノキ

樹高約5m、幹回り2.15m、高さ1.2m付近で二又に分かれる。強剪定されるも樹勢は旺盛であった。

3. 地盤状況

現地表面から深さ25cmまでは茶褐色土でビニールやタイルが含まれていた。その下位は明茶褐色土で僅かに須恵器蓋3、坏c、土師器片が含まれていた。深さ55cmで真砂土のような地山に達する。遺構は特に確認することはできなかった。

(5) 小結

田中長者の昔話は、記録からも変遷がわかるのだが、基本的には口承であるため、時代と共に面白おかしく、また長者伝説でありがちなフレーズが加味されながら、現代に伝わっている。

長者に関する昔話や地名が残る地域には、古代官衙が確認されている例が多い。主な遺跡を列挙すると、長者が池の隣接地で見つかった御原郡衙と推定される小郡官衙遺跡(小郡市)、豊前国守関係の官衙跡である福原長者原遺跡(行橋市)、下毛郡衙と推定される長者屋敷遺跡(中津市)、コ字形配置の官衙跡である長者ヶ平官衙遺跡(栃木県)、伊勢国府跡と推定される長者屋敷遺跡(三重県)、瀬島駅家と推定される長者山遺跡(茨城県)などがあり、主に古代の官衙関係の遺跡が多い。つまり、官衙のような施設が、時代が下るにしたがって、官衙施設→立派な建物→長者の屋敷と変化し伝わった結果ではないかと推測される。『大宰府旧蹟全図北園』にも通古賀の集落内に「長者ヤシキ」と記され、現在でも小字「扇屋敷」が残っている。今のところ官衙に該当するような遺構は確認されていないが、大宰府条坊の設計に関して、田中長者に関する伝承地は、ただの昔話では終わらない、初期の大宰府を知る上で重要な手がかりを秘めている可能性がある。

田中の森は、元の場所も移設された場所も、地元の古老からすると田中の森の敷地の一部という認識があり、今回の選定理由のひとつとなっている。樹木は伐採され、場所も変わったが、田中の森として伝承地が残されたことに通古賀地区の人々の思いが表れているものと考えたい。そして、これからも長く後世に残っていくことを期待したい。

参考文献

井上信正「大宰府条坊について」『都府楼 40号』古都大宰府保存協会 2008年

V、調査まとめ

今回報告した調査の主な所見は以下の通りである。

- ・奈良時代～平安時代中期の遺構が中心。(第178・184・296次調査)
- ・政庁Ⅲ期の遺構が中心。(第228次調査)
- ・東西道路(条路)の検出。(第178次調査)
- ・南北道路(坊路)の検出。(第178次調査)

今回報告した調査では、井上信正条坊復元案を補足するような所見が多くみられたため、昨年度井上氏が執筆編集した『大宰府条坊跡44』の「大宰府条坊研究の現状」と共にご覧いただけるとより理解しやすいかもしれない。

鷺田川の南側と西側で行われた今回の調査では、政庁Ⅰ期とⅡ期の遺構を中心とした第178・184・296次調査と政庁Ⅰ期とⅢ期の遺構を中心とした第228・232次調査と両極端な遺構状況に時期差が見られた。周辺の調査状況でも、このような傾向は以前から指摘されていたことではあったが、井上氏はさらに踏み込んで、政庁Ⅱ期の右郭は8坊までだった可能性を指摘している。平安後期になるにしたがって、条坊の南側つまり鷺田川南岸地域は衰退し、都市の広がりが南北方向から条坊の枠を越えて東西方向に広がっていく状況がみられる。その要因のひとつとして律令制の衰退と安楽寺(太宰府天満宮)などの寺社の隆盛が関係しているのかもしれない。

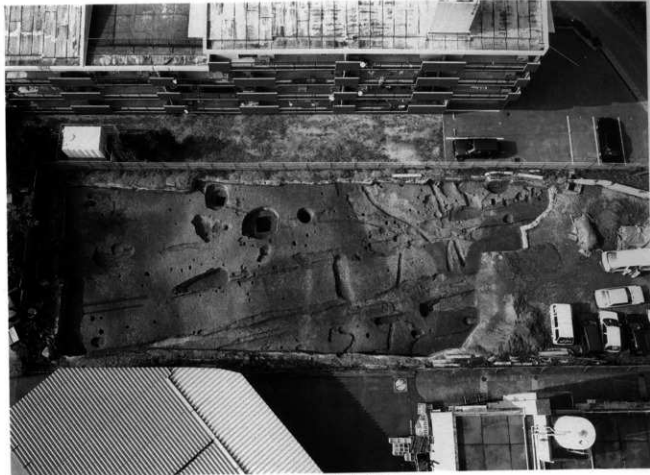
現在単純に言っている東西各12坊・南北22条の条坊の範囲について、必ずしも政庁Ⅰ期からⅢ期まで同じ条坊域を形成していたとは限らないことを、今回のような調査結果が表している。

参考文献

- 太宰府市『太宰府市史 考古資料編』1992
- 太宰府市教委『大宰府条坊跡XIV』太宰府市の文化財第48集 2000
- 太宰府市教委『大宰府条坊跡27』太宰府市の文化財第81集 2005
- 太宰府市教委『大宰府条坊跡44』太宰府市の文化財第122集 2014

写真図版

写真図版には遺構の主な写真を掲載している。その他の遺構写真および遺物写真は、付録のCDにカラー情報で収録している。



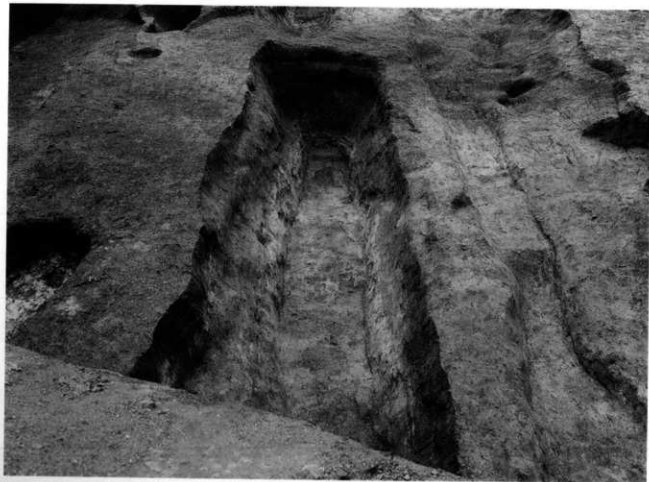
第178次調査地全景（南から）



第178次調査道路遺構全景（東から）



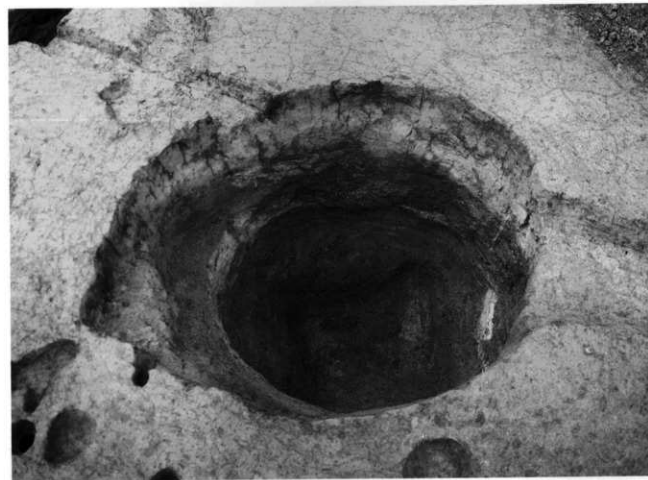
第178次調査東側全景 (南西から)



178SD035 東半分完掘状況 (東から)



178SE020 全景 (東から)



178SE030 全景 (南から)



第184次調査全景（上が北、南西部埋め戻し後）



184SB005・010 検出状況（北から）



184SB020 検出状況（南から）



184SB025 検出状況（南から）



184SE015 完掘状況 (北から)



184SK001 完掘状況 (西から)



第228次調査全景 (上が北)



第228次調査西側調査区全景 (上が南)



第232次調査全景（北から）



第247次調査全景（北東から）



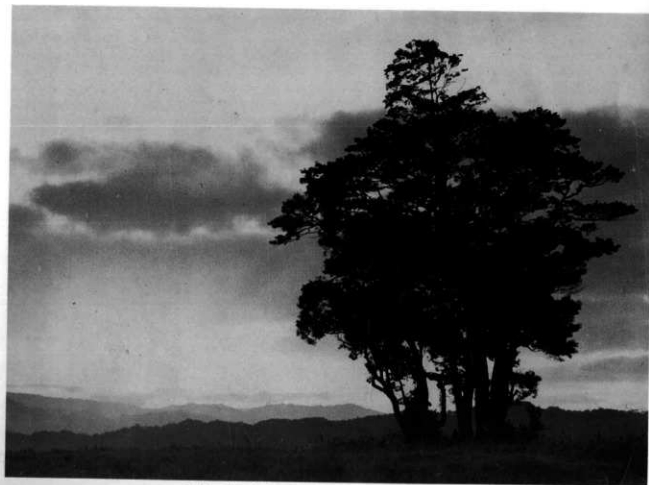
第296次調査地全景（東から）



第296次調査A区全景（西から）



田中の森旧観 (2003年)



田中の森旧観 (昭和30年頃、陶山鐵也氏撮影)



板碑の旧状 (東から、2008年2月)



田中の森移転状況 (南から、2008年12月)

